

---

# 修羅の巫女 3 《激闘編》

暁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

修羅の巫女3 《激闘編》

### 【Nコード】

N0762D

### 【作者名】

暁

### 【あらすじ】

第二次ホーリナーラグナロクから数日が経ち、平穏が戻った世界。しかしその平穏が満足出来ない者達、そう、ホーリナーとは戦いこそが全ての世界、強き者の世界。そして今始まる、ホーリナー最強を決める戦いが、全世界の腕に自信のあるホーリナー達がVCSOの中心、バチカンに集まった。

## 01：不吉な始まり（前書き）

遂に始まりました『修羅の巫女』 3 作目！

今回は息抜き、そして次回に繋がる大切な作品になりそうです。

割と真面目にココまで進んで来たのでちょいと遊んでみようと思います。

## 01：不吉な始まり

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

3日前

小部屋、そこは殺風景であるのは窓とテーブル、そして椅子のみ、窓から下を見れば5、60mはくだらない。

窓からの日の日射しはそこにいる3人を妖しく照らしている、そして3人の手元には湯気を上げるコーヒー、お菓子等は無くブラックのコーヒーのみでその場を繋ぐ3人の男達、その顔は真剣で、まるで世界大戦前とすら思わんばかりの剣幕。

しかし、そんな真剣な表情で3人が話しているのは世界を左右する事でも、何かが掛っているわけでもない、そして男、毘沙門天は机を叩いて身を乗り出す。

「ぜってえに阿修羅が一番だ！」

そして元帥が違うね、と毘沙門天の意見を一掃し、今までに見せた事のないような鋭い目付きで毘沙門天を睨んだ、それは殺気、殺意、そのようなモノにすら受け取れる。

「君達、まだまだ何も知らないね、ロシア支部のチャンティコちゃんの間違いなく一番だよ」

「否、祝融也」

「ロリコンは黙ってる！阿修羅が一番可愛いんだよ！」

そう、元帥とランギ、毘沙門天が話をしていたのはホーリナーで誰が一番可愛いかというものの、いつになく熱い激論を交わす3人、お

互譲ろうとはせず、意地の張り合い。

まだまだVCSOは平和である証だ、いや、呑気の間違いであろう、つい数日前にはホーリナーラグナロクがあったくらいだ、呑気すぎるくらいだ。

その話の流れで今の世界各国のホーリナーの中で誰が一番強いかわかる話に、そんなの相性によって変わるが今の3人にとって関係ない、何故なら今まで持っていたコーヒーがビールに変わっているからだ、酔ってしまった3人に常識などは関係ない、そして居酒屋の親父同士の喧嘩のように脈絡も信憑性も正当性も何も無い。

「絶対に阿修羅が一番強いって言うてるだろうが！アイツは天竜の巫女だぜ！天竜は最強なんだよ」

「毘沙門天、親馬鹿、最強、帝釈天」

「分かってないねえ、最強はやっぱりタナトスでしょお、戦いの報告書がメチャメチャなのを見ると何かを隠してるよ」

「ダメエラ！阿修羅が最強じゃないって言うのかよ！？」

既に得物、十字槍の岩貫を構えている。

「僕と殺り合おうって言うの？」

元帥は見えない速さで得物を取り出し、毘沙門天に攻撃を加えようとするが、毘沙門天は岩貫でそれ弾いた。

「不理解者、抹殺」

ランギは毘沙門天を得物である紐、アヌで毘沙門天を縛った、しかし長年同じ戦場で戦っていた仲間、それくらいの動きのクセや対処

法は自然と理解していた。

毘沙門天はランギに突っ込むと肘先だけでランギを掴み、窓の外に放り出した。

しかしランギは冷静に道連れの道を選ぶ、元帥にも巻き付けて落ちる、毘沙門天、ランギ、元帥は地上50m以上もある部屋から飛び出した。

元帥と毘沙門天は空中でアヌをほどくと体勢を整える、そして毘沙門天は岩貫をランギに投げた、しかしランギはアヌを巻き付け勢いを殺さずに元帥に投げ返す、岩貫は元帥にたどり着く前に元帥の得物により方向を変え毘沙門天に向かう、それでも元帥の得物は見えない。

岩貫の移動速度は既に200km/hを超えている。

先に着地したのはランギ、そして頭上からは岩貫の切っ先をランギに向けた毘沙門天が、毘沙門天はそのまま岩貫をでランギを押し潰そうとする、ランギは軽々と避けると毘沙門天は地面に突き刺さった、その時の音は爆音、凄まじい音がバチカンに響き渡る。

毘沙門天の今度のターゲットは元帥、砂塵で見えない中からいきなり飛び出す岩貫、元帥はギリギリで得物を取り出し、岩貫に巻き付けて防いだ。

「やっと得物を出したか！」

元帥の得物はムチ、名はヴァルナ。

元帥は岩貫を捨てるとヴァルナを軽く振った、凄まじい勢いで毘沙門天に向かう、しかし毘沙門天は上空に逃げる、ヴァルナは地面を深くえぐった、毘沙門天の落下跡は既に10mの深さにもなっている。

ランギはその毘沙門天の右腕にアヌを絡めた、そして元帥は左腕にヴァルナを絡める。

「こんなもん！」

毘沙門天は力一杯引つ張ると二人は宙に浮いた、そして再び岩貫を顕現すると同位置にいる二人に振り下ろす……………。

音を聞いて駆け付けたダグザ、モリガン、タナトス、帝釈天、他の者達は任務のタメに出払っている。

4人はその光景を見てため息しか出ない、それは戦争、一ホーリナの戦いにしては惨状が酷すぎる、地面に当たればそこはえぐれ、一度攻撃に入れば五月雨のように何発も攻撃が放たれる。

「ははは……………、こんなの僕たちにどうしろっていうんだい？ 現役の新選10階なんかミジンコだよ」

「モリガン、俺が奴らを一瞬止める、その間に地に礫にしろ」

「じゃあ俺様が気を引くぜ」

「プロテクティブ【防護】」

帝釈天が走り出した、タナトスは得物である大鎌、スケイルを投げ飛ばしてアヌとヴァルナを絡めた、そしてそのスケイルを帝釈天が掴むとランギと元帥を引き寄せる、毘沙門天は迷わず岩貫を帝釈天に振り下ろした、岩貫は帝釈天の肩に当たるがダメージはない、そしてそのまま4つの得物をぐちゃぐちゃに絡める。

「グラビテーション【重力】」

その瞬間元帥、ランギ、毘沙門天は地面に強く叩き付けられる。

「終わりだ、馬鹿共」

ダグザが3人を見下す、3人は殺気に満ちた目でダグザを睨んだ。

「テメエ！横槍入れるんじゃないやねえよ！」

「死罪決定、覚悟準備」

「いくらダグザでもコレばかりは許せないな」

「貴様ら、何をしていた？」

「あれ？おい、俺達何してたんだ？」

「……………忘却」

「何か分かんないけど戦ってたねえ」

4人の神選10階は頭を抱えて大きなため息を吐いた、本当の馬鹿だ。

先ほどからビールの匂いがプンプンする、酔った勢いでこれだけの事をしたら本部が崩壊する。

「ああ！テメエらが阿修羅を弱いつて言うからだ！」

「否、最強帝釈天也」

「だからタナトスだって言ってるんだよ！」

「帝釈天さんよお、これは俺様のせいかな？」

「いや、馬鹿な爺のせいだ」

まだギヤーギヤー騒ぐ3人、そしてダグザが黙れと一言叫ぶ、それにより再び放たれる殺気。

「そんなに気になるなら決めれば良いだろ、世界からホーリナー集めて、戦わせれば早い話じゃないのか？」

「それだぜ！」

「名案」

「じゃあココに第一回ホーリナー世界大会を始める事を誓います」



「おい、ダグザ、テメエまた面倒な事しやがって」

「すまん、俺の失態だ」

「まあ良い、それもまた一興だ」

「なんか楽しそうだね、今までにない試みだよ」

「じゃあそれで神選10階でも決めちゃおうか？そう入れ替えてやつ？」

「……馬鹿が！」「……」

そうして決まった、神選10階を決める、そしてホーリナー最強を決めるトーナメントが、酔っ払いの喧嘩からVCSOが変わろうとしている。

## 02：始まる…………

V a t i c a n V C S O h e a d q u a r t e r s

阿修羅、緊那羅、沙羯羅<sup>しゃがら</sup>、摩和羅女<sup>まわにょ</sup>はバチカンにいた、何かのお祭りと思わんばかりの豪華な飾り付け、今までのバチカンから考えられないような賑わい、そして戦いにはつかわしくない屋台の数々、世界各国の屋台がある。

そして世界各地から集まるホーリナー、そして阿修羅達が入って行った途端に会場がざわめく、それもそうだ、“天竜の阿修羅”“音速の緊那羅”“百中の摩和羅女”、そしてランギがいなくなった今対大量戦術世界一の“乱殺の沙羯羅”、この4人は世界でもトップクラス。

今や日本支部は各国支部で最強を誇っている、神選10階にいる“殺壁の帝釈天”も含めその力は神選10階ですら一目を置く。

会場には各国の待合室がある、そこには試合場を写すモニターがある、それによりココからでも四方八方から試合が観戦出来る。

阿修羅達は歩いていると“元神選10階”と書かれた待合室を見付けた。

そこにいるヘリオスは一瞬で阿修羅を見つける。

「阿修羅！」

それにより全員が阿修羅の方を向いた、そして駆け寄るヘリオス、帝釈天とタナトスはゆっくりと同時に立ち上がり、睨み合う。

「阿修羅久しぶりッスね」

「はあ、そんな経ってないでしょ？」

「阿修羅あ、やっぱりダーリンとラブラブじゃない？」

「あら、色男もいるじゃない？」

緊那羅はタナトスを見てクスリと笑う、タナトスは顔を赤くして明後日の方向を見る。

「タナトスだ」

「じゃあタナトス、お手柔らかに」

「そんなもん関係ない、俺様と当たれば斬り刻むまでだ」

「なんだタナトス、貴様こんな男女が好きなのか？」

「ああ？ぶつ殺すぞ？」

「はあ、貴方達喧嘩以外に何か出来ないの？」

阿修羅が呆れて言うのと二人はそっぽを向いて合い入れようとしない。

「このタナトスじゃないイケメンは阿修羅のお兄さんなんですよ？」

「まあ一応ね」

「私歳上ってタイプかも」

「はあ、沙羯羅、帝釈天は私の双子の兄よ」

「」「」「そつなの！？」」「」

神選10階待合室にいるダグザを抜いた全員が驚く。

「何だ貴様ら、知らなかったのか？」

「いやだって、何か帝釈天って大人っぽいじゃないツスカ」

「貴様が子供なだけだ」

「阿修羅と双子には見えねえな、こんな老けた10代だったら俺様は自殺を考えるぜ」

「20を越えても、俺様」と言うのよりは堪えられるな」

二人は胸ぐらを掴みあう、タナトスは怒りを剥き出しにしているが帝釈天はポーカーフェイスに見える、しかし、その目は殺気に満ち溢れている、周りにもビリビリと伝わる緊張感、各国ホーリナーは怯んでしまう者もいる。

「はいそこお！シューリョーだよ、戦いたかったら勝ち残ってちゃんとした場で決めなよ、じゃないと全力で取り抑えちゃうよ？」

2人は壇上からマイクを通して喋っている元帥の全力を見たことがない、だから怖い、あの呑気な奴にどれだけの力が隠されているのか、果たしてこの2人である元帥に勝てるのか。

「じゃあホーリナーは自分達の支部のプレートの前に並んでえ」

「はあ、これじゃあ運動会じゃない」

「たまには良いんじゃない？皆任務ばかりで疲れてるじゃない」

「はいそこ！阿修羅ちゃんと緊那羅ちゃん！」

元帥は壇上から阿修羅と緊那羅の事を指差す、それによりざわめく会場、阿修羅や緊那羅の存在に気付いていなかった者達だ、この2人程の人間がいる、改めて実感させられた。

「まああれだよ、一番になった支部には全員に有休をあげちゃうよ」

更に盛り上がる会場、俄然やる気が出る会場、しかし阿修羅は気付いていた、喜ぶ緊那羅達を後目に呆れて頭を抱える。

「どうしたのよ阿修羅？あんたがいれば優勝なんて余裕でしょ？」

「そうだ！阿修羅が最強に決まってる！」

「じゃんじゃん勝ち進んじゃおうよ！」

「はあ、貴女達、この大会の落とし穴、分かっている？」

「「「落とし穴？」」」

3人は首を傾げた、阿修羅はやっぱりため息を吐く。

「この大会、支部同士の戦いじゃなくてホーリナーの戦いなの？  
……………つまり、出るのは私達支部員だけじゃなくてあそこにいる  
化物、神選10階も出るの」

コミカルなオーバーリアクションで驚く阿修羅以外の3人、そして  
阿修羅は神選10階を見るとヘリオス、ダグザ、そしてあの帝釈天  
までもが妖しい笑みを浮かべて手招きしている。

「はあ、帝釈天まで、……………つてああ！」

阿修羅が叫んだのに緊那羅達はビックリした。

「どうしたのよ阿修羅？」

「やられた、この大会の本当の意味、そんなの最強を決める事じゃない」

「じゃあ他に何よ？」

「あのエロ元帥、この大会かなりの確率で私と緊那羅は神選10階  
入り出来るくらいの順位はいく、そして有休、これは私達を神選1  
0階にする大会なのよ」

阿修羅と緊那羅は頭を抱える、仮に有休が取れたとしてもそれは阿  
修羅か緊那羅が神選10階入りを意味する（元帥達が酔っ払った勢  
いで決めた事はダグザ達以外誰も知らない）。

「じゃあ今回の種目を紹介するよ。」

まずは遠距離最強を決める的当て、コレはただの的当てじゃないから覚悟してね、ちなみにこれは神技抜きだよ。

次に対大量戦術最強を決める早殺し、これは大量の敵に包囲された状態でどれだけ短時間で殺せるか。

最後に最強を決めるトーナメント、コレは神技だろうがなんだろうが使いたい放題だよ、VCSOが新たに開発した装置だから死ぬことはない、だから力一杯殺しあっちゃって構わない」

盛り上がる会場、神選10階にはなれなくても一点特化で名を轟かせられる。

しかしまだ誰も知らない、神選10階の本当の強さを、真に強き者は全てにおいて強き者という事を。

### 03：遠距離型最強

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

的当て、それは名前とは裏腹にそんな生易しい物ではない。

予選だくでほぼ全滅、残ったの元神選10階であるアルテミスとニヨルド、そして日本支部の摩和羅女まわらじょのみ。

予選の内容、それはステージ2の右手親指第一関節に当てるというもの、一発のみの勝負。

しかも実戦さながら、ステージ2は動き本気で選手を襲おうとする。遠距離型の殆どが投げるのに焦り過ぎて的を外す、狙い過ぎた者は攻撃を受け即失格。

まずはニヨルド。

ステージ2は本気で走って来る、喉を右手で一突き、ニヨルドは側宙したかと思うと体の向きをステージ2に向ける。

「がら空き！」

逆さまになったまま得物であるナイフ、テイルヴィングを投げる、

しかも手首のスナップのみで。  
ティルヴィングは右手親指第一関節に当たるとピタリと止まった。

『コレが元神選10階の力だあ！あの不安定な状態、そして正にピタリと当てる正確性！

見たか支部員共！？コレが凡人と化物の差だあ！』

「化物なんて酷いだろお？」

ニヨルドは実況に怒り、軽く頬を膨らませながらフィールドを後にした、それによりお姉さまホーリナーの人気を一気に集めた事にニヨルドは気付いていない。

次はアルテミス、自分が最後じゃないのに怒るがコレは抽選、ただの運。

ステージ2は不規則な動きでアルテミスを翻弄しようとする、しかしアルテミスは構わず得物であるチャクラム、フルムーンを投げる。フルムーンは弧を描いてステージ2の右手親指に向かう、しかしステージ2はそれを避けようと右手を動かす。

『まさか！あのアルテミスが逃したというのか！？』

「満月だけが月じゃないよ、月は気まぐれなのさ」

フルムーンは右手を追って動きを変える、そして右手をかするよう親指の第一関節から先を切り落とした。

『なんという事だ！？こんな動きが暗器で可能だというのか！？』

「節穴共に教えてやるよ、あれは右手をずらした時の気流に合わせ、フルムーンが動いただけ、地球から離れないのも月なんだよ」

『あり得ない！コレが遠距離型最強の力だというのか！？こんな事



が本当にあつて良いのか！？  
避ける事が出来ない攻撃、ルール違反とは言わないものの、力の差が離れすぎだぞ！」

アルテミスが元神選10階の待合室に戻ると膨れっ面をしたニヨルドがいる。

「ずるいよ！僕がかつこよく決めたっていうのに、何であんなカツコイイ事しちゃうんだよ！？」

「まあ頑張れ、二番手」

ニヨルドはプンブンという表現が似合いそうな地団駄を踏む、アルテミスは鼻で笑いながら椅子に座った。

『遂に最後！日本支部の“百中の摩和羅女”だ！まさか元神選10階のみという何ともつまらない結果に終わってしまうのか！？』

摩和羅女はフィールドに立つ、そしてステージ2がフィールドに現れ、スタートの合図が掛かる、その瞬間ステージ2の右手親指第一関節から先がポトリと地面に落ちた。

『……………、ど、どという事だ！？何が起きたというのか！？』

元神選10階の面々は目を丸くして画面に食い入る。

画面には笑顔で緊那羅に頭を撫でられる摩和羅女が写る、そして緊那羅はモニターのカメラを見た。

「見たか？コレが日本支部の力だよ」

『今超スローカメラからの映像が届いた！お前ら、目ん玉かつぱじって良く見ておけ！コレが本当の神業だ！』

スローカメラに写るスタートの合図、その瞬間一瞬で摩和羅女の手元に得物である暗器の針、針鬼が現れる、そして摩和羅女は人差し指と親指のみで針鬼を弾き出した、それは弾丸のようなスピードでステージ2の親指を貫く、その間0.3秒。

『あり得ない！何だこれは！？本当に一支部員なのか！？コレは正に遠距離型最強、歴代最強と言っても過言ではない！暗殺の天才はココにいたあ！』

会場の盛り上がりはピークに達する、恐ろしい程の速射、そして正確性、暗殺に関しては右に出る者はいない。

元神選10階の待合室ではアルテミスが明らかな不機嫌をまき散らしている、今回の大会の恐ろしさ、それは噂や下馬評ではなく、実際に“最強”というのが分かる事。

それは今まで神選10階と言われていた者達を脅かす結果となる。

「なんだよ、本当の最強は俺様だけって事か？遠距離型最強の看板も下ろす時期が近付いてるんじゃないのか？」

「まあ貴様が最強というのは納得出来ないが、あれだけの事やられてまだ遠距離No.1を名乗る神経があるかどうかだな」

アルテミスは殺気を込めてタナトスと帝釈天を睨む。

「大丈夫ツスよアルテミス！実戦向きなのはアルテミスじゃないツスカ？」

「下手な慰めは辞めろ、貴様見たらどう？アレを俺達の誰かが避けられるとも思っているのか？」

あの構えて射出するまでのスピード、そして約10m程あったあの距離を一瞬射抜くスピード、正確性、それはいくら俺の神技を持つてしても難しい」

ダグザの言わんとしてる事をアルテミスが気付かないわけがない、後ろから自分のいた地位狙う影、アルテミスがそれに脅えたのは初めてだった。

そして決勝戦、そこにいるのはニョルド、そしてアルテミスと摩和羅女。

アルテミスは摩和羅女を睨んでいる、その事に対し摩和羅女は目線で阿修羅達に合図を送る。

「はあ、アルテミス、あれはマジで殺る時の目じゃない」

「あのお姉ちゃん本当にヤバいんじゃないの？今にも摩和羅女を殺しそうじゃない」

「大丈夫よ、あれでもアルテミスにはプライドがある、殺気とより闘志じゃない？」

『さあ、遠距離型最強を戴冠しようと集まったこの3人！一人一人が誰にも負けない腕を持つている！その総合力、3種目やってその総合得点で最強を決めようじゃないか！  
そしてその映えある第一種目、それはコレだ！』

フィールドにはジャングルが広がっている、100m四方のジャングルが、木は所狭しと生えている。  
フィールドの端には得点の書かれたボードがある。

『まずはニヨルドだ！』

「やったね、コレは僕の大得意な種目だよ」

『“反響のニヨルド”！正にこのような障害物が乱雑したフィールドで彼の右に出る者はいない！……………つておおい！ニヨルド！何処に向いてるんだ君は！？』

「コレで良いんだよ、こんな森、僕にとっては本当に嬉しい限りだよ」

ニヨルドは的とは全く逆の方向、的に背を向けるよう構えている、的の位置は最初に見たから間違えるはずはない。

ニヨルドは笑顔でそれを投げるとテイルヴィングは木に当たって方向転換する、ニヨルドの事を知らない支部員は理解不能といった面持ち。

テイルヴィングは木に当たってを繰り返し止まるところを知らない、もうテイルヴィングが何処へ行ったのか分からない、そして今までとは違う抜けるような音がした、そう、的に当たったのだ。

『す、凄いでニヨルド！満点だ！こんなのと森で戦ったらいつの間にか殺されちゃう！』

ニヨルドはカメラに笑顔でVサインを送る、また着々とお姉さま方のファンを増やしている事に気付いてはいない。

『さあ次は“魔女のアルテミス”だぜ！俺の実況がはっちゃけてきた事なんて気にするな！ジャパンではこんなのがあるんだぜ！“踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにや損損”、皆で魔女の魔法に掛ろうじゃねえか！』

「はあ、誰も踊ってないじゃない、しかもこの実況はただの馬鹿よ」

アルテミスは雑音を気にせずにジャングルの真ん中に立っている、そして、スタートの合図と共にフルムーンを投げる、くねくねと滑らかにジャングルを駆け抜け、生きているかのように動くフルムーン、その曲線は美しく、アルテミスの手から離れたとは思えない。フルムーンは的に当たるとその動きを止めた、的に真ん中に当たり、何事も無かったかのように刺さっている。

『う、美しい！暗器でこんなに美しい曲線が描けるといのか！？その長い指先からドーナツみたいな暗器にどんな力を加えればそんな動きをするんだ！？』

アルテミスは物静かにフィールドから下り、摩和羅女の前まで歩みを進めた。

「な、なんだ！？」

「コレが最強だよ、いくらまっすぐに速く射ても相手を殺せない、あんたにそれが分かるかい？」

緊那羅が摩和羅女をかばうようにグッと前に出る、その間も阿修羅は傍観者の立場を決め込む。

「あんた摩和羅女を分かってないね、摩和羅女、前のよりむしろこっちの方があんた向きだろ？」

「そうだ！アタシはこっちの方が好きだぞ」

「アンタの針がジャングルを避けられるとは思えないけどね」

「私が教えてやるよ、摩和羅女の針はなんでも通すんだよ、摩和羅女の逸話、コイツは1mのコンクリートを貫いて殺した。

さあ、やってきな摩和羅女」

「分かった！」

摩和羅女はフィールドに上がった。

阿修羅はアルテミスの隣に行つて軽く見上げる、168cmの阿修羅には179cmのアルテミスは大きい。

「私は貴女を認めてる、でも、摩和羅女は貴女が思ってるより強い」「悔しいけど、そうかもね」

摩和羅女は真ん中に立つとニコリと笑う。

「何かいざこざがあつたらしいけど構わず進めるぜ！キラーホース摩和羅女！彼女の底力はまだまだ未知数だ！今度はどんな力を見せてくれるのか！？」

摩和羅女はスタートの合図と共に針鬼を持ち、腕を体に絡める、そして弾き出すように振ると木を貫く凄まじい音が聞え、一瞬で的を貫いた。

「う、嘘だあ！これだけの本数の木を前にしてもその威力は衰えないというのか！？」

全く軌道もズレずにその威力、まさにマグナムのようだ！」

摩和羅女は笑顔で緊那羅の基へ行く、まだまだ幼さが残るその笑みからは想像出来ないその恐ろしさ、アルテミスは鳥肌が立っているのを必死に隠した。

「やるじゃないか、もうアンタの事を認めざるおえないね」

「本当か!？」

「ああ、でも最強だけは譲らない」

「アタシも頑張るぞ!」

アルテミスは笑顔でその場を去ったが恐怖を隠しきれなかった、そして、最強というものに傲っていた自分に気付く。

唇ごと食い縛り流れ出す血を拭って待合室に入った。

「貴様にしては珍しいな、そんなに内に怒りを秘めるとは」

「ダグザ、アンタはアタイと摩和羅女、どっちが遠距離型のNO.1だと思う?」

「接近戦に持ち込めばアルテミスの方が強いだろうな」

「つまり、遠距離としては摩和羅女の方が上って事かい?」

ダグザは鼻で笑って画面に目を移す、画面にはニョルドが上空を見つめる姿が写し出されている。

『次は遠距離射撃、遙か上空500mにある風船を貫いてもらおうじゃないか!』

この競技は難なく終わる、例の如く全員が的を射抜いて終わる結果となった。

『さあ、次が正念場だぜ！次の相手はコイツだあ！』

係員の手が開かれるがほぼ全員の頭に疑問符が浮かぶ、フィールドに立っているニヨルドやアルテミスは微妙な点が見えるだけ、摩和羅女ただ一人を抜いては。

「おお！あんなのに当ててるのか！？」

「アンタ、あれが見えるのかい？」

「当たり前だ！蚊が飛んでるじゃないか！」

「そうか、当たり前か……………」

アルテミスはまた劣等感にさいなまれる、遠距離型に必要なのは目、ニヨルドとアルテミスも確かな視力がある、しかしそれを遥かに上回る摩和羅女の視力、遠距離型としてこれほど恵まれた人間はいない。

『見えないだろお前ら？次の標的は忌まわしい蚊だあ！こんなもんで叩くのも苦勞するのに射抜けるのか？なんて質問受付ないからな！普通じゃ困るんだよ普通じゃ！』

ニヨルドが構えた、不規則な動きに加え小さい、ほんの1mm、そ



んなの常人なら不可能、しかし遠距離型最強を戴冠せしめる者にとつては死活問題、急所に等しい。

「うーん、難しいなあ、でも……………」

ニヨルドはティルヴィングを投げた、3人以外のホーリナーは何が起きているか分からない、実につまらないものである。

『カメラが寄るぞお……………』

カメラが蚊が落ちたであろう位置に近寄る、そこには羽と足が切れたまだ何とか生きている蚊がいる。

『もう驚くのも面倒になってきた！何でこんなもんに当てられるんだ！？スローカメラの結果が出たみたいだ！皆で神業を拝もうじゃないか！』

蚊が飛んでいる所に近づくティルヴィング、このままだったらぴつたり貫いていたが、蚊が寸前で気付き多少進路を変えた、それによりティルヴィングはかするように蚊に当たる。

『もうため息しかでねえよ！そこで口を馬鹿みたいに開けてる馬鹿共！お前らコレが神選10階クラスの力だ！夢見る余裕があるならその夢諦める事に専念しろ！』

さあ、喋りすぎちまったみたいだな。もうフィールドではアルテミスが待つてるぜ！更なる神業が出るのを期待しようじゃないか！』

蚊がフィールドに放たれる、相変わらず殺風景で何の面白味もない、しかしアルテミスにとっては差を付けるタメに必要な一発。

アルテミスは極限まで集中力を高める、そして指先でフルムーンの

回転スピードを上げた、その瞬間、その場で一回転する、放たれるフルムーン。

「おい！それじゃあ」

「見てな！コレがアタイのやり方だよ！」

摩和羅女には蚊の動き等取るに足らない動き、そして、アルテミスの指先の動き、フルムーンの回転、それから行き着いた結果は。

「あれじゃあ当たらないぞ」

そしてフルムーンはアルテミスの手元に戻って来た。

「カメラあ！ちんたらしてねえで早く寄れ！会場の一般ピーポー共は結果を待ちわびてるんだよ！」

そしてカメラが寄る、モニターにアップになった蚊は縦に綺麗に二つになっている。

「おいおい、こんな事まで……………、って早く見たいよなあ！？スローでその瞬間を！さあさあ見やがれ！華麗な蚊捌きをよ！」

モニターに写るスロー映像、フルムーンは蚊に近寄る、しかしこの軌道では当たらないのが歴然、だが、蚊は急にフルムーンに吸い寄せられた、そして、蚊が自らフルムーンに当たり、二つになって地に落ちる。

「蚊に賄賂でも送ったのか！？それともそんなに捌かれたかったのか！？なあ！蚊殿よあ！？」

「お、お前凄いいぞ！そうか、あんな当て方もあるのか、うん！」

『おい摩和羅女さん！皆に説明してくれよ、俺の実況はこの状況に適応出来るだけのキヤパを持ち合わせてないんでな！』

「おう！今のは得物自体に高速回転を加えて小さな乱気流と共に引力を加えたんだ、蚊みたいな軽い物ならそれだけあれば吸い寄せられるってわけだな、うん！」

『だとは皆さん、そんなのありかよ？もう人知をとくに超えてるだろ、もう嫌になってきた、ほれ摩和羅女、早く投げろ』

「うん！アタシも凄い事しなきゃな！」

蚊が放たれ摩和羅女は針鬼を構える、人差し指と親指で挟み、その腕をしっかりと前に出し、逆の手で腕を固定する、片目を瞑ると息を止めた、そして凄まじい速さで放たれる針鬼。

「よし！200点だ！」

『コレに得点はねえよ、カメラ、……………今回は早いな』

もう実況の精魂は尽きている、しかし、蚊を見た事によりやる気が戻った。

『嘘だろお！？蚊の、蚊の頭がねえぞ！』

頭だけ綺麗にない蚊、そしてスローカメラもあつという間に用意された。

やはりスローで見ても速い神技、そして蚊に当たった、そこは目、しかもど真ん中に。

蚊の頭は針鬼の大きさに全くなかったが、実際は目を射抜いていた。

『おいおいおいおい！それで200点つか！？こんなもん200点とは言わず1万点やるつつうの！』

会場は最初の種目からテンションが最高潮に上がる、前座にしては派手すぎる、コレが最強を戴冠しようとする者達の戦い。

『まあお前ら、集計まで気を休めておけ、今お偉いさん達が最強さんを決めてやるからよ』

元帥とランギ、毘沙門天は考えていた、確かにニヨルドは確かな腕を持っている、しかしアルテミスと摩和羅女が神がかり過ぎているのも事実。

「いやあ、今回の遠距離型は過去にないくらい凄いねえ」

「あのニヨルドが埋もれるくらいだぜ！？俺らの時代ならニヨルドでも最強だったのに」

「甲乙皆無、五分五分、判断難関」

「じゃあさあ、こついつのはどつ？」

「

『やつと俺の手元に結果が届いたぜ！』

会場の緊張感が増す、アルテミスと摩和羅女、どちらが最強か、ニ

ヨルドも確かに神業クラスだが二人の前ではそれも当たり前。

『お偉いさんよあ、コレはどうなっても責任取らないぜ。』

「……………」 “今回遠距離型最強を決めるにあたって厳正な審査の結果、アルテミス、摩和羅女両名にトーナメント予選最終戦にて対決を命じる、それに勝利した者に遠距離型最強の称号を与える” だよ』

ざわめく会場、そして反感や非難の嵐、実況も黙れと怒鳴る始末、まさに企画倒れも良いところである。

その混乱を納めるべく、元帥と元老の2人が壇上に上がる。

「ほらほらあ、落ち着いてよ」

全員が睨むように壇上を見る。

「恨まれちゃったかな？」

「当たり前だろ！まあ楽しそうだがな！」

「愚問」

「あはは、…………… 今回の結果は遠距離型と一言で言っても二人が全く違うタイプだって事が原因なんだよね。」

アルテミスちゃんは相手に合わせて柔軟に対応する、柔の遠距離型、だとしたら、摩和羅女ちゃんは相手をスピードと力でねじ伏せる、剛の遠距離型。

だから直接戦ってみたいと分からないんだよね、それにココで決めちゃったらつままないでしょ？」

ホーリナー遠距離型最強

保留

## 04：対大量戦術最強

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

遠距離型最強を決めるのは先延ばしとなり、次の種目が始まろうと  
していた。

今回の種目はかなりの人数のホーリナーが出場となるため一発勝負、  
日本支部からは阿修羅、緊那羅、沙羯羅しゃがらが出場、元神選10階から  
はヘリオス、タナトス、モリガン、精神状態が優れないククルカン  
も出ること。

第2種目、それは前はランギ、そして今はククルカンの座であつた  
対大量戦術最強を決める戦い。

ホーリナーとして一対一の戦いも必要だが、対大量戦術はそれと同  
等に重要視されている。

本来遠距離型と近距離型が組むのがベストだが、一人で多くのダー  
クロードを相手にする事も少なくない、そして、いくら近距離が強  
くてもイコール対大量戦術に特化しているとは限らない。

『テメエら始まるぜ！ダークロードの悲鳴和音を誰が一番景気良く  
奏でられるかだ！』

今回の種目は対大量戦術最強を決めるエビルユニオン祭だ！ルール  
は至ってシンプル！100体のステージ4を如何に速く無傷で殺せ

るかだ！まあ凡人には手が出せない領域だなあ！？

でもよお！ココにいる奴らはそれくらい簡単にやつてくれるような連中だ！

可哀想なステージ4だ、ぐちゃぐちゃになるか、バラバラになるかはホーリナー次第！今回は最初からヤバいのが来るぜ！最初はコイツだあ！」

フィールドの真ん中までゆっくりと歩くタナトス、得物である大鎌、スケイルを担いで不気味な笑みを浮かべる、その表情に会場は凍り付く。

『最初からこんなのが来るのか？って！？当たり前だろ！びびった奴は今から逃げても構わないぜ！でもなあ、バラバラショーが見たかったら残ってな！コレが最強と唱われた元神選10階、“死神のタナトス”の力だあ！』

大きなフィールドいっぱいに見れるステージ4、タナトスは片手でスケイルを持つ。

『スタート！』

「カット【切断】！」

突っ込んで来たステージ4を一回転して両断、その数10数体、そして回転の勢いを殺さずそのままスケイルを投げ飛ばした。

スケイルはブーメランのように飛び回り、ステージ4を斬り刻む、まさに地獄絵図、ステージ4の悲痛な断末魔が会場いっぱいにこだまする。

「デメエ邪魔だよ！」



タナトスは拳を振り上げステージ4の胸を拳で貫いた、そしてステージ4越しに出した手はスケイルをキャッチした。

「終りだ」

スケイルを引き抜くのと同時にステージ4は両断され、消えた。

『しゅ、終了！何だコレは！？一瞬、まさに一瞬の出来事だ！俺は今までこんな可哀想なステージ4は見たことない！』

タナトスは笑いながらフィールドを後にする。

『今タイムが出たぜ！驚くなよ？タナトス、記録10・6秒！一秒頭10体の計算だ！化物だ！最初から化物が出てきちまったな！こんなのに勝てるのかよ！？』

それから暫く支部員達が奮闘するが大半が1分以上かかる、傷を受けて失格となる者もいるぐらいだ、コレが普通、しかし最初にタナトスを見せられては普通も凡人と化す、またもや元神選10階の独壇場と化していた。

そしてまた元神選10階。

『さあて、そろそろ眠気を醒ます頃じゃないのか！？次は大物が来るぜ！コイツだ！』

フィールドの真ん中で会場全体に笑顔でVサインを送るヘリオス、そして女性ホーリナーの高い歓声が無駄に目立つ。

「阿修羅、あんたの彼が他の女にモテモテよ」

「はあ、別に良いんじゃない？」

「おっ？『彼』ってのは否定しないんだな？」

阿修羅は顔を真つ赤にしながら口を押さえる、緊那羅と沙羯羅は笑いながらその事でからかっている。

『“太陽のヘリオス”の力を皆で拝もうじゃないか！防熱の準備は出来たか！？火傷しないように気を付けろよ！いくら防護膜が張ってるフィールドでも熱ばかりは防ぐ予定はねえ！むしろ体感しやがれ！その熱さで一緒焼け焦げようぜ！』

ヘリオスは得物である切っ先が平らな片手剣、レーヴァティンを振り回して準備体操をしている。

そしてフィールドに現れるステージ4が現れる、ヘリオスは大はしやぎ。

「早く始めるツスよ！ちゃちゃつと終らせるんスから」

『じゃあリクエスト通り行くぜ！スタート！』

「インフェルノ【烈火】！」

その瞬間凄まじい炎がフィールドを防護膜いっぱいに覆い尽す、まるで炎の箱のような状態だ。

その熱は凄まじく阿修羅以外全員が避難するような状態。

「阿修羅！あんた何してるの！？死ぬわよ！」

「私は大丈夫だから」

『熱い熱い！こんな熱いのありかよ！？』

中の状況は全く分からない、しかしすぐに炎は無くなった、そこには大量の灰の真ん中にヘリオス一人が立っている。

『アンビリバーボー！早い！早すぎるんじゃないのか！？タイムの集計は……………ってもう出てるのかよ！？』

じゃあ言うぜ、驚いて倒れるなよ？ヘリオス、タイムは10・1秒！タナトスを上回った！ステージ4を灰にするのに10秒かよ！？今度から火葬はヘリオスに手伝って貰いな！骨の髄まで灰になっちまうぜ！』

ヘリオスは走って阿修羅の所に行く、全員避難していたためにフィールドの横にいるのは阿修羅とヘリオスだけの状態。

「阿修羅、俺一番ツスよ！優勝したらキスのプレゼント頂戴ツスよ

！」

「い、嫌よ！」

阿修羅は顔を真っ赤にしながら必死に断る。

「それに、私が記録を塗り変えるから」

「それずるいツスよお」

『そこ！イチヤイチャするなら自分の部屋戻りな！それに阿修羅！次はお前の番だぞ！“天竜の阿修羅”の力とくと見せてくれよな！？』

阿修羅は戦闘神という言葉聞いて実況席を殺気を込めて睨む、そして腕輪に触れながらフィールドに上がった、手には長刀の夜叉丸、

その美しさは男女問わず魅了する。

る。

『美しい花にはトゲがあるとは良く言ったもんだぜ！トゲどころか触る前に殺されちまうぜ！野郎共！阿修羅に手を出したいならヘリオス以上に強くなりな！じやなきや命は無いと思え！』

阿修羅は真ん中に立つと力を抜いて上空を見る、そしてステージ4が100体現れた。

『始めるぜ！？スタート！』

一斉に走り出すステージ4、阿修羅もスタートと同時に前を見る。

「アブソルペーション【吸収】」

まずは2体を串刺しにする、あっという間に霊体を吸い尽し真っ黒になる夜叉丸。

「エミッション【放出】」

その場で一回転すると同時に攻撃範囲内のステージ4を両断し、漆黒の刃を放射状に放つ、一瞬で夜叉丸は元の銀色に戻るが、それと同時にステージ4が波紋のように両断されていく。

『は、早い！何だこの早さは！？こんなに早くステージ4を殺せるものなのか？』

でも残念だとは思わねえか？噂の“天竜の巫女”力を見たかったよな？ステージ4はそんなの見せる必要もないってか？笑っちゃうぜ、タナトスといいヘリオスといい阿修羅といい、お前らただけ強い

んだよ！？

じゃあもうタイム発表するぞ！またあり得ないタイムが出やがった。阿修羅、タイムは7・9秒！世界で一番足速い奴が1m走るのよりも阿修羅がステージ4を1体倒す方が早いんだとよ！」

阿修羅は勝ち誇った顔でヘリオスに唇を見せる、ヘリオスはあからさまに悔しがり、阿修羅の満足中枢を更に刺激する。

更にやる気を無くした支部員達、今のところタナトスの後ろは神徳持ちのホーリナーの23・8秒だけ。

本来ならそれも有り得ない数字なのだがそれすらも霞んでしまっ、それだけ阿修羅達の数字は異常なものである。

そして次は緊那羅の番、緊那羅は得物である鞘と刀、羅刹でストレッチをしている。

『温いのに慣れてきちゃったか！？次で少しは目を覚ませや！日本支部の誇るジャパニーズビューティー、“音速の緊那羅”だ！お前ら音速って聞いて中途半端とか思うなよ？その刀捌き、いや、剣速は世界でもトップクラスだぜ！戦う時が来たら納刀させないだけでなく出来だと思え！』

緊那羅はフィールドの真ん中に立つと左手で羅刹を持つ、その姿は正に女侍、凛々しいたたずまいは美しいの一言に尽きる。

『どんな戦い方するか楽しみだよね！？とつと始めるとしようか！スタートだ！』

ステージ4が一斉に走り出す、その時には既に羅刹を鞘ごと地面に突き刺していた、既にその体勢から抜刀する気はゼロ。

「シンパシー【共振】」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

地震のように会場全体が揺れる、そして爆発音のような凄まじい音と共にフィールドが爆発したかのように砕け散る、まるで地面が爆発したような状態、ステージ4は瓦礫に押し潰されぐちゃぐちゃになっている、まるでそこで戦争があつような惨劇。

「なんだとお！？フィールドがひっくり返っちまった！音を馬鹿にした馬鹿共！音をナメると痛い目見るぞ！音も化物が使えばただの凶器だ！もう馬鹿とハサミとか言ってる場合じゃねえ！ココにいる化物共は何を持たせても凶器に変えやがる！

さあてタイムが出たぜ、……………ご、5・5秒！？50m走るよりも遥かに速いじゃねえか！こんだけの広範囲だぞ！？走るより手っ取り早いなんてもうルール違反どころか規格外も良いところだ！」

緊那羅は足取り軽く阿修羅の前まで行く、阿修羅はばつが悪そうな顔で緊那羅を見る、あからさまな勝ち誇った顔、そして腰ために小さく構えるVサイン。

「はあ、あっさりと抜かないでほしいんだけど」

「あんたばかりに良いところ持ってたかたたくないからね、仮にも阿修羅の先輩なんだから」

その後も有力なホーリナーは出てこない、化物達が集う大会、今になってそれを痛感する各支部員、そして日本支部の尋常じゃない強さに恐怖すら感じる者がいる。

前のホーリナーがフィールドから下りた後、真っ白なローブを着た美少年はゆつくりと壇上に上がる。

『さて、次はメインディッシュ3連続だ！その一番手は破壊神“道化のモリガン”だ！

ピエロも真っ青なそのぐちゃぐちゃショー！その小さく華奢な体からは考えられない程の戦いで力、そして可愛い男の子だからって甘く見るな！？戦いのえげつなさはホーリナーと言っても過言じゃねえはずだ！』

いつの間にかシヴアの上に座り、あぐらをかいて膝で頬杖をついていたモリガンは実況席を睨む、早く始めろと、その少年とは思えないような殺気で。

『それじゃあモリガンがお怒りだからとつとと始めるとしようか！？』

一瞬でフィールドが100体のステージ4に埋め尽される、モリガンはその光景を見ても微動だにせず、ただシヴアの上から眺めているだけ。

『それじゃあモリガンのぐちゃぐちゃショーのスタートだ！』

ステージ4は一斉に動き始める、モリガンはただそれを客観的に傍観するかのように見る。

「グラビテーション【重力】」

バキバキバキバキバキバキバキバキバキバキ！

凄まじい骨が碎ける音、それと共に地面に平伏し、原形を留められなくなったステージ4、それはまさに地獄絵図、しかしモリガンは当たり前かのごとくシヴア眺めている。

その光景を初めてみる支部員のほとんどは嘔吐する、慣れた元神選10階でさえ見たくない光景、それを気構え無しに見せられれば至極当然の結果。

『お、お前ら、先に謝っておくぜ、エチケツト袋の用意を促さなかった俺のミスだ、コレならレンタルショップで借りたその店一番のグロ系映画の方がマシかもな。』

でも気持の切り替えが肝心だ！今回は本当に馬鹿みたいなタイムが出ちまったみたいだぜ！？これが本当の神の領域だ！

タイム、4・9秒！』

モリガンは何も聞かずにフィールドを下りていた、そこには沙羯羅がいる。

「もうちよつと綺麗に殺そうよ？」

「君は日本支部の奴だったっけ？僕の戦い方にケチを付けないで欲しいな、別に君には関係ない話だろ？」

「ほら？やっぱりこういう人前でやるんだから綺麗に殺した方がいいでしょ？」

「僕には関係ない」



モリガンはそのまま沙羯羅の隣を通りすぎた、沙羯羅はプンプンという表現が似合いそうな怒り方でモリガンに文句をたれる。

『ほらその女！早くフィールドに上がって来い！』

「女じゃない！沙羯羅だよ！」

沙羯羅は腕輪に触れながら壇上に上がる、得物は弓幹が刃の弓、名は菊理姫、得物としての美しさはかなり高い物。

『さあ今回のダークホース、日本支部の新人“乱殺の沙羯羅”だ！その得物の形状からも言えるが、沙羯羅は超オールマイティーなタイプ、その頭の柔軟性は天下一品だぜ！』

沙羯羅は無人カメラが近寄ると笑顔を作りVサインを送る、先程までの怒りは何処かへ消えてしまったらしい。

『それじゃあ力を拝もうじゃねえか！スタート！』

ステージ4は現れるのと同時に沙羯羅に向かって走り出す、沙羯羅は慌てて上空に矢を放った。

「エクスペンション【拡大】！」

その肥大率は神選10階のそれを遥かに超える、簡単に折れそうな程細い矢が巨木のような大きさまで膨れ上がった。

そして沙羯羅は矢に両手を向け、両腕を開いた。

「乱れ散れ！」

大きな矢は数千という数の矢に別れ、そのまま地面に降り注ぐ、そ

れは矢の豪雨、逃げ場のない死の雨。

矢はステージ4を貫くのと同時に地面に突き刺さる、その音は正に轟音、爆音とは違う凄まじい音。そして足の踏み場もない程の矢の数、それは逃れられない事を意味する、その中でも沙羯羅の周りだけは綺麗に矢が刺さっていない、それは矢の形状を自由に変えられるからである。

「そんなのありかよ！？こんなの誰も避けられねえじゃねえか！日本支部は神選10階のお株を全部奪うつもりか！？過去にインドが第2の神選10階と言われていたが、今は日本支部の時代だ！タイムが出たとの事だぜ、……………う、嘘だろお！さ、3・9秒！まさか100体殺すのにこんな数字が出るなんて誰が予想した！？」

ざわめく会場、あの有力候補のモリガンを大きく離れた沙羯羅、神徳が無いにも関わらずこの力、得物の力だけと片付けられるようなものではない。

同様していたのは支部員や元神選10階だけじゃなかった、元帥、毘沙門天、ランギもその内。

「今年の日本支部は豊作だねえ、神徳持ちが3人、その内2人は神選10階の経験があり、それに神徳無し of 二人もあの力、神選10階なんかより強いじゃん」

「当たり前だろ！俺の日本支部だからな！」

「否、毘沙門天、私物化禁止、日本支部自発的成長、有力人物続出」「ランギも呑気な事言ってられないんじゃないの？歴代最強の看板も降ろす時が来たんじゃない？」

「愉快」

ランギや毘沙門天、そして元帥までもが嫌な笑い方をする、まるで、全てが‘冗談’と言わんばかりのもの。

『さあて、やつと最後だぜ！現対大量戦術最強と思われる“鎌鼬のククルカン”だあ！  
何かテンション低いけどそんなの気にしてたら太陽が隠れちまうよ！“雷帝のユピテル”が死んだからって気にするな！それがお前らのいる世界だ！』

ククルカンの目が一瞬にして変わった、殺気、悲哀、冷たく今までのククルカンからは想像出来ないような目。

「ユピテル、……………ユピテル」

『何かよく分からねえけど始めるぜ、スタート！』

ステージ4は一斉に走り出す。

「邪魔しないで、ユピテルを返して」

その殺気、タナトスすらも苦笑いを浮かべる程のもの、得物を顕現せずに頭を抱えたまま睨むククルカン。

「バキューム【真空】！！」

神技発動と同時に身体中を切り裂かれて倒れるステージ4、まさに

一瞬の出来事、しかし何故か未だに地面は砕け続け、防護幕はビリビリと悲鳴を上げ、そして、ククルカン本人の体にも傷付き始めた。

「クソ、神技の暴発だ」

「おいダグザ、どういう事だよ？」

「ククルカンの奴、情緒不安定なのに加え力をセーブする事を忘れてる、そして頭の中では何も考えていない、つまり、神技を今まで使った事ないような力で発動して、その力に自分で耐えられていない」

「じゃあどうするんだよ！？いくら俺様でもククルカンの神技だけはどうにもならねえぞ！」

「帝釈天、貴様なら行けるな？」

「引き受けた」

帝釈天は走ってフィールドに向かった。

「プロテクティブ【防護】」

そのままほぼ真空状態に近い、全体がかまいたちのようなフィールドに入る。

『な、何が起こっているのか！？これは予想外の事態だぜ！』

凄まじい力で帝釈天を襲うバキューム【真空】、何とか踏ん張りながら走る、そして、ククルカンの所に行くのと同時にみぞおちを殴り、ククルカンに気絶させた。

ククルカンが倒れると神技は止み、帝釈天も倒れる、救護班はククルカンを運びだし、ダグザとタナトスは帝釈天に近寄る。

「考え、られん、何だ、あの、力は？」

「ククルカンを出させたのは間違いだったか」

「それだけのものを失ったって事だろ？」

「貴様からそんな言葉が出るとはな、血迷ったか？」

「ああ！？テメエに何が分かるって言うんだよ！？」

「貴様に分かるとは思えんがな」

「辞める馬鹿共、撤収だ」

ダグザは二人を一喝してフィールドから押し出す、会場は明らかに静まりかえっている、馬鹿でも分かる、今起きていた状況が並々ならぬ事くらい。

『なんか俺罪悪感でいっぱいだが、悪い事しちゃったなククルカン。気を取り直してタイムの発表といこうぜ！4秒台以上なら沙羯羅が最強、3・8秒以下ならククルカンが最強！……………タイムは2・8秒！？考えられねえ！でもコレで決まったぜ！対大量戦術最強は風神、“鎌鼬のククルカン”だあ！』

ホーリナー対大量戦術最強

風神・ククルカン

## 05：パーティー（前書き）

大変遅くなってすみません。色々書いていたらおろそかになってしまいました。

今後は少しでもペースを上げて頑張るので、出来る限りお付き合いください。

## 05：パーティー

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

早くも一日目が終りホーリナー達は小休止、夜は息抜きや支部間との交流も兼ねたダンスパーティー。

無駄にドレスコードがしかれており、今まで自分達が動きやすい団服に身を包んでいたホーリナーもドレスや自国の正装をしている。

日本支部や神選10階の面々も例外ではない。

阿修羅は真つ赤なドレスで長い髪の毛を結い上げている、緊那羅は華やかな着物で阿修羅と同じく髪を結い上げている、摩和羅まわらじょ女はプリーツスカートにブレザーにネクタイという制服のようなスタイル、沙羯羅はパンツスタイルという若干ラフな洋装。

そして周りの目を引くのが神選10階、あのヘリオスまでもがスーツを着ている、アルテミスはノースリーブのYシャツにブーツカットのスーツパンツ、祝融は赤いチャイナドレスで髪の毛はお団子を二つ、ダグザはタキシードに眼鏡で更に堅物のようになっている、モリガンはホットパンツにダッフルコートにハンチング、ニョルドは蝶ネクタイにサスペンダー付きのホットパンツ、ククルカン是不参加、そして何故かダグザと帝釈天がいない。

元神選10階と日本支部は阿修羅を通じていつの間にか一塊になっていた。

「阿修羅綺麗ッスね！」

「貴方が綺麗っていうなんて珍しいわね」

「それよりヘリオス、タナトスと帝釈天の馬鹿共は何処に行った？」



トーナメントの抽選もあるんだぞ？」

そう、このパーティーの本来の目的は明日あるホーリナー最強を決めるトーナメントのくじ引きが目的、それなのに大本命の二人が来ないと企画倒れの可能性すら出てくる。

ダグザのイライラがたまってきた頃、会場の外から口喧嘩をしているような声が聞こえる、こんな時に喧嘩するのなど二人しかない。

「テメエがグダグダしてるからいけねえんだろ！？」

「誰が待ってると言った？先に行けば良かっただろ」

「テメエが俺様の靴を間違えて行ったからいけねえんだよ！」

「貴様なら靴を履かなくても良からう」

大きな声を張り上げながら入って来たタナトスはスーツでYシャツを大きく開け髪の毛を総結いしている、帝釈天は袴姿に長い髪の毛の後ろを高めで結んでいる。

そしてダグザはイライラしながら二人の前に立つ、その後ろにちょこちょこ着いて行く祝融。

「貴様ら、遅れとして何か言う事はないのか？」

「俺様は何も悪くねえんだよ！このクソが」

ダグザが二人を睨む、それだけで普通の人間なら殺せそうな殺気を込めて、ダグザや帝釈天ですら息を呑むその力。

「……………わ、悪かった」

「申し訳ない」

ダグザはため息と共に頭を抱えて後ろを向く、それを気遣う祝融。

「ダグザ様大丈夫デスか？」

「いや、憂鬱だ」

この日本支部と元神選10階の一塊の団体に近寄る一人の小さな少年、ちよつと大きいスーツでバンダナは健在。

「あのお、すみません、神選10階さんですよね？」

全員がその少年を見る、少年はビクリして後退りをして何故か顔を保護するような恰好を取った。

「おお！ズルワーンじゃないか！久しぶりだな、元気にやってたかい？」

「はい、覚えててくれたんですね」

「当たり前じゃないか、アンタの事を忘れるわけないだろ」

「ククルカンさん、お気の毒ですね」

「ああ、

」

色々な話に華を咲かせるアルテミスとズルワーンなる少年、ダグザはアルテミスの肩を叩いた。

「アルテミス、誰だコイツは？」

「コイツは創造神の“万状のズルワーン”だよ、ホーリナーラグナロク前の護衛でアタイとククルカンが護衛したホーリナーだ」

そしていつの間にかズルワーンの隣には摩和羅女がいた、ズルワーンを舐め回すように見る摩和羅女、同じくらいの歳と思われる二人、ズルワーンは見えているが知らないフリを決め込んでいる。

「おい、お前」

「な、何ですか？」

「その服大きいぞ」

「言わないで下さいよお、間違えられちゃったんですから」

「直してもらえ！うん！それが良い、行くぞ」

「え！？あ、ちよ、ちよつと！いきなり、つてああ！」

「摩和羅女！あんたちゃんと戻って来なさいよ」

「当たり前だ！」

無理矢理引きずられて摩和羅女に拉致されたズルワーン、それを暖かい目で見守る緊那羅と沙羯羅、他の面々はため息と共に頭を抱えた。

「うわあ！モリガン見付けた！キヤー！仮面取ったんですか？やっぱり可愛いですね」

「今度は誰だ？」

疲れ果てたダグザの視界に入ったのはスカートタイプのスーツを着た女性、阿修羅よりも下か同じくらいに見える。

その女性はモリガンに抱きついて頬擦りをしている、モリガンは嫌がって突き飛ばそうとするが中々離れない。

「モリガン、今度は誰だ？また護衛した奴か？」

「そ、そうだよ、商業神の、“舞踏のメルクリウス”、だよ」

「どうもよろしく願います！……………アストライアさんは残念でしたね。」

……………でもアタシがその穴を埋めて見せます！それでモリガンさんと……………」

ヨダレを垂らして妄想の世界に耽っている、全員は呆気にとられて

何も言葉が出ない。

「ねえ阿修羅、なんか沙羯羅に似てない？」

「はあ、確かにね」

二人は沙羯羅を見て納得する。

キヤイキヤイメルクリウスが騒いでいる時、ニヨルドが両手に大量の食料を持って帰って来た。

「ニヨルド気が利くじゃねえか！」

「さすがだ、ありがたくもらっておこう」

「ああ！それ僕のタメの物だよぉ！」

ニヨルドの食料を奪うタナトスと帝釈天、それによってメルクリウスはニヨルドの存在を把握し、目の色が変わった。

「ま、また美少年……………」

「ん？モリガン、誰それ？」

何とか奪い返したケーキ一つを食べながらメルクリウスとモリガンを見た、それが運の尽き、メルクリウスの目が獲物を狙う目になる。

「キヤー！可愛い！」

「うわぁ！な、何だよ！？」

メルクリウスはニヨルドに抱きついた、獲物は二人の美少年、名はモリガンとニヨルド。

メルクリウスに捕まったモリガンとニヨルドを無視して、元神選10階と日本支部はバラバラになって食事を探っている。

当然阿修羅はヘリオスに捕まり、アルテミスはその二人の側で黙々と食事。

一人になりたがる帝釈天には沙羯羅の質問攻め、ダグザの後ろには当たり前のように祝融、そして緊那羅はタナトスをからかっている、それをダグザは珍しい物を見るような目で見ている。

手直ししてもらったズルワーンは摩和羅女から逃げようとするが、摩和羅女はズルワーンに興味津々で離れようとはしない。

タナトスとダグザは意外と仲が良い、嫌味等を言い合うが、一番神選10階に一緒にいるのが長い二人、それは挨拶に似たようなもの。ダグザとタナトスを含めた4人の近くでイチヤイチャしているカッブル、2人はそれを見て脂汗を流し、目を反らした、緊那羅と祝融はそれを不思議そうに見る。

「おい、俺様は悪夢を見た、アレは幻覚か？」

「それはあり得ない、俺も悪夢が見えた」

「ダグザ様どうしたんですか？」

「何よ？幽霊でも見えたの？」

緊那羅は皮肉も込めておどけて見せるが二人はそれを処理するだけの余裕がない、この2人が動揺を見せる等皆無に等しい。

冷静、冷徹を絵に描いたようなダグザ、冷静、冷酷を絵に描いたようなタナトス、恐らくこの2人は原爆がバチカンに落ちても動揺等しないであろう。

そんなカップルの男、悪夢が2人の存在に気付いてしまった。

「ダグザさんにタナトスさんじゃないですか？」

「ダーリン、こちらは何方ですか？」

「ハニー、この方々は私の命の恩人だよ」

「あら、それでは私からもお礼を言わなくてはいいけませんね。

どうもお二方、ダーリンことベラルーシ支部のケツアルコアトルがお世話になりました、私はベラルーシ支部、支部長のコアトリクエです、今後お見知り置きを」

「人違いだ」

二人は顔を合わせようとはせず、まったく違う報告を向いたまま言い放った、それにベラルーシ支部長、コアトリクエは首を傾げる。

「酷いではないですか？ほら？私の顔を覚えていますよね？」

ケツアルコアトルは二人の顔を覗き込んで訪ねた、しかし二人はすかさず腕輪に触れ、ケツアルコアトルの喉元に得物を突き付ける予定だった。

「相変わらず怖いですね、しかし私の前ではどんな攻撃も当たりませんよ？」

ケツアルコアトルはいつの間にかコアトリクエの肩を抱いて2m程下がっていた。

「さすが“雲避のケツアルコアトル”、並の攻撃では当たらないか」「何だそりゃ？」

「雲の様に相手の攻撃を避ける事からその二つ名が付いたらしい、コイツに攻撃を加えた、いや、受け太刀をさせた者はそこにいる“

鎖蛇のコアトリクエ”以外ないらしい」

「良くご存知で、私に触れるのはハニーだけ、そう！私に見合うのはハニー、君だけなのさ」

「嬉しいわダーリン、私の攻撃から逃れられるのもダーリン、貴方一人だけよ」

抱き合う二人、緊那羅と祝融は悪夢の意味をやっと理解した、これは悪夢というよりはトラウマ、頭から離れないおぞましい光景。

その頃、一人で飲み物を持って退散しようとした帝釈天だが、沙羯羅がしつこく付きまとうせいで一人になれずにいた。

「ねえねえ、本当の名前は何なの？」

「俺の名は帝釈天のみ、産まれた時からホーリナーだ」

「かっこいい！」

「な、何がだ？」

叫びに近い大声にビククリする帝釈天、沙羯羅の元気に圧倒されつつも、“普通の１８歳”というものを観察しているのもあった。

「だって本物の神様みたいじゃない？」

「辛い事しかない」

「そうかなあ？ホーリナーって皆優しい人ばかりじゃない？神選１０階の人達も良い人ばかりだし、少なくとも一般人やってるよりは楽しいと思うよ」

「そうなのか？」

普通の暮らしを知らない帝釈天にとって普通の暮らしを一番知って

いる沙羯羅は興味深かった、自分の知らない世界を自分と同じだけ生きてきた。

「そうだよ、こんな皆仲良しつてのもあり得ないもん、裏では妬み合ったり嫌いだったんだよ？」

それに帝釈天つて悪魔だったんでしょ？」

「耳が痛いな」

「そついう意味じゃないよ！」

目を背けた帝釈天を覗き込む沙羯羅、幼い頃から他人を受け付けな  
い帝釈天にとってはこんな間近に顔があるのはあり得ない事、それ  
が女性となれば必然的に顔は紅潮する、それに沙羯羅は全く気付い  
ていない。

「だから帝釈天はちゃんと信念というかプライドつていうか、何だ  
ろう？………とりあえず欲で動いたわけじゃないんでしょ？」

「当たり前だ、復讐、それに囚われていた俺は愚かだった」

過去の自分を愚かと片付けられる程帝釈天は変わっていた、神選1  
0階に入って全員が対等な立場になった事で自分に意見する者が出  
た、それは帝釈天に「自分」という物を考えさせるきっかけになっ  
た。

「でも一般人つてのは欲のためにしか動かないんだよ？」

「何故だ？」

「知らない、でも一番醜いのはお金や地位、地位も憧れとかじゃな  
くて結局はお金になっちゃうから同じようなものだけだ。

それにね、表の人達が争うのは帝釈天みたいに復讐みたいな信念を  
持って争うんじゃないんだよ？ム力ついたからとかお金が欲しい、  
お金になるとか下らない理由で争ってるんだ、私はそんなちっぽけ



な人達が嫌いだったなあ。

だからホーリナーは大好き！皆裏表がないし毎日を自由気ままに楽しく過ごしてるから、そりゃ戦いは辛いよ？でもタダで楽しい思いしたら神様だけど神様に怒られちゃうでしょ？」

「プッ」

「笑った！？」

帝釈天が微妙に笑った、沙羯羅は大喜びで帝釈天の顔を覗き込むが帝釈天は違う方向を見てしまう、沙羯羅が更に覗き込もうとするが、手で沙羯羅の頭を押さえて近寄らせようとしない。

「神が神に怒られるか、貴様、気に入ったぞ」

「貴様じゃなくて沙羯羅！人の名前はちゃんと呼ばなきゃいけないっておばあちゃんが言ってたんだから」

「なら沙羯羅、頼みがある」

「なにに？俺と付き合えとか？」

「沙羯羅と話したら腹が減った、何か持って来てくれ」

「それってパシリ！？」

「如何にも」

「やだよお、それに帝釈天の好み知らないし」

「俺は薄味なら」

「めんどくさい！一緒に行こう？」

沙羯羅は帝釈天の手を取って笑顔で顔を見た、それに帝釈天は固まってしまうが、沙羯羅は気にせずというか気付かず二人で食料調達に向かった。

ダグザと祝融やケツアルコアトルとコアトリクエから離れたタナト

スと緊那羅、正確に言うのと全員から離れようとしたタナトスを緊那羅がいじっているのが正しい。

恐らく嫌味等を抜くとタナトスをいじれるのは緊那羅だけであろう、タナトスが心を許しているのか、緊那羅が反撃を許さないのかは定かではない。

そしてタナトスの前でも変わらないつまみ食い、タナトスが取った食料を横から緊那羅が食べる。

我慢していたタナトスだが、しかし、切り分けしていない巻き寿司をつまみ食いした時、遂に火が付いた。

「テメエ、それだけは許せねえ」

「ふぁにが？」

「俺様の寿司だけは取るんじゃないやねえよ」

「はら、ふひしゅひはの？」

「テメエに言う筋合いはねえだろ！？」

巻き寿司をくわえた緊那羅の胸ぐらを掴み上げたタナトス、それでも全く表情が変わらない緊那羅。

「ひふ？」

緊那羅は巻き寿司をくわえたまま目を瞑り、巻き寿司をタナトスに差し出す。

「い、いらねえよ！」

タナトスは顔を真っ赤にしながら新しい巻き寿司を口に放った、緊那羅は全て食べ終わると緊那羅を見ないようにしているタナトスを覗き込んだ。

「お寿司好きなんだ？」

「……………悪いかな？」

「意外なだけよ、まあこんなお寿司よりも今度私がもっと美味しいお寿司を作ってあげる」

「デメエに作れるのかよ？」

「馬鹿にしないでほしいわね、それでも表にいた時はおじいちゃんのお寿司屋さんで手伝ってたんだから」

「どうなる事やら」

二人は軽く笑いながら食事を取り直した、不思議と溶け合えた二人。

そして元帥のトーナメントを始めるとの声がかかった、それによりステージの前にホーリナーが集まる。

トーナメント表の一番端にはアルテミスと摩和羅女の名前がある、持ち越された遠距離型最強を決める戦い。

まずは元神選10階から引き始める、元神選10階同士が潰し合えば自分達にも万が一があり得る。

しかし神選10階というのは運も神クラスらしい、潰し合うどころか当分はお互い当たらない、そう、肝心なベスト16になるまで元神選10階は当たらない。

「上手い具合に別れたねえ」

元帥はニタニタしながら次に引く者を指名する。

そして粗方注目株が引き終わっても結果は同じ、戦闘神の阿修羅、音楽神の緊那羅、創造神のズルワーン、文化神のケツアルコアトル、

地母神のコアトリクエ、商業神のメルクリウス、悪神のアカ・マナフ、この7人が上手くバラけている、このまま行くとベスト16まで元神選10階の9人と神選10階クラスの7人が残る事になる。

そして、このトーナメントが元帥と元老の3人の楽しみにタメに仕組まれたとは誰も知らない。

## 06：プライド

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

トーナメントが始まり活気に拍車がかかるバチカン、力試しの絶好の場だ。

最初から神選10階クラスの者と当たる者は傷を付けられればラッキー、負けて当たり前、力に自信がある者はあわよくばベスト16と。

トーナメントはVCSOが開発した新型の機械、悪魔が移動に使う黒い穴を解析し、それにより作り出せる異次元空間、そして前々から研究が進められていた神技による手合わせ、それらを結集して戦いによる死を擬似的にし五感に残したまま戦えるようになった。

つまり、痛みは勿論死ぬこともあり得るが、それはゲームの中でのゲームオーバーであり実際の死とは関係ない。

試合は異次元で行われるため建造物や自然の破壊も気にせずに済む、コレが最強を決めるタメに用意されたステージだ。

神技10階クラスのホーリナーは危なげなく勝ち抜き、残るは予選最終試合、アルテミスと摩和羅女の戦いのみとなった。

二人のフィールドは人から捨てられた街、埃は溜まり、健在な建物は皆無、その瓦礫により不安定な足場に加え死角の多さ、遠距離型にとっては最悪な条件と言えよう。

二人はお互い隠れて相手の出方を伺っている、アルテミスは顔を出そうとした時、微妙に足音が鳴ってしまった、普通なら聞こえないであろうその距離、しかし摩和羅女は迷わずに得物である針、針鬼を投げた。

アルテミスは慌てて避けると、アルテミスのいた所に凄まじい勢いで針鬼が通りすぎた。

それに冷や汗をかいてる暇もなく新しい針鬼が放たれた、それは真っ直ぐとアルテミスの心臓を貫こうとする。

アルテミスは即座に得物であるチャクラム、フルムーンを投げ、針鬼に当たるものの簡単にはね退けられてしまった。

「コンクリートを貫くだけの力はあるんだね」

アルテミスはギリギリまで引き付け、フルムーンを握りそのまま弾いた。

「エクスペンション【拡大】！」

アルテミスはフルムーンを大きくすると走り出した、摩和羅女は針鬼を投げるが意図も簡単に弾き飛ばされてしまう。

「近距離ならアタイの方が上だよ！」

アルテミスは横薙にフルムーンを振るうが摩和羅女に手で止められてしまう、手とフルムーンの間には針鬼がある。

「アタシだって近距離は得意だぞ！」

そのまま手の平でアルテミスのみぞおちを殴った、アルテミスは後

るに飛ぶが、体勢を崩しながらもフルムーンを投げた、摩和羅女は針鬼を握り難く弾き飛ばすが、フルムーンの影には別のフルムーンあった。

摩和羅女は避けきれずに頬を切ってしまった、そしてその間に体勢を立て直し拳を振り上げたアルテミスが近づいていた、完全に意表を突かれ摩和羅女は殴り飛ばされてしまう。

「アンタとアタイだと場数が違うんだよ！」

「アタシだってかかさまに鍛えられたから強いぞ！」

摩和羅女は地面に体を擦りながらも針鬼を投げていた、何とか弾き飛ばすが摩和羅女への反撃のチャンスを失ってしまった。

その頃二人の試合を楽しそうに眺めている元帥と毘沙門天、ランギがいた。

「毘沙門天、もしかして摩和羅女ちゃんの『かかさま』って……」

「ああ、多分な、俺と阿修羅を簡単に手放したあの支部長が頑に手放そうとしなかった、当時遠距離型最強だといわれていた守護神の乾闥婆だ」

「理解、故強者、血統良好」

「彼女がいればホーリナーラグナロクももう少し被害は軽減されただろうね」

「まあ離反してそれ以来消息不明だがな、まさかこんな宝物を残してくれるとはビックリだぜ」

乾闥婆、全く動く暇もなく殺される事から言われていたのが“立殺の乾闥婆”、毘沙門天と乾闥婆の二人の連携は誰も勝てないことから“絶対双壁”と言われ、当時の元帥が阿修羅よりも欲していた

という。

「あの頃の日本支部は強かったなあ、特に阿修羅あすらに毘沙門天に乾闥婆、後は先代の迦楼羅かるらかな？」

「迦楼羅、対大量戦術最強」

「お前が最強だろ！？確かに迦楼羅は強かったけどお前には負ける」  
「今の迦楼羅とは大違いだねえ」

二人は息を切らしながら構えている、一進一退、ほとんど五分と言える戦い、気を抜けば殺される、しかし相手の隙を突かなくては殺せない。

「アンタやるじゃないか、神徳がないのにアタイにココまで喰らい付くなんて」

「アタシだって日本支部の一員だ、緊那羅や阿修羅ばかりが日本支部じゃないんだぞ」

「そうだな、まあアタイはほっとしてるよ、アンタに神徳があったら間違いなくアンタが最強だ」

アルテミスはフルムーンを投げた、摩和羅女は針鬼を投げて弾き飛ばそうとするが。

「エクスペンション【拡大】」

フルムーンは大きくなり針鬼を弾き飛ばした、そして勢いを殺さず



に摩和羅女に向かう。

摩和羅女は避けきれないと判断し、針鬼を持ち、思いっきりフルムーンを叩くが、その力の前では摩和羅女の非力な肉体は簡単に吹き飛ばされてしまった。

摩和羅女は何とか体勢を立て直して反撃に移ろうとするが、顔を前に向けると大量のフルムーンがある。

直ぐ様両手に持てるだけの針鬼を持ち、投げるが時既に遅し、大量のフルムーンが一斉に摩和羅女の体を切り裂く。

「いやあああああああああ！！」

ズタズタに体を切り裂かれ、身体中から血を流しながら倒れた摩和羅女。

誰もが死んだと思ったが、どちらかが死ぬと異次元空間であるフィールドから強制的にバチカンに戻される、そう、まだココにいるという事は摩和羅女は生きているという事。

「何だ？気絶してるのかい？ならとつとと終わらせないと可哀想だね」

アルテミスはフルムーンを握りながら倒れている摩和羅女に近づく、完全に誰も摩和羅女が意識を保っているとは思っていない。

しかし摩和羅女の左手がピクリと動く、アルテミスが気付いた時には遅かった、針鬼に腹を貫かれていた。

「アタシはまだまだ戦えるぞ！」

摩和羅女は首の後ろの辺りを自分で突き刺すと、軽々と立ち上がり針鬼をアルテミスに投げる、アルテミスは寸前で体を微妙にずらして針鬼を顔にかすらせた。

しかし摩和羅女はそのまま走ってアルテミスに向かう。

「アンタ何でそんなに体が動くんだよ！？普通なら痛みで立ってられないだろ！？」

「痛みくらい消せるぞ！」

「まさかアンタ、さっきのはツボを突いたってのかい！？」

「そうだぞ！うん！」

「馬鹿だろ！？そんな所1ミリでもずれたら死ぬのに、何でそんな安々と……………」

フィールドのモニターを見ている阿修羅と緊那羅、沙羯羅はクスクスと笑っていた、摩和羅女の強さ、それは誰よりもこの3人が知っているからだ。

「まだアイツ摩和羅女の本当の強さに気付いてないみたいだよ？」

「摩和羅女の前では止まっても動いても意味ないもんねえ」

「緊那羅も摩和羅女に助けられた口だしね？」

緊那羅の首には針鬼が貫いた傷跡がある、阿修羅の腕があつても的確に相手を仮死状態に出来るだけの正確性、それは摩和羅女だけに出来る芸当。

摩和羅女とアルテミスは体術で接近戦に持ち込み、少しでも離れれば得物を投げる、そしてお互いの体力を確実に減らして行った。

アルテミスが投げたフルムーンに突っ込む摩和羅女、そして空中で

蹴り飛ばし、その時の力を余したまま空中でアルテミスに背を向けて摩和羅女の攻撃範囲に入った瞬間、体を捻って空中で回し蹴りを放つ、まさに軽業の骨頂。

しかしアルテミスは軽々と腕で受けると摩和羅女を殴ろうとする、摩和羅女はその拳を足場にして後ろに回転する、そしてその間にも針鬼を投げていた。

アルテミスはフルムーンを握り弾き飛ばす、しかしあつという間に摩和羅女が近寄って来た、アルテミスは手の平を摩和羅女に向けてニヤリと笑う。

「ルナティック【狂気】！」

フルムーンが顕現され、妖しい光が摩和羅女を包む、そして摩和羅女の動きが止まる。

「な、……………何、を？」

「そんだけ体力を消耗したら対抗は出来ないだろ？」

「い、嫌だあ！」

摩和羅女は針鬼で首を刺した、そして息を切らしながら片膝を地面に着く。

「アンタ、今度は気付のツボを？」

「アタシは、最強、なんて、興味、ない、ただ、負けたく、ない」

「何でそこまでして？アンタはアタイと戦うには圧倒的に不利なんだよ！？」

「かかさまが見てる前で負けちゃいけないんだ！」

摩和羅女は思いつき針鬼を投げた、アルテミスはフルムーンを握って弾き飛ばそうとするが、逆に針鬼に弾かれてしまう、針鬼は若

干軌道を変えてアルテミスの肩を貫いた。  
そして摩和羅女は飛び上がり、頭を下に向けている。

「ファイヤーワークス【花火】！」

身体中から放たれる針鬼、その量と威力から考えて避けるのはほぼ不可能と思えた。

「エクスペンション【拡大】！リデューション【縮小】！」

凄まじい程の金属音、まさに鉄の豪雨が鉄板を叩いている音。  
アルテミスはフルムーンを拡大し、その内側から更にフルムーンを拡大、それを繰り返し幾重にも密集したフルムーンの盾を作り出した。

それを完全に盾にして着地した摩和羅女に向かって走り出す、しかし摩和羅女は気付いていた、内側から広げれば完全な鉄板は出来ない、確実に僅かな穴が空く事を。

「アタシはどんな隙間でも通せるぞ！」

摩和羅女は軽々と１ミリしかないフルムーンの中心を通した、しかしアルテミスはフルムーンを振り上げる、その口には針鬼がくわえられていた。

そしてアルテミスは針鬼を吐き出し、ニヤリと笑う。

「アンタの唯一の欠点、それは完璧すぎるところだよ！  
でも認めてやるよ、アンタが遠距離型最強だ」

アルテミスはそのままフルムーンを振り下ろした。

異空間から弾き出される摩和羅女とアルテミス、そして会場の盛り上がり尋常じゃないものだった。

『終了だあ！勝者はアルテミス！だけどお前ら！摩和羅女の強さは半端なもんじゃねえよな！？アルテミスが何故勝てたか？つて？そんなもん簡単だ！死線をくぐり抜けて来た数が違うんだよ！でも気をつける！後2、3年もして摩和羅女が良い女になったら怖いぜ！手が付けられないから気を付けておけ！』

摩和羅女は泣きながら阿修羅に抱きついた、阿修羅は慣れたかのように頭を撫でる、アルテミスは居心地が悪くなりながらも摩和羅女に近寄った。

「今回は運だ、アンタ場数を踏めば絶対に強くなるよ」

「ほ、本当か？」

摩和羅女は阿修羅から顔を離して、少しだけアルテミスを見る。

「ああ、アンタは強かった」

「アタシも頑張るぞ！うん！次は負けないからな！」

「アタイも負けるわけにはいかないんでね」

ホーリナー 遠距離型最強

月神・アルテミス

## 07：紳士

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

塔の頂上に弾き出された男と女、塔の下は奈落、つまり落ちれば死、まさに逃げ場の無いデスマッチ、柵は無く一瞬のミスが命取りとなる極限の戦い。

男の名前は護法神・帝釈天、女の名前は沙羯羅、この戦いに勝った方がベスト16、最強を戴冠しようとする者がうごめくトーナメントの出場券を得られる。

帝釈天の得物は太剣クレイモア、名は髭切、沙羯羅の得物は弓幹が刃の弓、名は菊理姫。

「棄権しろ、沙羯羅、貴様に勝目はない」

「そんな事したら緊那羅に怒られちゃうでしょ？それに私だって怖いけど同じ人間、勝つ事があり得ないなんてあり得ない！」

帝釈天は軽く笑う、帝釈天が笑う事など皆無に等しい。

「愚かだ、しかし面白い」

「そうそう、コレでもタメなんだから劣ってるなんてこれっぽちも思っていないからね！」

「俺も遠慮なく出来る、感謝する」

帝釈天が先に走り出した、沙羯羅は威嚇代わりに一発放つが案の定弾かれてしまう。

あっという間に間隔を詰めた帝釈天は上段から振り下ろす、沙羯羅

はそれを受け太刀すると、握っていた矢で帝釈天を突き刺そうとする。

帝釈天は焦り後ろに避けるが、沙羯羅は握っている矢をそのまま菊理姫に装鎮し、矢を放った。

帝釈天は髭切で弾くが、今度は沙羯羅が上段から菊理姫を振り下ろす、帝釈天は難なく受け太刀するが、既に沙羯羅は菊理姫を引いていた。

矢は帝釈天の肩を貫通し、帝釈天は後ろに下がって牽制する。

「面白い、しかしこれならどうだ？」

帝釈天は髭切を投げた、沙羯羅は驚きながらも矢を放った。

「エクスペンション【拡大】」

巨木のようになった矢は髭切に当たる。

「エクスプローション【爆発】」

凄まじい爆音、そして風圧、塔がビリビリと揺れているのが分かる程、お互いの凄まじい力が相殺された結果だ。

「何故今のが分かった？」

「分かるわけ無いじゃん！危ないなあ」

「なら何故だ？何故受けようとしなかった？」

「怖いからだって、普通得物なんて投げないでしょ？何があるか分からないから全力で体に当てないようにする、それで当たり前ですよ？」

「実に面白い考えた、そして頭が良い」



帝釈天が笑顔になった、格下相手だが互角、もしかしたら帝釈天が圧されているかもしれない、その差は力ではなく頭、回転の早さと自分の力を理解しきっている、それが少ない力を十二分に発揮する形で現れた。

「な、何笑ってるの？不気味だよ？」

「いや、コレで俺も本気で戦える」

帝釈天は髭切を顕現した。

「プロテクティブ【防護】」

沙羯羅は再び警戒する、何も起こっていない、神技発動をしたのに外に現れないのは能力増強か、まだ沙羯羅が知らない未知の力。

沙羯羅は再び矢を放つ。

「エクスペンション【拡大】！」

帝釈天は大きくなった矢を髭切で受けるが、矢の勢いは止まらず髭切を折って帝釈天に当たった、かなり押し戻されるが、何とか踏み張り塔から落ちずに済んだ、しかし帝釈天はプロテクティブ【防護】の効果でダメージはゼロ。

「そういう事が、それってダメージを受けないってやつ？」

「それより今のはなんだ？」

「ああ今の？今のは矢をヤスリみたいに超ギザギザにして貫通性を無くした分、一回の威力を強くしただけ、いつもなら貫通性重視なんだけど、どうせ受けられるんなら壊しちゃえ！って発想かな？」

「沙羯羅はどれだけの頭脳を持っているんだ？」

「一応IQ180です！」

帝釈天は納得の笑みを溢す、ホーリナーの中でもトップクラスの知能、ちなみにダグザのIQは測定不能。

沙羯羅の強さは得物の力を最大限活用した戦い方、そして自分と相手の力の解析力、一長一短を的確に捉え、尚且超ポジティブシンキングにより、不可能を補っている。

「だが俺の方が強い」

「やってみなきゃ分からない！勝率がゼロじゃない限りは勝てるんだから」

「気に入ったぞ」

帝釈天は走り出す、沙羯羅は近寄せないために再び矢を大きくして押し返そうとする。

今の状況では勝目がない、しかし沙羯羅も知っている、神技は無限に続くわけではない事を。

それは帝釈天も同じ、それをホーリナーラグナロクで痛感したからこそ手をかざす。

「コラプス【崩壊】」

帝釈天の手に巨大な矢が当たった瞬間、矢は粉々に碎け散り、それを掻き分けて帝釈天は走り続ける。

そこで驚いても冷静さを失わないのも沙羯羅の強み、振り上げた髭切を見て素直に終わらないとの判断力。

「エクスプロージョン【爆発】」

菊理姫で受け太刀する前に矢を放った、矢は髭切に当たると髭切は爆発する。

エクスプロージョン【爆発】とは衝撃により爆発する、その特性を逆手に取り受け太刀時の衝撃を通常の振り下ろしと同じにし、菊理姫で受けた。

「流石だ、しかし」

帝釈天は空いている左手で沙羯羅の首を掴み、沙羯羅を持ち上げた。

「これで終りだ」

「ニヒヒヒ」

沙羯羅は齒を見せて笑うとそこには小さな矢が噛まれている、そのまま吹き矢のように右肘の関節部分に突き刺した。

沙羯羅は蛇のように帝釈天の左手に巻き付き骨を折ろうとするが、瞬時に帝釈天は沙羯羅を突き飛ばした。

沙羯羅は着地と同時に矢を3本同時に放つ。

「エクスプロージョン【爆発】！」

帝釈天は慌てて床を爆発させて塔の頂上部分を壊す、二人は1フロア落ちた。

「チェンジ【転化】！リデュース【縮小】！」

粉塵を突き破り突っ込んで来たのは沙羯羅だった、右手には矢の刃が異常に長い、さながら片手剣のような矢が握られている。

「それも矢の範囲内か」

そのまま斬りかかった、帝釈天は髭切で受けるが、左手には手の平

サイズになった菊理姫がある、沙羯羅は針のような矢を指先だけの動きで放つ。

帝釈天はギリギリで気付くが、左腕で防ぐの精一杯だった。

沙羯羅は髭切を足で蹴り飛ばそうとするが、それよりも早く帝釈天は髭切を手放して沙羯羅の足を掴み、外に投げ飛ばした。

沙羯羅は壁を突き破って塔の外に放り出される。

「コレで終りだ」

しかしいくら時間が過ぎてもバチカンに戻されない、つまり沙羯羅はまだ死んでいないという事。

そして帝釈天がいる塔が揺れる、そして地鳴りのような轟音。

「プロテクティブ【防護】！」

その瞬間床から飛び出して来た巨大な矢が帝釈天を上空に押し上げる、そして筒抜けになった塔の見える限りでの最深部には沙羯羅がいた、塔の壁には矢が突き刺さっていてそこを足場にし、塔内に入り上層部に矢を放った。

沙羯羅は矢に手を向けている。

「乱れ散れ！」

矢はバラバラになると軌道を変え、今度は帝釈天の上から大量の矢が降り注ぐ。

帝釈天は叩き付けられるように下降し、沙羯羅がいるフロアに叩き付けられた。

「案外勝てちゃったりとかするのかな？何か私良い感じだし」

帝釈天は起き上がり、埃を払いながら沙羯羅を見る、何故か殺気を込めた目で沙羯羅の事は見れない。

「それが本気なの？もしかして私って強かったりする？」

「ただ一振りの得物の使い方を思い出せ」

帝釈天は何かを悟ったかのように不気味に笑う。

「そうか、慣れていないのなら、慣れた形にすれば良いだけの話、沙羯羅、感謝する」

「あれ？何か私今お礼言われちゃった？でもあんまり良いことじゃなさそうだなあ」

帝釈天は髭切を顕現した。

「コラプス【崩壊】」

髭切は縦に割れ、綺麗に二振りの刀のようになった、そう、帝釈天は二振りでの戦いに慣れていた、しかもそれは悪魔の力を借りて、それならば神の力を持って二振りにすれば良い、ただそれだけの事である。

「ありや？もしかして強くなっちゃった？」

「沙羯羅の事は認めてやろう、しかしただ攻撃回数が倍になっただけではない」

「1+1＝　　ってやつ？」

「逆だ、＝1、多くの力を発揮出来るのではなく、力を十二分に発揮出来る、出来損ないの1が本物の1になれただけの事、その身を持って体感しろ」

帝釈天は走り出した、沙羯羅は例の如く巨大な矢を放つ。

「同じのは通用しない」

帝釈天は巨大な矢に向かって手をかざす。

「コラプ                   ！」

帝釈天の寸前でバラバラになり、四方八方へと散らばる、そしてそれは帝釈天の逃げ場が無くなる程だ。

しかし帝釈天は焦る事なく二振りの髭切を構える。

「プロテクティブ【防護】」

その瞬間一斉に帝釈天に襲いかかる、大半は髭切で打ち落とすが、コレだけの量を全て打ち落とすのは不可能、それ故のプロテクティブ【防護】。

しかし受ける衝撃が少ないタメにすぐに攻撃に移った、沙羯羅は焦り、直ぐ様矢を握った。

帝釈天は右の髭切を振り下ろすが沙羯羅はそつなく受ける、左も然り、そこから早い、一度両方を引くと髭切を合わせて元の形に戻し、突きを放つ、沙羯羅は菊理姫でそれも難なく受けるが、帝釈天は再び二振りにし、左の髭切で菊理姫を絡め、沙羯羅の体勢を崩した。

「ありや？ 絶体絶命？」

沙羯羅はバックステップで避けようとするが、それよりも早く帝釈天は右の髭切を振り下ろした。

「あれ？」

帝釈天は沙羯羅の体を掴み、髭切は首元に当てたまま、そう沙羯羅を殺してはいない。

「沙羯羅を斬りたくはない、棄権しろ、沙羯羅の負けは確実だ」  
「なあんだ、優しいところもあるじゃん」

と、言いながらも沙羯羅は赤くなった顔を隠そうとしている。  
そして沙羯羅は得物を捨てて手を挙げた。

「負けましたあ！棄権します！」

バチカンに弾き出された2人、その瞬間大歓声でバチカンが揺れる、それは沙羯羅の健闘、そして帝釈天の紳士的行動に対するものだ。

『すんつばらしい試合だったぜ！あの帝釈天に神徳無しの沙羯羅がココまで喰らい付くとはな！そんで帝釈天どうした！？頭でも打ったか！？少なくとも今までの帝釈天からは考えられない行動だな！とりあえずベスト16出場は帝釈天だあ！』

二人に集まる阿修羅、緊那羅、ダグザ、ヘリオス、タナトス。

「帝釈天、貴様にしては珍しい行動だな」

「女が殺せねえで何が最強だ」

「あら、紳士的で良いじゃない、あんたの事少しは見直したわよ」

「俺も阿修羅の事は殺さないツスよ！」

「はあ、勝ち残ったら当たるのに何言ってるの？」

「そうなんスカ！？嫌ツスよ、阿修羅と戦いたくないツス」

帝釈天はそれらをスルーして帰ろうとしたが、沙羯羅が後ろに着いて行った。

「何だ？」

「ありがとう」

「何がだ？」

「だってあれ案外痛いじゃん？だから負けるよりも痛い方が嫌だったんだよね」

「済まない」



「私もいっぱい痛い事したから紳士帝釈天の勝ち」

沙羯羅は帝釈天の顔を覗き込み満面の笑顔を見せる、帝釈天は顔を赤くして沙羯羅の頭をおさえた。

「何だデメエ？何顔赤くしてるんだよ？」

「もしかして沙羯羅に惚れたんスカ！？あしゅ……………らあ？」

ヘリオスの冷や汗、その理由は帝釈天の只ならぬ殺気、そして帝釈天は髭切を取り出した。

「コラプス【崩壊】」

二振りにしてタナトスとヘリオスを睨む、さすがにその殺気、尋常ではないもの。

「ほ、ほら、あれッスよ？冗談んスよ、冗談！ね？タナトス？」

「そ、そうだぜ、ほら、あんまりかつかするな？」

「……………殺す」

逃げ出す二人を帝釈天はあり得ないスピードで追う、それを遠くからふけるように見る沙羯羅、そこにあるのは先程までのホーリナーの顔ではなく、女の顔。

## 08：ダンス（前書き）

大変遅れてしまい申し訳ありません。

コレからピッチを上げていこうと思っておりますので、最後までお付き合いです。

## 08：ダンス

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

ベスト16が出揃いいよいよ本当の最強を決めるホーリナーが出揃った、どのホーリナーも誰よりも秀でたところはある、恐らく誰が勝ってもおかしくはない戦い。

『さあ出揃ったぜ！恐らくココにいる奴らは本当に神に愛された奴らだ！』

第一回戦は知識神“全能のダグザ”対火神“千手の祝融”！

第二回戦は護法神“殺壁の帝釈天”対創造神“万状のズルワーン”！

第三回戦は死神“死神のタナトス”対悪神“悪神のアカ・マナフ”！

第四回戦は音楽神“音速の緊那羅”対文化神“雲避のケツアルコアトル”！

第五回戦は破壊神“道化のモリガン”対地母神“鎖蛇のコアトリクエ”！

第六回戦は太陽神“太陽のヘリオス”対海神“反響のニヨルド”！

第七回戦は戦闘神“天竜の阿修羅”対商業神“舞踏のメルクリウス”！

最終第八回戦は風神“鎌鼬のククルカン”対月神“魔女のアルテミス”！

どの戦いも注目株だよな！？正直ココまでのカードが組まれたら甲乙つけがたいぜ！

特に初戦注目なのダグザと祝融の主従対決、タナトスとアカ・マナフの悪対決、ヘリオスとニヨルドの火と水の対決、そしてククルカンとアルテミスの対大量戦術・遠距離型最強対決！

こりゃ本当に熱い試合になりそうだよな！？明日が楽しみだよな！

？まあその熱い余韻はコレから始まる最後の晩餐まで残しておきな！  
！それでホームシックになった奴は早く支部に帰りな！コレから始まる熱い試合を見たくないんならな！』

夜になり女性ホーリナーはドレス、男性ホーリナーはタキシードに身を包んで、前日と同じように晩餐会に出た。

昨日とは違い落ち着き、本当に高貴なパーティーと言った具合だ。そして昨日と違うのは晩餐の主旨がダンスパーティーという事だ、そして元帥曰くベスト16に出場したホーリナーによる‘何か’があるらしい、それはベスト16のホーリナー本人すら知らない、また元帥の遊び心に惑わされるホーリナーな達。

「じゃあダンスパーティーに出たい人は中央に男女ペアで出てきてよ！」

元帥の声で真っ先に出てきたのはケツアルコアトルとコアトリクエ、恐らくダンスパーティーとなればこの二人の独壇場となるであろう。

そして走って阿修羅に近寄るヘリオス、阿修羅は嫌な予感が頭をよぎる。

「阿修羅あ！踊ろうツスよ？」

「はあ、ヘリオス、貴方踊れるの？」

「余裕ツスよ！……こんな感じツスよね？」

ヘリオスはステップを軽く踏んでみせる、阿修羅は目を丸くしてヘリオスを見た。

「どこでそんな事を？」

「今日ダンスパーティーがあるからってダグザに教わったんすよ、何度死にかけた事が……」

ヘリオスは思い出して顔色を悪くする、どんな特訓をしたのか阿修羅には聞かずとも分かった、しかしヘリオスもダグザに教われればどうなるか知っているはず、そこまでして阿修羅と踊ろうとしていた事に感動した。

「もしかして阿修羅踊れないんすか？」

「はあ、コレでも根っからのお嬢様よ？ダンスは小さいコレから叩き込まれから大丈夫」

「じゃあ、よろしくツスよ」

ヘリオスは方膝を着いて阿修羅の手を取る、阿修羅はドレスのスカートを軽く持ち上げ頭を下げ、中央に出ていった。

緊那羅は華美な世界などお構い無しに食に走る、花より団子、それが緊那羅にはふさわしい。

そこにぼーっと歩いていたタナトスが近寄る、緊那羅は気付いていても箸を休めない。

「何だ、テメエは踊る男がないのか？」

「ほなははふいふえるはふよ（お腹が空いてるだけよ）」

タナトスは苦笑いを浮かべて水を差し出す、緊那羅は飲み込んでまた箸を進めようとするが、タナトスがその手を制止した。

「何よ？」

「食べてばかりいないで踊ったらどうだ？」

緊那羅は黙り込んでしまった、ばつが悪そうな顔でタナトスと反対側を向いてしまった、しかしタナトスは回りこんで覗き込む。

「踊れないんだな？」

初めて緊那羅より優位に立つタナトス、しかしいつものタナトスならいじり倒す所だが、今回のタナトスは何故か緊那羅の手を取った、緊那羅はビクリしてタナトスの顔を見る。

「知らないなら教えてやる」

「い、嫌よ」

「何でだ？」

「……………恥じかきたくない」

タナトスは鼻で笑ってそのまま歩き出す。

「俺が恥をかかせない、俺がサポートしてやる」  
「う、うん」

「喜べ、俺様が人に教えるなんてないぞ」  
「ありがとう」

緊那羅はタナトスに手を引かれるがまま中央に出ていった、それは緊那羅にとって初めての体験、男勝りの緊那羅にとってエスコートされる等初めての経験だった。

そして、大切な人を無くした二人傷を埋めていた。

ダグザと祝融は中央で踊るホーリナーをただ眺めていた、いや、実際にはダグザのみ、祝融はダグザの後ろからダンスパーティーとダグザを交互に見ている。

主従、その関係が祝融にとってもどかしく感じる事もある、祝融にとってダグザは初めて負けた相手、そして祝融の事を初めて女として扱ってくれた人、それは祝融にとっては大きかった。

しかしダグザの事は分かっているつもり、ダグザにとって自分は駒であり、ただの奴隷にしか過ぎない、故に祝融の持っている感情は一人よがりであり、抱くだけ無駄、そして痛みだけしか残さない感情。

「あのタナトスまで踊ってる、元帥の馬鹿の思惑どおりだな」

「そうですネ」

「ヘリオスの馬鹿に教えただけある、まともに踊れてる」

「酷かったですからネ」

ダグザは踊るホーリナーを見て毒を吐くだけで楽しんでいる、ダグザはいつまで経ってもダグザであり、タナトスのように空気に呑まれる事などまずない。

そう、つまり祝融から行動を起こさない限りこの「観客」という立

場は変わらない、しかし祝融の立場はダグザに何かを持ち出せるような立場ではない、つまり祝融は勇気というモノをフルに絞り出さない限り打開策は皆無ということ。

そして祝融は何か絞りだそうとする、勇気、使った事のない勇気を精一杯絞り出す。

「だ、ダグザ様」

「何だ？」

「わ、私たちも、おど、お、おどり、お……………」

どうしてもドモってしまっ、最後の一言が出てこない。

「何だ？貴様も踊りたいのか？」

「……………は、はい」

「なら先に言え」

ダグザは祝融に手を差し出した、祝融は驚き、その手をただ見つめ、目に若干の涙を溜める。

「どうした？」

「イヤ、踊ってくれるなんて、思ってたかったです」

「貴様が踊りたいなら踊るが、どうする？」

「お願いします！」

祝融はダグザの手を取った、ダグザは微笑み祝融をエスコートする、それは祝融にとって至福の時間だった。

トイレに行ってから迷ってしまった摩和羅女<sup>まわらじょ</sup>、迷路のような本部を



泣きながら歩き回る、ホーリナーとしての強さは天下逸品だが、一人は大っ嫌いな寂しがり、そして大の泣き虫、甘えん坊も抜けないただの子供である（今は16歳で阿修羅がホーリナーになった歳）。

「阿修羅あ！緊那羅あ！沙羯羅あ！何処にいるんだあ！？出てきてくれよあ！」

それを聞き付けて一人の少年が近付いて来た、タキシードを着ていても何故か頭のバンダナだけは外さない少年。

「摩和羅女さん、どうしたんですか？」

摩和羅女はその少年の顔を見た。

「ず、ズルワーン？」

「はい、摩和羅女さんは何で泣いているんですか？」

「ま、迷子になったあ！」

涙を流しながら泣き叫ぶ摩和羅女、ズルワーンはポケットからハンカチを取り出して摩和羅女の涙を拭いた。

「帰り道が分からないんですか？」

「そうだ、トイレに行ったら迷子になった」

「と、トイレですか……………」

ズルワーンは苦笑いを浮かべた、そう、トイレは会場を出てから5m程歩き、曲がり角を右に曲がってすぐの所にある、つまり、迷うなどそれこそ神業。

そして二人がいるのは1フロア上、どうやったらココまで迷えるのか不思議でしやうがなかった。

「帰り道教えるんで帰れますよね？」

「一緒に来てくれないのか？」

「僕は人混みを見てると人酔いしちゃうんですよ、それにうるさいのも嫌いですし、この前は挨拶したかっただけなので我慢してましたけど」

「ならアタシもココにいるぞ！うん！」

摩和羅女は近くにあったベンチに座った、そこには料理の山が何皿も。

ぐうぐう…………

摩和羅女の腹の虫、摩和羅女は乙女らしく顔を真っ赤にする、ズルワーンはまったく気にせず優しい笑顔を作った。

「食べて良いですよ、僕はお腹いっぱいなん  
ぐうぐう…………」

今度はズルワーンの腹の虫が悲鳴を上げた、それを聞いて二人は笑いだした。

「やっぱり食べても良いですか？」

「こんな量アタシだけじゃ食べきれないぞ！一緒に食べよう！うん  
！」

「ありがとうございます」

しかしフォークは一つしかない、長期戦を仮定していてこの量、そして一人でこのあり得ない量を食べる予定だったのでフォークは一つ。

「フォーク使って下さい」

「アタシは大丈夫だ！……ほれ！」

摩和羅女は腕輪に触れて得物である針、針鬼を2本取り出して箸のようにする。

「それじゃあ先がとがってて危ないですよ！僕は大丈夫なので使って下さい」

「本当か？」

「はい！」

ズルワーンは近くにある鉄製の取っ手を掴んだ、摩和羅女は何が始まるのか興味津々と言った具合。

「コンストラクション【構築】」

その瞬間取っ手がフォークに変わった。

「凄い！凄いぞそれ！」

「そ、そんな事ないですよ」

ズルワーンは照れて顔を真っ赤にする、本来なら戦いで絶大な力を発揮するこの神技、しかしズルワーンとしてはこういうちょっとした事に使った方が気分が良い。

「では食べましょうか？」

「食べよう！うん！……いただきます！」

「イタダキマス？」

ズルワーンは疑問符を浮かべた、そう、海外で神に感謝する習慣はあっても「いただきます」という言葉は存在しない。

「いただきます」っていうのは、素材を作れる土壌をくれた神様、素材を作ってくれた農家の人達、この食べ物を作ってくれ人達に感謝する言葉つかかさまが言ってた！」

「素晴らしい言葉ですね、僕も言っても良いですか？」

「当たり前だ！良いことだぞ！うん！」

「じゃあ」

「「いただきます！」」

モリガンは片隅で椅子に座りながら賑わう人々を見ていた、何でも他人の下手くそな踊りを見て楽しめる？そう言った具合だ。

ボールのまま持ってきたサラダを抱え、ただ無心に食べ続ける、機械のように決められた動きで、仮面が取れても何も変わらないモリガン、本当な蠟人形という形容がふさわしい。

しかしモリガンの時間を脅かす一人の女にモリガンは気付いていない、その女性はモリガンの後ろに回り込み目を手で覆うとカップル定番の

「だあれだ？」

「殺すよ？メルクリウス」

メルクリウスの遊び心を殺気で返すモリガン、さすがモリガンと言ったところ、しかしメルクリウスもまけじと笑顔でモリガンの前に座る。

「何だい？邪魔だよ」

「踊りましようよ!？」

「拒否する、踊りは見るものだ、それに食事中だし」

「ココからじゃ見えないじゃないですか」

「素人の踊りで喜ぶ粹狂な奴らを見てる方が楽しいからね」

そしてまたサラダを口に運ぶ。

「何でサラダをそんなに？」

「草食動物の方が肉食動物よりも大きいじゃないか」

「もしかして小さいのを気にしてるんですか？」

「う、うるさい！君には関係ないだろ！」

モリガンは顔を真っ赤にした、モリガンの珍しい表情に悦が入るメルクリウス。

「ちなみにダンスは身長が伸びますよ、ダンサーに小さい人ってあんまりいないじゃないですか？」

「逆じゃないのかい？小さいと表現力に欠けるからダンサーにならないんだと思うけどね、それに僕は伸びてないし」

「ダンスやってたんですか!？」

「親に無理矢理やらされてたよ、小さい頃から嫌という程ね、お陰で親が嫌いになって、殺したさ。」

親は僕が悪い事してるなんて知らずにお坊っちゃんだと思ってたらしいよ、本当に馬鹿だよ、裏では人のもの盗んだり、ム力つく奴の家に爆弾仕掛けたり、うっとうしい奴にはカラスの死骸プレゼントしたり、学校が嫌で学校燃やしてみたり、貯水槽にヒ素いれたりしてるのにも気付かず、だから実子に殺されるんだよ」

モリガンは若干の笑顔でそれらを話す、メルクリウスは酷いという言葉しか出ない、確かに酷い、恐らくバレていれば法律を変えるく

らしい悪だ。

「まあ過去の話だよ、分かっただけ帰ってくれないかな？」

「嫌です！アタシがモリガンさんを更正させます！では一緒に踊りましょう！」

「僕は、って！おい！辞めろ！」

メルクリウスはモリガンの手を無理矢理引っ張ってダンスホールに向かった。

沙羯羅は片手にジューズを持ちながら人を捜していた、それは帝釈天、誰に聞いても何処へ行っても見つからない、だからこそ見付けてやろうという沙羯羅の維持。

中央では阿修羅とヘリオス、ぶっきらぼうな緊那羅とタナトス、ダグザと祝融、モリガンとメルクリウス、見知った顔ばかりが踊っている。

「皆ダンナがいて羨ましいなあ」

そんな沙羯羅を見付けては男性ホーリナーが。

「沙羯羅さん、俺と踊りませんか？」

と誘って来る、しかし沙羯羅はその度に。

「結構です」

と断り帝釈天を捜す。

そんな沙羯羅にまた一人近寄る男。

「おい女、俺と踊れ」

無理矢理沙羯羅の腕を掴み中央に向かおうとするアカ・マナフ、沙羯羅は無理矢理振りほどいて睨む。

「お前みたいな良い女と踊りたいから俺と踊れ」

「嫌だ、女の子を口説きたいならもうちょっとましな口説き文句考えてよ」

「俺が踊りたいだけだ、お前の意見なんて聞いてねえ」

再び腕を掴み、今回は更に強く引っ張る、いくらホーリナーと言えど男性に力で敵う訳がない。

沙羯羅が涙ぐみ、叫ぼうと思った瞬間、誰かがアカ・マナフの腕を掴み上げた、沙羯羅は期待しながら掴まれていた腕を引く。

「アンタ最悪だね、踊りたいなら口説いてからにしな」

そこにいたのはアルテミスだった、そしてアカ・マナフはSPにつまみ出される。

沙羯羅は涙を拭い、若干の失望の目でアルテミスを見た。

「帝釈天なら外にいるよ」

「ほ、本当!？」

「ああ、一人で空を見てふけてやがる、会いたいんだろ?早く行きな」

「ありがとうね、アルテミス!」

沙羯羅は悲しみに染まった顔を笑顔に変え、走って唯一外に出られる出口に向かった。

外に行くと確かにベンチで横になってる帝釈天がいた、沙羯羅は上から帝釈天を覗き込む。

「沙羯羅か」

「沙羯羅か、じゃない！馬鹿！」

沙羯羅は一気に涙が溢れだした、安堵と、先程の恐怖が一気に襲って来て。

「す、すまない、俺は何かしたか？」

「してない、してないけど馬鹿」

帝釈天はベンチに座り直し、沙羯羅のスペースを空けた、沙羯羅はそこに座るとめどない涙を拭う。

「何があつた？」

「帝釈天の事搜してた、そしたら、アカ・マナフが無理矢理私と踊ろうとして、アルテミスに助けられた。

帝釈天がいれば何もなかったのに、帝釈天の馬鹿！」

「すまない、どうもあの雰囲気慣れていなくて」

「悪いと思ってるなら踊ってよ」

「いや、俺は産まれてから戦いしか知らないから踊れない」

「知らない！」

帝釈天はこめかみを掻きながらどうしようかと悩む、戦いしか知らない帝釈天にとってダンスとは未知の世界。

「踊らないの？」



沙羯羅は涙を溜めた瞳で帝釈天を睨む。

「しかし俺は……………」

「踊れないなら教える」

「踊りたいのか？」

沙羯羅は涙をまき散らしながら思いつきり頷いた。

「どうなっても知らないからな」

帝釈天は立ち上がり、沙羯羅に手を差し出した、沙羯羅は笑顔でその手を取ると二人は会場に入って行った。

## 08：ダンス（後書き）

なんか恋愛が大半を占めてしまいましたね。

次回からは戦闘ラッシュです。

今まで戦闘シーンがなかったキャラクターや、ともに戦ってないキャラクターがモロに戦います！

ちなみに、少し気が早いですが次回作の設定が固まってきました。  
霊鬼編が悪魔編の序章だとしたら、今作は次回作の序章になります、  
そして、全てのキーワードが解けるのでお付き合い頂けたら光栄です。

## 09：主従とは

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

ベスト16第一回戦、ダグザ対祝融。

二人は大きな倉庫のような所にいる、飛行機を作る倉庫くらいの大  
きさ、自分達が出した音が自分達に返って来る場所。

ダグザの得物は両手に握られたトンファー、名はサラスヴァティー、  
祝融の得物は三節棍、名は承影。

二人が戦うのは初めてではない、最初に戦った時は祝融の完勝、2  
回目、ホーリナーラグナロクで戦った時はダグザの辛勝、そして今  
回は3度目、変わった点は二人が敵同士から主従関係に変わった事。

「祝融、本気で来い」

「良いンデスカ？」

「俺をナメるな、祝融の戦い方、クセ、筋力、間合い、全て承知済  
みだ、もう貴様に勝ち目はない」

「今回は無礼講でお願いしマス、私にも意地がありマスので、それ  
に主君を守る者、お互いの力を知っておく必要がありますよネ？」

「その通りだ、実に優秀な従者で助かる」

祝融は頭を下げると承影を構えた、ダグザもサラスヴァティーを構  
える。

一瞬でトップスピードまで達し、走り出す祝融、その勢いを残した  
ままダグザに突きを放った、ダグザは回転させたサラスヴァティー  
で承影を叩き落とすと、反対のサラスヴァティーで殴りかかる、祝

融はそれを素早く避けるが、ダグザの得物は両手にある、直ぐ様次の攻撃が来る。

祝融はダグザの素早い連撃を承影と体の動きで避け続ける、反撃のチャンス虎視眈々と狙っているが、ダグザの無駄のない動きの前では避ける事しか出来ない。

圧されているわけではない、むしろ祝融にとってこれくらいの連撃を避けるなど容易い事、しかしダグザに全く隙がないだけ、その完璧な動きの前で祝融が回避行動以外に何かをすれば確実に殺られる。ダグザからすれば態と無駄な動きをして相手の攻撃を誘い、そこからカウンターをしようとするが、先の先まで祝融に読まれている、普通の人間ならば攻撃を加えるようなところでも、祝融は戦い慣れしているために常に攻撃していな方の手を見ている。そして先に痺を切らしたのはダグザだった。

「エクスプロージョン【爆発】」

祝融はやつと来たかと思い、防御の体勢に入るが、サラスヴァティーは祝融には向かわず、地面を叩いた。

凄まじい爆音の威力はえぐれた床を見れば一目瞭然、破片や瓦礫は祝融に襲いかかる。

祝融は体にいくつか受けながらも、ダメージを少なくする事よりダグザの事だけを見ていた。

ダグザは素早い動きで近寄るとサラスヴァティーを振り上げる。

「エクスプロージョン【爆発】」

そしてダグザは跳び上がった、祝融は痛む体を押さえ付けて今度こそしっかりと踏ん張る。

しかしサラスヴァティーは祝融の手前で空振りする、そして祝融が気付いた時はもう遅かった、祝融の死角から飛んで来るダグザの足、

それが祝融の側頭部に当たると凄まじい爆発。

祝融は予期せぬ攻撃で派手に転がるが、すぐに立ち上がり構えた、その頭は裂傷に火傷、そんな傷を負いながら立っている祝融の精神力は尋常な物ではない。

「一度勝利した相手程怖い相手はいない、それを覚えておけ」

「ダグザ様、私は嘘を吐いていました、すみません」

「嘘だと？」

祝融は承影を構えた。

「ラピデティ【敏速】」

そして祝融がダグザを見た瞬間その場から消えた、そして次の瞬間ダグザは宙に浮いている、下にいる祝融は一瞬で消えて上空にいるダグザに向かう。

「ベロシティ【光速】と何が違う！？」

再び一瞬で近付くと今までではあり得ない程のスピードで連撃を受ける、それはまるで千の攻撃が一瞬で襲って来るような感覚、故に“千手の祝融”。

「フォーサイト【予知】！」

ダグザはフォーサイト【予知】を使いその動きを見分けようとするが、やっと残像が見えるくらいだ。

そう、体術の前では敵無しと言われたダグザの神技すら通用しない、体術系最強の神技。

祝融は天井の直前になるとダグザを足場にして跳び上がる、ダグザ

は床へ、祝融は天井へ向かう。

そして祝融は天井を足場にしてダグザに追い討ちをかける、ダグザは体がバラバラになりそうな痛みを我慢し、祝融を睨んだ、しかしその時には祝融は承影を振り上げダグザに叩き付けていた。

ダグザは地面に叩き付けられると、血を吐き出して、ぐったりとしてしまった、しかしまだ試合は続いている、つまりダグザは生きている。

「何だ？その、神技は、ベロシティ【光速】、ではない、しかし、それを、凌駕する、速さ」

「コレはベロシティ【光速】を更に昇華した神技デス、しかし

」

その瞬間祝融は血ヘッドを吐いた。

「脆刃の、剣か」

「ハイ、だから、実戦だと、使い物に、なりません」

お互い既に限界に近付いていた、むしろダグザは限界に思える、しかしあれだけのダメージを受けても立ち上がるダグザ、恐らく普通なら立ち上がれない程のダメージであろう。

祝融はそれによりこれ以上戦うのを躊躇ってしまうが、ダグザの力のある目を見てそれはダグザのためにならない事を悟る。

主従、それは遣い遣われるだけではなく、お互いの信頼関係や意思疎通、それが第一になる、既に二人にはそれが出来上がっていた。

「フォーサイト【予知】」

祝融は全力、つまりダグザを本当の敵だと思い、構える暇を与えずに突っ込んだ。

ダグザのフォーサイト【予知】を持ってしても完璧には捉えきれないラピデティ【敏速】、しかしダグザは笑みを溢す。

「祝融、感謝するぞ」

ダグザは祝融の攻撃を受けると共に目を瞑った、祝融は驚きながらも走る体を止められず、ダグザの後ろに回りこんで承影を振っていた。

だがダグザは背中に腕を回して承影を防いだ、それにより二人の動きは止まる。

「何故デスか？何で目を瞑ったまま私の攻撃が避けられたんデスか？」

「簡単な事だ、今までは視覚で先を読んでいた、だが今回は聴覚で先を読んだ、その事によりわずかな動きの変化、特に足下に注意出来るようになった、後は祝融のクセや風を切る音から予測をしてそこに体を動かしただけ」

「さすがダグザ様、……それでは行きます」

祝融は大きく息を吸ってその場から消える、ダグザは既に目を瞑っていた。

そして次の瞬間ダグザとの息も吐かせぬような激しい攻防。

ダグザは必要最低限かつ、速さに引き替えて無駄が多くなった祝融の隙を誘う攻防、そして祝融は攻撃のみ、あり得ない速度の連撃で隙をもカバーする手数。

その頃バチカンのモニターで観戦するホーリナー達は口を開けたまま何も出来ずにいた、そのあり得ない連撃、そしてあれだけの傷を受けておきながらそれを防ぐダグザ、今までの戦いとは次元が違う、コレが神選10階レベルの戦い。

僅かな期待を寄せてこの大会に出場した者も、コレを見ればその希望が儚いモノだと馬鹿でも分かる。

「阿修羅、さすがにアレはおかしいでしょ？」

「はあ、こんなの相性次第じゃない、まああんな戦いじゃあ私達に勝ち目はないわね」

元神選10階の面々も同じ、あの二人程体術にたけたホーリナーはいない。

「あのダグザのフォーサイト【予知】とあそこまで渡り合えるなんて、俺様でも無理だぜ」

「俺だつてダグザとは戦いたくないツスよ、それに祝融もずるいツスよ、あれじゃあ俺の面目丸潰れじゃないツスカ」

「貴様にはさらなる力があるではないか、あれがある限り貴様は最強だ」

「帝釈天、あれは秘密ツスよ」

「何だよテメエら、俺様に隠し事か？」

「謎があつた方がカッコイイじゃないツスカ」

ヘリオスの一言に呆れてため息を吐く帝釈天とタナトス、しかしその力、タナトスも同じだとは誰も知らない。



お互いボロボロになり体を動かしてるのも不思議な二人、並の精神力ならとうの昔に倒れているはず。

しかし二人が未だに立っているのは負けたくないという意地や、勝ちたいという闘志ではない、ただお互いの力を知り、自分の限界を知りたいだけ。

「俺は幸せ者だな」

「何がデスカ？」

「こんな俺の事を分かってくれる奴隷、そんなもん何処を捜しても貴様しかない」

「私の命はあの時無くなりマシた、イヤ、ダグザ様が握ってるのデス、だから私はダグザ様と一心同体、ダグザ様の手中にあるからこそダグザ様の事が分かるンデス」

「一つ約束しよう、ココで貴様が勝てば俺は貴様の願いを一つ聞いてやる、しかし、負けたなら……………俺の命令を一つ、有無も言わずに従え」

祝融の顔が笑顔になる。

「ハイ！」

祝融は構えるのと同時にその場から消え、再びダグザとの攻防が始まる。

ダグザは何とかココからの打開策を見付ける、このままでは体力消耗での共倒れとなってしまう、しかし今のダグザは限界、そう、限界を超える事が今要求されている。

「（神技の同時発動、そんなの不可能だ、技名破棄、感覚の問題だからそれも不可能だ、それならフォーサイト【予知】の昇華、仮に出来たとしても体が追いつかない、なら、他に何か、……………あ

るじゃないか、俺にはエクスプローション【爆発】が」

ダグザはニヤリと笑い祝融を見る、その不気味な笑み、祝融は悪寒にも似た何かを感じる。

祝融は突きを放つが軽々といなされてしまふ、それは今まで通り、しかしそこから違った。

祝融が承影を引こうとしたその瞬間、ダグザが承影を掴んではなさない、そして反対のサラスヴァティーを腰まで引いた。

「エクスプローション【爆発】！」

祝融はそれよりも速く後ろに避けようとした、ダグザのリーチ、攻撃速度、それがサラスヴァティーなら避けられたはず、しかしそれよりも早くダグザの足が祝融の頭を捉える、その瞬間……

ドカン！！！！！！！！！！

凄まじい爆音、そうダグザは爆発させるのを得物ではなく、自らの足に変えた。

バチカンに弾き出された二人、先程までの体がバラバラになりそうな痛みは嘘のように無く、無傷の二人がそこにいた。

『ベスト16第一試合はダグザの勝利だ！腐れホーリナーの共！コレが本物の戦いつてやつだ！今までのほままごと以下！茶番という

のもおこがましいくらいの戦いだぜ!」

ダグザは祝融を見る、そう、ダグザが勝てば祝融は一つだけ命令に従わなければならない、それがどんな無理難題であろうとも。

「じゃあ命令だ、貴様が勝利したら何を願うつもりだった？」

「そ、それは……………」

「命令が聞けないのか？」

「い、言います!……………だ、だ、ダグザ様と、で、で……………」

言葉に詰まってしまう祝融、ダグザはそれを面白いモノを見るような目で見る。

「ダグザ様とデートがしたいデス!」

ダグザは呆気にとられる、しかし直ぐ様笑みになり祝融の頭に手を置く。

「良いだろう、その願い聞いてやる、この大会が終わったら何処かへ連れて行ってやる」

「い、良いんデスか？」

「ああ、貴様への感謝も込めてだ」

「ありがとうございます!」

祝融は涙を溜めて頭を下げた、ダグザは背を向けて待合室に向けて歩を進める、祝融はその後ろに付き従う、しかしその顔は笑顔に充ち溢れている。

## 10：笑顔のために

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

ベスト16第二試合、帯釈天対ズルワーン。

コンクリートで囲まれた部屋にいる帯釈天とズルワーン、20mの正方形の部屋、逃げ場も隠れる所も何もない、そう、勝敗だけを決めるタメだけの部屋、入る事も出る事も叶わない檻の中での殺し合い。

二人は同時に得物に触れた、帯釈天の得物はクレイモア、名は髭切、ズルワーンの得物は掻き爪、名はネイト。

「ああ、怖いなあ、痛い嫌だなあ」

「貴様」

「は、はい！」

「別に俺は驚かしたいわけじゃない、ただ戦う気はあるのか？と聞きたいだけだ」

ズルワーンはもじもじしてうつ向いてしまう。

「戦いが嫌なら棄権しろ、俺は無駄に死の苦痛を与えたくはない」

「僕だって出来るものならしたいですよ、でもオーストラリア支部の皆がオーストラリアで応援してくれてるんです、それにココまで来たんだからもうちょっと頑張りたいですし」

「貴様の様な強者に好かれたオーストラリア支部は幸せだ、しかし俺と当たった事を後悔するんだな」

帯釈天は髭切に人指し指を当てた。

「コラプス【崩壊】」

縦になぞると綺麗に二振りになる、そして構える帯釈天、ズルワーンも恐る恐る構えた。

帯釈天は走り出す、素早く突くがズルワーンは髭切の上に飛び乗る、帯釈天はその体勢を維持したままもう片方でズルワーンを横薙に斬りかかるが、ズルワーンは軽々とナイトで受け、反対側のナイトを振り上げた、帯釈天は慌てズルワーンを天井に弾き飛ばす。

ズルワーンは天井に足をつく、逆さまになり天井を蹴った、弾丸のように帯釈天に向かって落下しながらナイトを振り上げる、帯釈天がバックステップで避けるのと同時に、ナイトはコンクリートの床を砕いた。

ズルワーンはそのまま床を蹴って低い姿勢のまま帯釈天に追撃をかける。

「エクスプロージョン【爆発】！」

床を砕いてズルワーンの視界を遮ろうとしたが。

「カット【切断】！」

飛んできた瓦礫をバラバラに斬り刻んだ、しかしズルワーンは足を止めて床に手をついた。

「コントラクション【構築】！」

その瞬間巨大な壁がズルワーンと帯釈天の間に現れた、それに加え帯釈天側には避けようがない程の棘がある。

ズルワーンが壁を蹴り飛ばすとゆっくりと倒れる、しかし帝釈天は慌てずに手を壁に向ける。

「コラプス【崩壊】」

帝釈天の手に当たった瞬間壁は粉々になった、しかしズルワーンが間髪入れずに斬りかかって来る。

帝釈天は軽く体をずらしてズルワーンの腕を掴み、ズルワーンを投げ飛ばした、空中で体勢を建て直し着地するズルワーン。

「さすがはココまで進んできただけはある」

「ああ、やっぱり怖いなあ」

全く聞いていないズルワーン、恐怖ばかりが先行して既にいっぱいいっぱいだった。

「おい貴様」

「は、はい!？」

ビクンと体を揺らして驚くズルワーン、帝釈天は頭を抱えてため息を吐く。

「貴様は何のタメに戦う？」

「僕は戦いたくなんかないですよ」

泣きそうになりながら何とか声を振り絞るズルワーン、とても化物の巣窟と言われるベスト16に進んだとは思えない程気弱。

「なら戦いを好まぬのに何故戦う？」

「まあいつもは皆を守りたいじゃないですか？それに一人の命を守れば皆が笑ってくれる、嫌だけど僕が戦って、勝てば誰かが喜んでくれます、だから僕は皆の笑顔を造りたいから戦ってるんですね？」

「笑顔のタメか、貴様が創造神たる所以はそこか」

「じゃあ僕も聞いて良いですか？」

帝釈天が不思議な顔をする、今まで怯えていたズルワーンからの質問、それは思ってもいない事だった。

「帝釈天さんは、……………悪魔だったんですね？」

「いかにも」

「なら何で戻って来たんですか？聞いた話だとヘリオスさんと阿修羅さんを助けたいじゃないですか？」

帝釈天は考えた、何故自があのような行動を取ったのか、今でも毘沙門天の事は心の奥底から恨んでいる、機会があるなら殺したいと願う程。

「償いだ」

「償い？」

「ああ、阿修羅への、妹への償いだ。

俺はあいつの居場所、大切な者を私利私欲で奪おうとした、だから今度はあいつの大切なモノを俺が守る、……………それに、貴様の誰かの笑顔のタメ、それも悪くはないかもしれない」

ズルワーンの顔がパアツと明るくなる、今まで本当に怖い存在だと思っていた帝釈天、しかしそれは雰囲気のみで、今は悪魔のルシファアではなく護法神の帝釈天。

「日本の人達は本当に優しいですね」

「他にも関わりがあるのか？」

「まわらによ摩和羅女さんなんて良い人でしたよ、いただきます、を教えてくださいました」

「奴は人なつつこいからな」

帝釈天はそのまま構えた、ズルワーンも怯えが消えてしつかりと帝釈天を見据えて構える。

「少々話が過ぎたな、始めるとしよう」

「はい！」

ズルワーンが走り出す、そして帝釈天の手前で弾丸のように飛び上がり、帝釈天に突っ込んだ。

帝釈天は踏ん張り、それを受けると反対の髭切で斬りかかった、ズルワーンも難なくそれを受け反撃に出る。

帝釈天の連撃を足場にしながら、まるで帝釈天の上で戦っているようなズルワーン、しかし帝釈天もズルワーンの体勢を崩しながら戦っているため反撃を許さない。

ズルワーンは一度着地すると、今度は低い姿勢から帝釈天の懷に潜り込む、上からの攻撃の後下からの攻撃、その小柄な肉体をフルに生かした戦い方。

しかし帝釈天も神選10階を脅かした存在、それだけでは倒せはしない。

ズルワーンが低い姿勢から視線を上げた瞬間、ズルワーンの腹を蹴り上げる、宙に浮くズルワーンを斬ろうとするが何とかギリギリのところまで受けられた。

「エクスプロージョン【爆発】」



帝釈天は受けられている方を引くと同時に反対の髭切で斬りかかる、ズルワーンは成す術がなく受けると同時に髭切が爆発した。ズルワーンはボールの様に転がり、派手に壁に体を打ち付けた。

「こ、コンストラクション【構築】」

ズルワーンはとっさに自分の周りを壁で覆い、帝釈天との間を隔離した。

「逃げ場を無くしてどうする？」

帝釈天は髭切を振り上げた。

「エクスブ                      ツク！」

帝釈天が神技を放とうとしたその瞬間、背中に鋭く熱い衝撃が走り前のめりに倒れた、何かが当たった瞬間体を前にずらしたために致命傷は免れたが、動きをにぶらせるには充分だった。

帝釈天が後ろを見ると壁の向こうにいるハズのズルワーン、そしてズルワーンの後ろには穴がある。

「穴か、盲点だった」

「コンストラクション【構築】」

今度は帝釈天を閉じ込める、帝釈天は体が動かず、壁を壊してもすぐに殺されるのがオチ、僅かな時間で考える。

「カット【切断】！」

ズルワーンの神技発動の声、そして最終手段に出る、この狭い空間、逃げ場はない、そしてズルワーンに神技発動範囲内という事で中の状況が分かってしまう、なら。

ズルワーンが壁を突き破り帝釈天を突こうとしたその瞬間、ナイトを手に突き刺し、ズルワーンの手を捉えた。

「え？」

掴んだ左手は当然使い物にはならない、しかし残った右手でズルワーンの腕、右腕を掴んだ、ズルワーンは慌てて左手で刺そうとするが帝釈天の方が早かった。

「すまない」

ズルワーンの身動きの出来ない右腕を思いっきり下に突き落とす。

ゴキッ

あり得ない方向に曲がるズルワーンの腕。

「うわあああああああああああ！」

ズルワーン無理矢理引き抜くと、叫び、痛みを堪えながら折れた骨を戻した。

「コラプス【崩壊】」

帝釈天はコートの袖を切りながら出てきた、そして腕に縛り髭切を顕現する。

「すまない、しかし俺もココでは負けてられない」

「大丈夫、です」

「もう棄権しろ、これ以上やっても辛いだけだ」

「まだ、終わって、ませんよ？どちらかが、死ぬまで、それがルール、です」

「無駄に律義だ、なら、一瞬で殺してやる」

帝釈天は走り出す、ズルワーンも何とか構えると帝釈天の上段からの振り下ろしを防いだ、しかし帝釈天は前と同じように蹴り上げようとしたが、ズルワーンはその足に乗って跳び上がる、そして天井に足を着いて逆になる、天井を蹴ると流星の如く帝釈天に向かう、しかし帝釈天は髭切を捨てて手を上げた、そしてナイトが帝釈天に触れるその瞬間。

「コラプス【崩壊】」

ナイトが壊れてしまった、そして帝釈天はそのままズルワーンの腕を掴み、地面に叩き付けた。

「カハッ！」

肺の空気が一気に出る、そして帝釈天は腕輪に触れず髭切を顕現し、そのままズルワーンの心臓を突いた。

バチカンに弾き出された二人、二人とも肩で息をしている。

『終了だあ！勝者は帝釈天！かなり痛々しい戦いになっちまったな！でもお互いあり得ないくらいの精神力にビックリするぜ！これが本当の死線！看板を背負ったズルワーン、そして最強を意地でも戴冠しようとする帝釈天、本当にお前ら泥臭くてカツコイイぜ！』

帝釈天はズルワーンに向き直った、そして手を差し出す。

「すまなかった、勝つためとは言え酷い事をしたな」

「いえ、僕も沢山傷付けましたから、お互い様です」

ズルワーンは帝釈天と笑顔で握手した、お互い全身全霊をかけて勝ちに行った結果、お互いを傷付けあう戦いとなってしまった。

しかしこれが戦い、殺らなきゃ殺られる、少しでも傷を付けるためなら手段を選ばない、それが戦いというものだ。

## 11: 違い

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

ベスト16第三回戦、タナトス対アカ・マナフ。

競技場にいる二人、本来ならば競技が行われるであろうこの場所、しかし二人が持っているのは得物、タナトスは大鎌、名はスケイル、アカ・マナフはブーメランの様な形をしたナイフ、ククリ、名はナフト。

死神と悪神の戦い、恐らくこの二人程戦いを好んでいる者はいない。しかし大きく違うのはタナトスは殺す事を楽しむ、そしてアカ・マナフは相手をいたぶり楽しむ事、それが大きな違いである。

「そういえばテメエ、帝釈天の女と踊ろうとしてつまみ出されてたな？」

「あの女は良い女だよ、だがあの帝釈天の女だったなんてな、手を出さなくて正解か」

その会話はバチカンにも筒抜け、そして二人の戦いよりも誰が帝釈天の女かというほうが話題になっている。

元神選10階の待合室では帝釈天が明らかにイライラしている。

「どうしたんだい？帝釈天、君にしてはそんな事で平静を乱すなんて」

「黙れモリガン」

「沙羯羅は良い女の子じゃないッスか！俺は良いと思うッスよ」

「殺すぞヘリオス」

「まあ貴様は護法神だ、誰かを守りたいと思うのは必然、何も恥じる事ではない」

「死にたいのか？ダグザ」

皆クスクスと笑う、帝釈天は珍しく貧乏揺すりをしている、それを見て更に笑い声が大きくなる。

どちらからという事ではなく、お互い同時に構えた、お互いの出方

を伺い、硬直する二人、先に動き出したのはアカ・マナフの方だった。

「ダークネス【暗闇】」

その瞬間真っ暗になる競技場、バチカンのモニターも真っ暗、そしてタナトスの視界も然り、その中でも唯一正常な視界をしているのは神技の発動者であるアカ・マナフのみ。

「見えないだろ？俺の前では誰もが無力なんだよ！

まあ俺も鬼じゃない、あっけなく心臓一突きとかはお前のために控えてやるよ、じっくりいたぶって、死の恐怖をじっくりと染み込ませてから殺してやる」

だがクスクスと笑っているタナトス、アカ・マナフにしか見えないがタナトスはスケイルを引いた、そしてそのまま投げる。

他の者達には金属音しか聞こえない、それはタナトスの投げたスケイルをアカ・マナフのナフトが弾いた音。

「声で位置を判断しやがったのか！？でも移動しちまえばこっちのもんだ！」

アカ・マナフは音も無く走る、タナトスは腕輪に触れてスケイルを顕現する。

アカ・マナフはタナトスの後ろに回り込みナフトを振り上げる、しかしタナトスはアカ・マナフ目がけてスケイルを振った、アカ・マナフは慌てて受け太刀する、タナトスはそのままアカ・マナフを蹴り上げ、スケイルの背で弾き飛ばす。

アカ・マナフは受け身を取ってタナトスを焦りを含めた目で睨んだ。

「何でだ！？何で勘でそこまで分かる！？」

「勘じゃねえよ、テメエの居場所なんて目が無くても分かる、足音、息、鼓動、風切り音、それだけあれば充分だ

今度は俺様から行かしてもらうぜ」

タナトスは走り出した、それは的確にアカ・マナフに向かっている、アカ・マナフは構えるとタナトスの横薙の攻撃を受けた、そしてスケイルを掴むとナフトで突く、タナトスはそれを軽々と避け、アカ・マナフの顎を蹴り上げた、アカ・マナフがスケイルを掴んでいるのを気にせず、そのままスケイルごと地面に叩き付ける。

バチカンの者達は何が起きているが分からないが、二人の会話からタナトスが有利なのは容易に想像がつく。

「タナトス凄いッスね！俺なんてあんなになつたら戦えないッスよ」

「アイツは野生的だからな、それにタナトスは神の前はフランスの元SPだ、直感は一倍感えている」

「でもアレはあり得ないね、普段目を使わずに戦っても充分じゃないか」

ヘリオスやモリガン、その他面々は驚きを隠せずにいるがダグザは当たり前と言った表情。



日本支部の面々も驚きを隠せずにいた、しかし緊那羅に限っては何故か惚れ惚れとした顔になっている。

「やっぱり良いわね、私が目を付けただけある」

「はあ、貴女本気で惚れてたんだ？」

「当たり前でしょ？」

阿修羅はため息と共に力が抜けた、まさか緊那羅が本気でタナトスに惚れていたとは思ってもいなかったからだ。

既に暗闇など意味がなく戦っているアカ・マナフとタナトス、最初は動揺から体が硬かったが、今は切り替えた事により本来の力を出せている。

「そろそろこの暗闇を解いたらどうだ？意味が無い事くらい分かっただろ？」

「お前が必要以上に体力を使ってるのは分かってるんだよ、集中力をあり得ないくらい使ってるんだろ？それなら使い続ける価値はある」

「テメエの死様をバチカンに見せたかっただけなんだけどな、まあテメエのプライドのタメにも見えないまま殺してやる」

「強がり言ってる割には息が上がってるぜ？」

「カット【切断】」

タナトスは一瞬でナフトを斬り刻んだ、アカ・マナフは一旦間合いを取ってナフトを顕現するが、タナトスは構える暇を与えずスケイルを振り下ろす、アカ・マナフはスケイルの柄を蹴り飛ばした。

完全に体勢を崩すタナトス、アカ・マナフはそのままナフトを横薙に振る、タナトスは避け損じて軽く腹を斬られてしまった。

タナトスは一旦間合いを取り傷口を抑える、大した出血は激しくないが、ダメージを受けた事がタナトスの怒りに触れた。

「テメエ、絶対に殺す」

「次は急所を外さずに当ててやるよ」

タナトスが走り出した、アカ・マナフの手前でスケイルを後ろまで引く、そして横薙に振るがアカ・マナフは体を退け反らせて避けた、アカ・マナフはそのままがら空きになったタナトスを突こうとするが、スケイルは一瞬で切り返してきた、アカ・マナフはそれに反応

出来ずにスケイルの背で頭を思いつきり殴られる。

派手に転がるアカ・マナフ、しかしタナトスはそれを追いかける、アカ・マナフが止まった瞬間、スケイルを振り下ろした、アカ・マナフはギリギリで後ろに避けるが、タナトスはスケイルを地面に刺したまま突っ込む、そして体勢が不安なアカ・マナフの顔面を蹴り上げた、宙に浮いたアカ・マナフを顕現したスケイルで斬ろうとする、アカ・マナフは何とかナフトで防いだが、そのまま飛ばされてしまった。

「力の差つてもんが分かったか？ テメエには負けないんだよ、コレが一支部員と神選10階の差だ」

ボロボロになりながら血が混ざった唾を吐き出し、タナトスを睨んだ、タナトスは睨まれている事に気付いていないが、アカ・マナフの息が上がっているのは気付いている。

「まあテメエは弱くねえよ、気落ちするな」

「お前、化物か？」

「悪神さんにしては気弱なセリフだな、安心しろ、強いだけだ」

アカ・マナフは立ち上がって構える、タナトスは気配だけで構えた。

「エキサイティメント【興奮】！」

その瞬間暗闇は無くなり、正常な世界になった、しかしアカ・マナフの肌は紅潮し、目は充血している、鼻息は荒く、過呼吸気味に思える。

「う、うがああ……………」

大量の汗を流しながらタナトスを睨む、タナトスは慎重に構えると、アカ・マナフは走り出した。その速さは人間のそれを遥かに超えている、そして凄まじい高さまで跳び上がるとナフトを振り上げる。

「がああああああ！！！」

「テメエが化物じゃねえか」

タナトスは笑いながら受け太刀する、その力は尋常ではないが、押し潰されそうになる程の力ではない。

「カット【切断】」

タナトスはそのままナフトを斬り刻んだ、アカ・マナフはそのまま手を地面に着いた。

「ぐがああああああ！！！」

アカ・マナフはなるふり構わずタナトスにタツクルした。

「かはっ！」

一気に体内の空気が体外に押し出され意識が遠退く、しかし奥歯を砕けんばかりに噛み締めて踏ん張る。

「楽しくなって来たぜ」

タナトスの目が野生の目になる、もう一度タツクルをしようとしたアカ・マナフを踏みつけた。

「ぎゃぐつづつうう！」

「いちいち気持悪いんだよ！」

タナトスはそのまゝ顔面を蹴り飛ばした、アカ・マナフは流血しながらもナフトを顕現してタナトスに突っ込む。

「テメエはダークロード以下だな」

タナトスは突っ込んで来たアカ・マナフに対してスケイルを振り下ろした、しかしアカ・マナフは寸前で後ろに避けたせいでスケイルは空を斬った。

アカ・マナフは無駄無く突っ込んで来るが、タナトスの口角は更に上がる。

「甘いんだよ、だからダークロード以下なんだぜ？」

タナトスはスケイルを切り返し、アカ・マナフの腹をスケイルの背で殴り上げる、軽く宙に浮いたアカ・マナフを踵落として叩き付ける。

「さあ、コレで終わりだぜ」

地面から跳ね上がったアカ・マナフにスケイルの切っ先を向ける、そして躊躇無くスケイルを振り下ろした。

バチカンに弾き出された二人、バチカンは震えるような歓声と拍手、タナトスは妖しい笑みを溢しながらアカ・マナフを見た、そこには怒りや悔しさ、負の感情に包まれたアカ・マナフがいる。

「俺様に当たったのを後か　　！？」

アカ・マナフは腕輪に触れてナフトを顕現した。

「死ねえええええ！」

『おいおい！そりやあり得ないぜ！』

完全に気を緩めていたタナトス、反応が遅れてしまい成す術がない。

「ありやりや、あれは頂けないなあ」

「はっ！恥の上塗りなんて男の風上にもおけねえ！」

「最低弱者」

一番早く動き出したのは阿修羅とヘリオスだった、しかし距離が遠い、いくら技名を破棄したベロシティ【光速】でも届くかは分からない。

開場の全員がタナトスの死を察したその瞬間、アカ・マナフの体に元帥の獲物の鞭であるヴァルナとランギの獲物の紐であるアヌが絡まる、そして……………。

「大人しくしてろお！」

毘沙門天がアカ・マナフにタツクルした、アカ・マナフは吹き飛ばされ、アヌとヴァルナに引っ張られ元の位置に戻ろうとする、そこには毘沙門天がいた。

「チエストオオオオオオ！」

毘沙門天はラリアットをしてアカ・マナフを気絶させた。

「何がチエストだよ？」

「不可解用語使用禁止」

「チエストは立派な言葉だ！日本をナメるなよ！？」

アカ・マナフを縛って消えていく3人を呆然と見つめる面々。

『と、とりあえず勝者はタナトスだあ！いくら神選10階レベルでも本物の神選10階には及ばねえって事だあ！』





## 11：違い（後書き）

執筆しているうちに思ったんですが、今作の主役は阿修羅というよりは帝釈天やタナトス、ダグザって感じが強いですね。

今まで阿修羅やヘリオスの影にいたので表には出て来ませんでした。が、今回は阿修羅よりも出番が多いような気がします。

次回作の設定を練る過程で、どうしてもこの3人は外せないのこのういう形になったんでしょうね。

ちなみに次回作のキャラクター数は倍近くになる予定、只今キャラクター設定を必死に考えています。

また今まで語られなかったあんな話やこんな話、伏線も散りばめてあるので、そこら辺も見て頂けたら嬉しい限りです。

## 12：最強の剣士

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

ベスト16第四回戦、緊那羅対ケツアルコアトル

緊那羅とケツアルコアトルは山の拓けた土地、そこは雲の上、地面は石が転がっていて足場が悪い、下は崖のように急で落ちれば死が待っている。

そう、戦場はまさに最悪、しかしココにいる二人はそんな修羅場をいくつもくぐり抜けて来た、剣速は誰もが認めるホーリナーNo.1の緊那羅、避けるのに関してはホーリナーNo.1のケツアルコアトル、全く正反対の二人、だからこそ面白いこの戦い。

一度でも攻撃が当たれば緊那羅の勝ち、全て避けきればケツアルコアトルの勝ち。

二人はどちらからともなく腕輪に触れた、緊那羅の得物は納刀された刀、名は羅刹、ケツアルコアトルの得物はサーベル、名はウエミクス。

「その剣速、楽しみですね」

「私の剣速は並じゃないわよ、避けられるものならどうぞ」

緊那羅は走り出した、ケツアルコアトルは全く構えていない、緊那羅はケツアルコアトルの前で砂利を巻き上げながらとまる、そして抜刀する音が聞こえた、そして気付いた時には納刀されている、そ

の速さは見えない程、しかしお互いニヤリと笑っている。

「やるじゃない」

「貴女もなかなかですね」

その瞬間ケツアルコアトルの服が所々切れ、最後に頬に一筋の切傷が出来、赤い血が静かに流れ出す。

そう、ケツアルコアトルはあの目にも止まらぬ緊那羅の剣撃を見切り、ギリギリで避けたのだ、しかも傷の数を見る限り一回ではない、そして緊那羅も過去に傷を付けた者は誰一人としていないと言われたケツアルコアトルに傷を付けた。

お互いその力は確かなものだった、しかしそれを意図も簡単に打ち崩す相手、自然と本気にならざるおえなかった。

ケツアルコアトルはウェミクスを目線まで持ち上げ、腰を沈める、緊那羅は抜刀して左手に逆手で鞘を持ち、右手にはしっかりと羅刹を握る。

「久しぶりね、この型を使うなんて」

「私ですよ、フェンシングと剣道、お互い同じ剣術であれど国に合わせて昇華された剣術、どちらが本物の剣士かはつきりさせましよう」

「面白い事言うじゃない、まあ確かに一理あるわね」

一触即発、どちらかが動けば始まる、しかしお互い隙がなくあと一歩が踏み出せない。

その時、どちらかの足下で砂利を踏む音が鳴った、その瞬間一気に走り出す二人。

緊那羅の上段からの振り下ろしを避けるケツアルコアトル、勢いを殺さずにそのまま緊那羅の背後をとった、そして一旦間合いから出た瞬間、一気に止まって一気に踏み込むケツアルコアトル、しかし

緊那羅は全く動じず、振り向き様に鞘でウエミクスを弾く、そのまま横薙に羅刹振るうが避けられてしまう、ケツアルコアトルは流れるように間合いを詰めると、突きを放つ。

「遅いわね！」

瞬時に鞘を袴に刺し、羅刹を両手で握った。

上段から全力で振り下ろしてウエミクスを弾く、そのまま素早く切り上げた。

「甘いですね」

ケツアルコアトルは流れるように横に避けるとウエミクスを下から掬い上げるように振る、緊那羅は上体を後ろにずらすが無防備に合わず、頬を斬られてしまった。

緊那羅はバックステップで間合いを取り、鞘を左手に握った。

「へえ、なかなかやるじゃない」

「貴女もなかなかですよ、実に速い切り返しでした」

「コレは、燕返し、っていうのよ、何なら他のも見せるけど、いかが？」

「それは実に興味深いですね、ぜひともお目にかかりたい」

「後悔するわよ」

そして緊那羅は走り出した、ケツアルコアトルは緊那羅が最後に言った言葉が聞こえず、意識をそちらに取られてしまったが、戦いに支障が出るほどではない。

緊那羅は鞘を再び袴に刺すと、羅刹を両手で握り切つ先を下に向ける。

「下段ですか？という事は突きですね？」

緊那羅は軽く口角を上げた、それには苦笑いというものも含まれている。

そして緊那羅は一刀一足の距離に入ると沈めていた腰を若干浮かせる、そして思いっきり右足を踏み込む、そのまま下腹に素早い突きを放つ、ケツアルコアトルは軽々と横に避けた。

しかし緊那羅の攻撃は終わらない、羅刹を軽く引くと再び右足を踏み込み、左手を羅刹の柄を押すように当てる、そのまま腰をグツと沈めて羅刹を緊那羅の目線に合わせ、刃を上に向けてケツアルコアトルの胸部に突きを放つ。

「くっ、速い！」

ケツアルコアトルはウェミクスで羅刹を弾く、緊那羅は再び羅刹を引くと左手を完全に離して羅刹を右手だけで持つ、そのまま大きく踏み込んで半身になりながら首元に突きを放った。

「ハアっ！」

ケツアルコアトルは避けようとしたが、肩口を深く切り裂かれてしまった。

「コレは、三段突き、よ」

「やりますね、この私に傷を付けるなんて」

「これだけじゃないわよ、私、アンタと同じで避けるのも得意なの」  
「それは面白い、試してみたいですね」

ケツアルコアトルはウェミクスを構える、緊那羅は切っ先を自分の目線に持って来て、正眼の構えにしてはやや高い構えを取る。

「行きますよ！」

ケツアルコアトルは踏み込んで一気に間合いを詰める、そのまま無駄のない動きで緊那羅に突きを放つ。

しかしその突きは牽制程度、緊那羅が軽く弾けるレベルのものだ。だが緊那羅は羅刹を傾けてウェミクスを弾こうとはしない、そしてウェミクスが緊那羅に当たる寸前、目の前から緊那羅が消えた。

「なっ！？」

そしてケツアルコアトルが気付いた時には緊那羅に腹を殴られていた、緊那羅は寸前で深く沈み、そのまま胴を打ち抜く容量で殴ったのだ。

つまり、羅刹でケツアルコアトルを殺せたという事。

「まさか、避けるというのは、‘音無し剣’の、事ですか？」

ケツアルコアトルは腹を抑えて苦悶の表情を浮かべながら立ち上がる。

「避ける事に関しては何でも知ってるみたいね、でも‘音無し剣’は避けるんじゃない、得物同士を当てないの、つまり、受け太刀すらさせない、まさに戦い自体を支配する最強の技よ」

バチカンでは出店で食べ物を買って来た阿修羅とヘリオスとタナトスがいる、モニターでは緊那羅とケツアルコアトルが戦っている、しかし足音と風斬り音しか聴こえない静かな戦い。

「凄い戦いッスね！音が鳴ってないッスよ！？」

「まるで踊ってるみたいだな」

「緊那羅は剣士としてなら最強よ、60に及ぶ流派、100に及ぶ技を熟知してる、緊那羅と同じフィールドで真っ向勝負したら誰も勝てないわよ」

それがホーリナー最強の剣士、阿修羅が何とか勝てるのは阿修羅の得物が長いから、あれだけの長さに加えて我流の剣筋は緊那羅からしたら最悪の相性。

「何かタナトス嬉しそうッスね？」

阿修羅がタナトスを見ると何故か興奮している。

「次に当たる相手がコイツだと思うと、いてもたってもいられないんだよ」

「まあお互い神技を使って無いから何とも言えないけどね」

「そういえばケツアルコアトルがどんな神技使うか気にならないッスか？」

「確かに、でも今の状況を見る限り、緊那羅が戦いを支配しているように見えるけどな」

一見すれば緊那羅が戦いを支配しているように見える、受け太刀すらさせていない、しかしケツアルコアトルに当たっていないのもしかり、お互い一進一退の攻防という事。

「ラチがあかないですね」

「そうみたいね」

二人は同時に間合いを取った、緊那羅は一度納刀する、そしてケツアルコアトルは……。

「デイスアピランス【雲隠】」



その瞬間辺りに雲が立ち込める、凄まじい濃霧、視界が殆ど無くなるような雲、そして緊那羅はケツアルコアトルを見失ってしまう、しかし神技発動者であるケツアルコアトルには手に取るように、目で見ていくかのように緊那羅の居場所が分かってしまう。

「コレをやるのは何年ぶりでしょうか、久しぶりです、ココまで本気になったのは、しかしコレで貴女も終わりです」

「そんなベラベラ喋って良いの？」

緊那羅は納刀した羅刹の鞘を持ち、鰐に親指をかける、そして親指で羅刹を弾き飛ばした、鞘走りを利用して羅刹は弾丸の様に放たれる。

「甘いですね」

ケツアルコアトルがいつの間にか後ろにいた、音からの位置把握は人並み以上に出来るはずの緊那羅、緊那羅の耳が確かならケツアルコアトルは全く動いていなかった。

「クソ！」

緊那羅が避けるのと同時に肩口をウェミクスで斬られる、しかし緊那羅は瞬時に羅刹を顕現してケツアルコアトルを斬った。

「無理ですよ」

確かにケツアルコアトルを切り裂いた、肩口から脇腹にかけての確かな一閃、しかしケツアルコアトルは雲のように霞んで、消えてしまった。

「まさか、あんた自身が雲に？」

「ご明答、今の私は無敵、貴女に勝目はありませんよ」

そして再び緊那羅の後ろに現れるケツアルコアトル、今度は脇腹を刺される、緊那羅はケツアルコアトルに斬りかかるが、やはり雲の様に消えてしまう。

バチカンにいる阿修羅達はケツアルコアトルの勝利を確信した、現れては斬られる緊那羅、緊那羅に成す術はなく、無情にも体を切り裂かれていく。

「……………緊那羅」

「ケツアルコアトル強いッスね」

「アイツも終わりだな、アレじゃあどうしようもねえ」

そう、誰もが緊那羅の敗北を予想した、否、緊那羅でなくとも勝利は難しい。

緊那羅はケツアルコアトルを斬ろうと、必死になるが、相変わらず斬れない、羅刹が当たらない、斬れども斬れども雲が晴れるのみ。

「クソ、雲と一体化したらどうしようもないじゃない」

「さて、もうそろそろ終わりにしてあげましょう」

緊那羅はボロボロになりながらケツアルコアトルの気配を探す、雲の中のどこかにいるであろうケツアルコアトルを、そう、雲に……。

「そういう事、『かくれんぼ』ね、それなら……」

緊那羅は羅刹を納刀して地面に突き刺す、そしてニヤリと笑った。

「シンパシー【共振】！」

その瞬間、凄まじい音の波が辺り一帯を覆う、それはまるで衝撃波のよう、緊那羅の耳からは鼓膜が破れて血が流れ出す、しかし、あつという間に雲は衝撃波により消え、耳から血を流したケツアルコ

アトルが現れる。

「見つけた」

緊那羅の声はお互い全く聞こえていない。

「デイスアピア」

「ベロシティ【光速】！」

ケツアルコアトルが再び神技を発動する前に緊那羅が一閃と化し、ケツアルコアトルの横を通りすぎた。

バチカンに吐き出された二人、当然の如く耳は確りと聞こえ、会場

の歓声が確りと鼓膜を揺らしている。

『終了だあ！この凄まじい剣士同士の戦い！勝者は侍の緊那羅の勝利だあ！でもお互い剣士としては申し分ない！むしろ今回は神技で決まった！つまり剣士としての決着はついていないはずだ！』

ケツアルコアトルは緊那羅に歩み寄る、緊那羅は自然とは笑みになり手を差し出した、ケツアルコアトルも笑顔になって手を差し出した。

「久しぶりに痺れる戦いをした、ありがとう」

「私こそ己の力に溺れていました、剣士に傲りは命取りですね、貴女のお陰で再確認しました、次に剣を交える事があるのなら、充分精進した私が今回の結果を覆すでしょう」

「一人だけが精進してるわけじゃないのよ、追われてる方が緊張感があつて私は好きだからね、まあ次は更に楽しく戦えると思うとうずくわね」

二人は手を離すとお互いに帰るべき場所に向かって歩を進める、それはお互いを認めた証、そして強き剣士を見つけた喜び。

## 12：最強の剣士（後書き）

更新が大変遅れてしまい申し訳ありません。

なんか小説を書き溜めしておかないと怖い性格です。

後は色んな布石を散りばめようと練っていたらそれだけで満足してしまい、何故か執筆しないという愚かな作者です。

一応ダラダラと書き続けます、次回作で完結なので絶対に終わらせます！

なので最後までお付き合い下さい。

あと、メッセージなど読んでくれる人の声が頂けると作者の意欲が増します、良かったら何かお言葉が頂けたら嬉しい限りです。

### 13：負けない理由（前書き）

今回から文がマイナーチェンジいたしました。

神技に今までは日本語が付いていましたが、今回からは英語表記のみになります。

とりあえずあとがきに技の解説などを載せておきます、文中ではなるべく分かり易くしていますが、読みづらい点などがありましたら気軽にメッセージを下さい。

### 13：負けない理由

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

ベスト16第5回戦、モリガン対コアトリクエ

そこは広大な荒れ果てた大地、枯れた木々、ひび割れた大地、空気もお世辞にも良いとは言えない、空は雲が光を遮り暗い、その陰湿な環境が嫌に似合っているモリガン、そして逆に一輪の花のように美しいコアトリクエ、対なる二人、唯一の共通点はお互い中距離型という事。

モリガンの手には鎖から繋がる巨大な鉄球、名はシヴァ、モリガンはそのシヴァの上にあぐらをかいて座っている、コアトリクエの手には棘の付いた鎖の先端にナイフ、名はローズテイル、凜と立つコアトリクエは美しいの一言。

しかし二人の間にあるのは殺気、肌を刺すような凄まじい殺気を放つ二人、いくつもの死線をくぐり抜けて来た二人の放つ殺気は並ではない、モニターを通してバチカンにいるホーリナーにも伝わる程。

「君、辞退すれば？」

「何故でしょうか？私は貴殿のような“お子様”に負ける程弱くはありませんよ」

モリガンの眉尻がピクリと動く、その幼く美少年という形容が似合うモリガン、その顔が若干歪んだ。

「まあ君みたいなおバサン」からしたら僕はお子様だろうね」



今度はコアトリクエの眉尻がピクリと動いた、お互い超低レベルなけなし合い。

そして何も言わず、何の前触れもなく二人は動き出した。

先に攻撃に出たのはコアトリクエ、ローズテイルのナイフをモリガンに向かって放つ、しかしローズテイルはシヴァの鎖に巻き付いてしまう、モリガンはいつの間にか常人のそれを遥かに超えたジャンプ力で飛び上がる。

それはグラビテーションを使い、重力を軽くした結果、そしてモリガンが腕輪に触れると、ローズテイルに巻き付いていたシヴァが消え、モリガンの手元に現れた。

「潰れちゃえ」

モリガンがシヴァの上に乗った瞬間、常軌を逸した速度で落ちるモリガンとシヴァ、今度は重力を強くしたからだ。

「厄介ですね」

モリガンはシヴァを投げ飛ばし、フワフワと落ちる、シヴァは凄まじい速さで地面に突き刺さった、それは隕石、コアトリクエは風圧で体勢を崩してしまった。

「しぶといね、君」

モリガンは着地すると走ってコアトリクエに向かい、勢いを殺さず蹴り飛ばした、何とか腕で防いだが、地面に体を擦り付ける形となった。

擦り傷を作っているコアトリクエ、無傷のモリガン、やはり神選10階にはかなわないと誰もが思ったその時。

「油断大敵ですよ」

モリガンが気付いた時には遅かった、ローズテイルが地面から飛び出し、一瞬の後にモリガンの肩を貫く。

「君、凄いム力つくね」

モリガンが無理矢理ローズテイルを引き抜くと、おびただしい量の血が流れ出す、それは棘により決るように作られた傷故、まともな切り傷ではないために痛々しい傷になってしまう。

「私のローズテイルからは何があっても避けられませんかよ、諦めるのは貴殿の方じゃないですか？」

「こんなの2度も当たるのは馬鹿だけじゃないのかい？」

「ではダーリン以外は全て馬鹿になりますね」

コアトリクエはローズテイルを地面から引き抜き、再び振るうと刃はモリガンに向かう。

「単調だね」

モリガンは軽々と横に避けた、しかし何故か生きてるかのよう鎖が横に動く。

「気持ち悪い動きだよ」

モリガンは下をくぐりながら避けた。

「この程度じゃないですよ?」

モリガンが寒気を感じてローズテイルのナイフを探すと、モリガンにまっすぐ向かって来ている、それは明らかに方向転換した軌道。

「クソっ」

モリガンはギリギリで避けたと思ったが、ローズテイルが若干軌道を変えたせいで体に痛々しい切り傷を作り、ローズテイルは地面に刺さり止まった。

「的が小さいのでなかなか当たりませんね」

「オバサンのしつこさにビックリしたよ」

再びけなし合い、しかしモリガンのは明らかな強がり、内心焦っていた、確かにコレを避けきるのはダグザでもない限り難しい、自由自在に動け、尚且つ鎖とナイフ、どちらにも当たれないのは辛い。

大画面モニターの前に一人で佇むケツアルコアトル、そこを通りかかったダグザとタナトス、タナトスは肩を組むように横に並んだ。

「テメエの女はどうよ？」

「圧していると言えば圧していますが、モリガンさんが慣れてきたらどうなるかは分かりませんね」

「意外だな、貴様があの支部長の勝ちを公平に見るなんて」

「ハニーは負けませんよ」

ダグザとタナトスは顔を見合わせて笑う、それは何か一つの確信があるから。

「ちなみにモリガンは強い、奴の神技は地味に見えて強力だからな」

「俺様でもモリガンと戦うのはごめんだぜ」

「ハニーの攻撃は絶対に避けられないのに、ですか？」

「貴様もそうだが、それ故の慢心だ、奴のもっとうは肉を斬らせて骨を断つ、余談だがアイツが無傷で帰る事はあまりない」

「それもまた一興ですね、若い彼がどこまで出来るのか楽しみです」

「大事な彼女が負けても泣くなよ」

タナトスとダグザはそのまま去って行った、ケツアルコアトルは内心コアトリクエの勝利を確信していた、それはまだコアトリクエが神技を使っていないから、それにローズテイルは毒のようにじわじわと体力を奪う、長期戦になればモリガンに勝ち目はない。

徐々に、徐々に切り傷を増やしていくモリガン、明らかに圧されている、真つ白だったローブはボロボロになり、血で汚れて見るも無残な姿になっている。

一方のコアトリクエは最初の蹴りのみで、後は無傷、つまり擦り傷のみとなっている。

モリガンの明らかな劣勢にも関わらず、モリガンの嘲笑うような笑みは消えない、コアトリクエはそれに恐怖すら覚えた。

「ちょっとしんどくなってきたね、傷口が塞がらないから意識が飛びそうだよ」

「“鎖蛇”の意味分かって貰えましたか？」

「これじゃあ毒蛇じゃないか」

そう、鎖蛇とは蛇のような動きをする鎖ではない、毒蛇のようにじわじわと相手を弱らせる、つまり消耗戦を意味しているのだ。

コアトリクエはもうそろそろと、地面にローズテイルを突き刺した、こうすれば得物が隠れる故に避けづらい、むしろ避ける事は不可能。

「じゃあ君は“道化”の意味は分かったかい？」

「何がですか？」

「グラビテーション」

「！？」

モリガンは重力をかけた、対象はモリガンとコアトリクエの間の地面、それによりローズテイルは圧力で動かなくなる。

「ピエロ、それは玉乗りじゃなくてポーカーフェイスだよ」

モリガンはシヴァを再び権限して根元を持つ、完全に意表を突かれたコアトリクエは判断が遅れてしまった。

モリガンはシヴァをバットを振るようにコアトリクエに打ち付けた、さすがにコレは防ぎきれず、派手に吹っ飛ぶコアトリクエ。

モリガンは圧されていたわけではない、地面にローズテイルが潜るただ一瞬、それだけを待っていた、さらにそれを悟られないためにも、わざとローズテイルにかすっていた。

「やり、ますね」

ボロボロになったコアトリクエが立ち上がる、骨はいくつ折れたか

分からない、傷口からおびただしい量の出血、たった一発で形勢が逆転してしまった。

「ただ僕も少し遊び過ぎたみたいだね、思ったより出血が激しいよ」

「……………遊び、ですか」

コアトリクエのプライドがズタズタになった、こんな子供に遊ばれていた、今までののはピエロが用意して劇の一つと言わんばかりの表情、立っているのがやつとはずなのにその不適な笑み。

「悔しいですね、貴殿のようなお子様に本気を出すのは」

「安心しなよオバサン、僕の若い力が勝っただけなんだからね」

「私がいつ負けを認めました？」

コアトリクエは地面にローズテイルを突き刺した、モリガンは警戒する、もう一度あの手を使うわけがない、つまり、まだ何かを残しているという事。

「フロッグ」

「グラビテーション」

モリガンが二人の間に重力をかけたにも関わらず、大量のローズテイルが剣山のように地面から突き出て来た。

「本当にしぶといね」

モリガンは重力をかける対象を変える、ローズテイルを自分から逸らすように重力を操作するが、自由自在に曲がりながら大量のローズテイルがモリガンに向かって来る。

モリガンは回避行動とグラビテーションを使いながらなんとか避けるが、この量はさすがに不可能、徐々に動きが鈍り、最終的には動けなくなりその場に片膝を付いてしまった。

「これで終わりですね」

ローズテイルはモリガンの上空で一つに纏まると、バラの花のようになり、モリガンへと急降下する。

モリガンはゆっくりと立ち上がると再びあの嘲笑うような笑みを浮かべた。

「どっちが先かな？」

コアトリクエが慌てて上を見るとシヴァがそこにはあった、お互い回避行動を取るだけの余力は残っていない、モリガンはローズテイルを避けるのに、コアトリクエはローズテイルを操るのに体力を使ってしまったからだ。

「終わりみたいだね」

「そうですね」

ローズテイルとシヴァ、ほぼ同時に落下してきた。



バチカンに吐き出されたモリガンとコアトリクエ、そして地響きの  
ような歓声、お互いどちらが勝利か分からない、それはお互いの健  
闘を讃える歓声だ。

『すんつつつづけえ戦いだっただぜ！まさに中距離型の戦いがここ  
にあり！お互い最後まで死闘を繰り広げた結果！判定を待つという  
凄まじい戦いになった！

だがコレは勝つか負けるか！生きるか死ぬかの戦いだ！ドローなん  
て許されねえ！勝者と敗者だけしか残さねえ戦いなさ！

早速お待ちかねの判定結果を見てみようぜ！この熱い戦いに本当の  
ピリオドを打とうじゃねえか！』

全員がモニターを見る、そこには徐々にモリガンに迫るローズテイ  
ル、コアトリクエに迫るシヴァ、そのスピード、距離共に全く同じ  
と言っても良い程。

そしてゆっくりと落ちる二つの得物、最終的に動画は静止画へと変  
わる、そこには全く同じ高さにあるシヴァとローズテイル、しかし

コアトリクエの方が身長で勝るため、シヴァが先にコアトリクエに当たっている。

『これはモリガンの勝利だあ！！まさかこんなところで小さいのが役にたつとはなあ！喜べモリガン！  
ベスト16！第5回戦！勝者はモリ  
』

「ちょっと待てよお！！」

熱血司会を遮ってモリガンが叫んだ。

「こんなのドローじゃないか！もう一回やらせろ！僕はこんなの勝ちって認めない！」

『おいおい、素直に認めるよ、チビが得て事を示せたんだからよ  
お』

「君、チビチビうるさいねえ！ぶっ潰すよ！？」

モリガンは腕輪に触れてシヴァを顕現しようとしたその時、何故か浮遊感に襲われた。

「ほら、テメエも騒いでないで勝ちを認めるよ」

それはタナトスが片手で軽々と持ち上げたからだ、隣にはダグザもいる。

「離せえ！僕は認めない！」

「小さいのを認めたくないのは良いが、余計に虚しいだけだぞ」

モリガンは押し黙る、若干目に涙を浮かべながら納得した。

「あら、可愛いじゃないですか」

コアトリクエの挑発に涙目で殺気を放つが、それは可愛いとしか言えない。

「ほら行くぜ、おチビさん」

「メルクリウスみたいに需要があるんだから気にするな」

「確かに小さい美少年は母性本能をくすぐりますからね」

明らかにモリガンを馬鹿にするタナトス、ダグザ、コアトリクエの3人、そして……………。

「君達全員ぶっ潰す!!」

### 13：負けない理由（後書き）

グラビテーション

重力

対象物に対する重力を重くしたり軽くしたり出来る、その対象物に  
際限はなく、物質であれば全てが可能対象物となる。

フロッグ

剣山

得物を地面に突き刺し、地面から剣山のように得物が突き出す。

## 14：自然

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

ベスト16第6回戦、ヘリオス対ニヨルド

二人がいるのは海の上に人工的に作られた足場、50m程の大きな足場。

二人は弾き出された瞬間に確信した、アトランダムにせよ、完全にニヨルドの方に利があると、神徳が海神、つまりヘリオスはニヨルドの手の内ということ。

二人は同時に腕輪に触れた、ヘリオスの得物は片手剣、名はレーヴァテイン、ニヨルドの得物はナイフ、名はティルヴィング。

「ヘリオスには悪いけどコレは僕の勝ちだね」

「俺だってそんな簡単には負けないッスよ、不利だからって負けないのが本当の最強ッスからね」

ヘリオスはニヤリと笑って走り出す、否、技名破棄のベロシティで間合いを一瞬で詰めた、しかしニヨルドもヘリオスの戦いを熟知している、すぐさま飛び上がり、下にいるヘリオスにティルヴィングを投げつけた、ヘリオスはそれを弾き飛ばすと、ニヨルドを追撃するように飛び上がる。

そして二人の凄まじい斬り合い、両手にティルヴィングを持ったニヨルドとレーヴァテイン一振りのヘリオス、遠距離型と近距離型だ

が力はほぼ互角。

ニヨルドは遠距離型と言えど、恐らく遠距離型の中では接近戦に最も秀でている、それは中距離型とほぼ互角、そして連撃に関してはその身軽さから群を抜くものがある。

二人は着地すると同時に間合いを取った、しかしニヨルドはそれを狙っていた。

着地と同時に大量のティルヴィングを投げるニヨルド、それはお互いがお互いに当たり、完全にヘリオスを包囲した瞬間にヘリオスに襲いかかる、しかしヘリオスは全く動じずに構えた。

「インフェルノ！」

「ツナミ！」

ヘリオスの炎は上昇気流と共にティルヴィングの方向を変えヘリオスを守る、そして勢いを殺さずに足場全体を包もうとするが、凄まじい程の津波がそれを阻む。

お互いが当たった瞬間、火と水は相殺されて大量の蒸気を発生させた、それは二人の視界を完全に奪う結果となった。

蒸気が晴れた時、ずぶ濡れになったお互いが目に映る。

「どれだけ凄い炎だよ？僕の神技を相殺しちゃうなんて」

「俺の炎が消されたのも初めてツスよ、やっぱり海は凄いツスね」

お互いが凄まじい力を持った神技、太陽神が使う火、そして海神が使う水、それは自然界の中では最強クラスの力、無邪気な二人からは想像出来ない力。

「蒸し暑いよお」

「火の暑さは大丈夫なんすけど、蒸気の暑さはキツイッスよ」

手で顔を扇いでいるヘリオスとニョルド、しかしすぐに戦闘態勢に入り、構える。

「まあ接近戦なら絶対に負けないッスけどね」

「僕も負けないからね！」

「インフォルノ」

ヘリオスがレーヴァティンをぐるりと回すと、レーヴァティンが炎に包まれる。

しかしそれは真っ白な炎、それが意味するのは究極の熱、レーヴァティンが軽く足場に触れると、頑丈な足場は簡単に溶けてしまった。

「それはズルいよ！」

「行くッスよ」

走って近寄って来るヘリオスにティルヴィングを投げつけるが、簡単に溶かされてしまう。

ニョルドは大量のティルヴィングを投げてあつという間にヘリオスを包囲する、ヘリオスは立ち止まると、軸足だけで素早く回転し、レーヴァティンを振る、その瞬間、ヘリオスを中心に数十メートル程の火柱が出来た、それは軽々とティルヴィングを巻き上げ、溶かす。

「ううー、暑いよお」

しかしニヨルドを悩ます事実はそのだけでは無かった、火柱が晴れ、ヘリオスのいた所を見ると、ぼつかりと穴が空いて、そこにヘリオスはいない。

ニヨルドは周りを見てヘリオスを探す、そして気付いた時には遅かった、下から熱を感じて足下を見ると足場が抜けた。

下に落ちると足場の柱から柱同士を繋ぐ骨組みに着地した、目の前にはヘリオスがいる、下に落ちれば海、上に上がるのは難しい。

「こんな戦い辛い場所でやるのは初めてツスよ」

「僕も初めてだよ、まあ何か海が増えたから有利になったみたいだね」

ヘリオスは今だ燃えているレーヴァティンを手首でグルグルと回しながらニヨルドに近寄る、骨組みを跳ぶように渡ってくるそれは猿のよう。

ニヨルドはティルヴィングをなげて牽制するが、レーヴァティンに当たる頃には溶かされてしまう。

「それずるいよ！当たらないじゃん」

ニヨルドは頬を膨らませながらヘリオスの攻撃を避ける、お互い素早い動きの攻防、猿の様に細い足場に跳び移るヘリオスとニヨルド、とても近距離型対遠距離型の戦いとは思えない、それはニヨルドの強さを示している。

そしてニヨルドはある一つの事に気付いた、それはこの足場が悪く、海の上にあるという本来なら最悪の条件、そう、最悪というのは万人に値する言葉ではない。



「ニヒヒヒ」

ニヨルドはイヤらしく笑う。

「な、何スか？」

ニヨルドは一気に間合いを取った、そして腕を上に向ける。

「ツナミ！」

腕を振り下ろした瞬間、ニヨルドの後方にツナミが発生する。

「一回敗れてる技を使うなんて馬鹿ツスね！」

ヘリオスは一気に炎を強めた、それは周りの鉄骨を溶かしながら肥大する。

そして、ニヨルドのツナミにぶち当たる。

「ファイヤーワークス！ファイヤーワークス！ファイヤーワークス  
！！！！！」

ニヨルドの叫びは津波が蒸発する凄まじい轟音で掻き消され、ヘリオスの耳には伝わらなかった。

膨大な量の水は灼熱の炎により相殺され、お互いは一面の視界を奪いさる蒸気となり、抹消された。

しかしヘリオスの顔は曇る、それはヘリオスの四方八方から聞こえる大量の金属音、同じ神選10階、仲間なら分かるそれが意味する事。

蒸気が晴れた時、ヘリオスが何処に顔を向けても一面のティルヴィング、そう、ティルヴィングによる完全包囲、打開策も逃げ場もな

い死への包囲網。

「これをちよつと投げればヘリオスはティルヴィングでサボテンになっちゃうよ？」

ニヨルドはティルヴィングをチラつかせながら目を細めて笑う。

「さすがにコレはヤバいッスね。」

ツナミはただの囷、むしろヘリオスに相殺されるのを理解した上の伏線、ヘリオスの気をツナミで奪い、その間にファイヤーワークスを使い、ティルヴィングで包囲した。

そう海神のニヨルド、二つ名は‘反響’、その二つ名は伊達では無かった。

「インフェルノ」

レーヴァテインは炎を帯る。

「最後の抵抗？意味が無いのに。」

ファイヤーワークスで大量に放出されたティルヴィングを更にファイヤーワークスで増やす、言わば倍々ゲームみたいなもんだね。

こんな事閃いちゃうなんて僕って天才かも！」

「そんなの良いから早く来ないんスカ？」

「じゃあ行っちゃうよ！？」

ニヨルドはティルヴィングを投げた、ティルヴィングは方向を変え始め、暫くすると一気にヘリオスに襲いかかる。

バチカンでモニターを見る阿修羅と帝釈天、阿修羅は先ほどから落ち着きが無く、一緒に見ている帝釈天を飽きれさせるほど。

「もう少し落ち着いたらどうだ？」

「だって兄さん、ヘリオスが……」

「その兄さんというのは辞めろ」

阿修羅は他人の前では帝釈天の事を‘帝釈天’と呼んでいるが、二人だけの時は‘兄さん’と呼んでいる。

「だって兄さんは兄さんじゃない」

「確かにそうだが、如何せん慣れない」

「嫌なら毘沙門天と阿修羅<sup>あすら</sup>に抗議してよ、私達を兄妹にしたのは彼らよっ。」

ちなみに本当の両親の事は他人のように扱っている、それはホーリーになる前にいた養父母が両親であり、実父母は親として見れないからだ。

帝釈天が「兄さん」なのは阿修羅に兄妹がいないから。

「毘沙門天、やはりいつか殺さなくてはならない相手か」

「今でも恨んでるの？」

「ああ、私怨で他人の命を踏みにじる程ではないが、奴を許した訳ではない、機会があれば……」

帝釈天は拳を強く握り締めた、それは並々ならぬ恨みの証、しかし今は人並みに仲間というものがいる、一匹狼だったあの頃とは違い、毘沙門天以外に恨みがないためにそこまでの殺意とはならないだけ。

「あつ、ヘリオス！」

阿修羅が叫び、帝釈天がモニターを見ると、ヘリオスがいるであろう炎に向かう大量のティルヴィング。

「終わったな」

凄まじい金属音、そして数千にも及ぶティルヴィングが雨のように海に落ちる。

炎が晴れた時、身体中にティルヴィングが刺さり方膝をついているヘリオスがいた。

「死ななかつただけ上出来だよ、まあもう終わりだね」

ニヨルドはヘリオスに近寄った、ヘリオスはニヨルドを上目使いで睨み、肩で息をする。

「やったあ！コレで終わりだ」

ニヨルドはティルヴィングを握ってヘリオスの首元を掻き斬った、本来ならその瞬間バチカンに吐き出される筈だが、未だに海の上にいる、それどころかヘリオスは揺らいで消えた。

ニヨルドが驚いていると、首筋にひんやりとした何かが当てられた。

「ハアハア、残念、だったツスね」

上からぶら下がつてニヨルドにレーヴァティンを首筋に当てるヘリオス、ヘリオスの体にはティルヴィングが刺さっている。

「まさか陽炎で幻影を作ったの？」

「正解、ツスよ、俺の、勝ち、ツスね」

ヘリオスは肩で息をしながらレーヴァテインに力を入れた。

バチカンに吐き出された二人、無様に二人で顔面で着地する。

「おいおいおい！あんなかつこいい戦いした二人のお帰りがこんな無様だと格好付かないぜ！

でもまあ！このいつも馬鹿な二人が一度戦いとなると本当に知的になるのはビックリだよな！？

その火対水の戦い！勝者は火を操る‘太陽のヘリオス’だ！

でも忘れるな！遠距離型にも関わらず優勝候補であるヘリオスをここまで追い込めるのはニヨルドくらいだ！二人に拍手を浴びせてやるうぜ！」

ニヨルドは負けたにも関わらず満面の笑みで手を振る、ヘリオスは阿修羅の方へ走って行った、それを皮切りにお姉さん系のホーリナ

ーがニヨルドを囲んだ。

「かつこよかったわよ、ちょっと疲れたんじゃない、コレから癒してあげる」

「私マッサージが得意なのよ？ニヨルド君には個人的にマッサージしてあげたいなあ」

「まだ子供だけど強さは大人以上なのね、私が本当の大人にしてあげようか？」

「何か楽しそうだね！順番にしてみらいたいな」

後方で明らかに何も知らないニヨルドが良からぬ世界に進みそうなのを、阿修羅とヘリオス、そして帝釈天は苦笑いを浮かべながら見ていた。

「はあ、助けなくて良いの？」

「何か楽しそうだから良いんじゃないんすか？」

「良くは無いと思うが、楽しみではある」

その塊に近寄る青髪の長髪、彼は得物である大鎌を顕現するとニヨルドを持ち上げた、ニヨルドはそれに驚き、タナトスを見下ろした。

「まだテメエには早えよ」

「何だよタナトス！面白そうじゃん！」

「3年経ってからもう一度考えろ、そうすれば俺様の言ってる事が分かるはずだ」

ニヨルドを始めお姉さん系ホーリナーはブーブー言っている、その光景を見て阿修羅達3人は絶句した。

「はあ、タナトスが……」

「あのタナトススよね？」

「あり得んな」

そしてタナトスが向かった先には緊那羅がいた。

「はあ、そういう事」

「なあんだ、つまないツスね」

「尻に敷かれたか」

タナトスは緊那羅の犬と化していた。



## 14：自然（後書き）

ベロシテイ

光速

自らが光の速さで一瞬だけ動ける、ヘリオスや阿修羅は技名を言わずに、音速にも匹敵するような速さを出せる。

インフェルノ

烈火

炎を顕現する神技、特にヘリオスは膨大な炎により全てを包み込むように使い、祝融は得物に纏わして溶かす目的で使う。

ツナミ

津波

どのような場所からでも津波を出せる神技、自然系の神技の中でも破壊力、影響範囲共に最強を誇る。

ファイヤーワークス

花火

自身から得物を花火のように四方八方に撒き散らす神技、ニヨルドが使った得物から出すのは昇華型と言えよう。

15: 本当の力

Vatican VCSO headquarters

ベスト16第7回戦、阿修羅対メルクリウス

まるで自分達がミニチュアの着せ替え人形になったような世界、周りには決して通常規格ではない家具達、まるで二人は某アリスの国に迷い込み、おとぎ話の主人公になってしまったかのよう。

しかしそこはどんなパラレルワールドだろうが戦場、血が流れ、勝者を讃え、敗者はひれ伏すのみの世界。

得物である長刀、夜叉丸を持つているのは阿修羅、ため息を吐きながら相変わらずの趣味の悪さに絶句する。

対照的にこの不思議な世界を楽しんでいるのはメルクリウス、得物は外側に刃の付いた靴、名はソルシユ。

キヨロキヨロと辺りを見回し、発見すると大騒ぎすると逐一報告をする、なんともお気楽愉快なメルクリウス。

「はあ、戦いに来たんじゃないの？」

「だつて見て下さいよ！ 私たちお人形さんになつたみたいですよ！  
？屋根がパカツて開いて人が覗き込んで来たりして？」

阿修羅はため息と共に頭を抱える、どうも狂わされる、完全に向こうのペースに飲まれている。

「アブソルペーション」ズズズズズズズズズズ……



「そうよ」

「霊体はどこから取り込んだんですか？」

「知りたい？」

「はい！」

阿修羅は再び夜叉丸を地面と平行に持ち上げ、目を瞑り集中する、  
そうすると夜叉丸は霊体を吸収し始める。

「こういう事」

「はい！！？」

確かにそうだ、メルクリウスの目には気合いで溜めたようにしか見えていない。

「つい最近知ったんだけど、空気中にも霊体って存在するみたいね、  
極微量だけどこれだけ大きな空間を吸い込めば、大した威力もない  
牽制球くらいは放てるってわけ」

メルクリウスは馬鹿みたいな顔で拍手をした、そして指笛の後。

「ブラボー！凄いです！じゃあ種明かししてくれたお礼に私も種明かしを、私のダンシングは他者には全く害はありません、でも見た感じアカ・マナフさんのエキサイティングと同じような効果ですね？」

「身体強化の一種って事？」

「はい！ちなみにもう一つの神技は秘密で」

メルクリウスは人差し指を唇に当てた、そう、切り札はそちらという事。

「そこまで教えて良いの？」

「フェアじゃないじゃないですか、私も“天竜の巫女”の力がどのようなものか知りませんからね」

そして無言の後に二人同時に構える、情報は五分、実力は未知数、阿修羅は久しぶりに口角を上げた、それはこの戦いを楽しもうとしている証、一筋縄でいかないのはお互い理解している。

「ダンシング！」

踊り始めるメルクリウス、それは興奮状態に近く、身体能力は飛躍的に上がる神技。

阿修羅はそれを分かっていて最初から手加減なしでいく、腰をぐつと沈めた瞬間、普通じゃあ考えられないスピードでメルクリウスに近付く。

阿修羅は胴を斬ろうとしたが、メルクリウスは跳躍で阿修羅の斬撃を避けた後、空中で回し蹴りを放つ。

「やるわね」

阿修羅は地面に手を着いて避けると、着地したメルクリウスが踵落としの体勢に入っていた、阿修羅は手を着いたままメルクリウスの足を蹴り上げ相殺した。

「まさか避けられるとは思いませんでしたよ」

阿修羅は体勢が不充分、メルクリウスの余裕の一言はそこから来るもの。

メルクリウスは地面に着いている足で阿修羅を蹴り上げる、そのまま空中で2発蹴り、最後は思いつき蹴り飛ばした、一連のスムーズな流れはまさに芸術の域まで達している。

阿修羅は転がりながら椅子の脚に体を打ち付け止まる、しかし大したダメージもなく、埃を落としながら立ち上がった。

「やっぱり強いわね」

「私は阿修羅さんの本気が見ただけですよ」

阿修羅は笑みを浮かべると夜叉丸を右手だけで持つ、メルクリウスはやっと巫女の力が見れると思ったが、阿修羅は前後にフラフラと揺れるだけ。

メルクリウスは何があるか分からないために構える、もしかしたら巫女の力を使うのかと。

しかし阿修羅はそのまま倒れるように走り出した、メルクリウスは驚きながらも冷静に対応する、しなやかに弧を描いて振り降ろされる夜叉丸を横に避ける、阿修羅はそのまま後ろを向いてしまった、メルクリウスは迷わず蹴りを放つが、いつの間にか左手に持ち変えていた夜叉丸の柄に当たり軌道がズレた。

しかし、力が入っていない防御のせいで阿修羅の腕は再び弾かれる、途中で右手に持ち変えて横薙に払う、メルクリウスは避けきれず脇腹に切り傷を作ってしまった。

阿修羅は再び後ろを向くと腕をしなやかに振り上げた、メルクリウスの頭では既に次の一手が読めている、振り下ろしを弾き、そのま

ま急所を一発、不規則といえど振りが大きいために読みやすい動き、ただの奇襲にしか過ぎない。

夜叉丸だけに集中する、確かに右手に握られている、ギリギリまで判断して蹴り上げる体勢に入ったその時、切っ先が天に向いている夜叉丸は横にシフトする、そこには左手があった。

「まだまだですね」

「貴女がね」

阿修羅はメルクリウスの上げている足を右手で掴み、夜叉丸は左手で振り下ろす。

メルクリウスは寸前で体を倒し、阿修羅の力が入っていなかったために致命傷は避けられたが、明らかな劣勢に立たされたの事実。

メルクリウスは何とか間合いを取る、阿修羅は追おうとはせず、ただそれを眺めているだけ。

「さあ、本気を出す気になった？」

「悔しいですけど、私も負けたくはないので」

メルクリウスは歯を食いしばり体勢を立て直す、しっかりと構えると阿修羅を睨んだ、出血は収まらないが、待っているのは確実に劣勢に立たされる、なら一気に終わらせるしかない。

「リズム！」

メルクリウスは地面に足を打ち付ける、それによりドラムのように一定のリズムを刻み始めた。

「よく分からない神技が多いのね」

「皆さんそのような感想を抱くのでしょうか、ただ、この神技はいかんせん仲間がいると使い辛いんですよ」

メルクリウスはリズムに合わせて走り出す、阿修羅は何があるか分からないので構えようとしたが、何故か体が思うように動かない。

「そしてダークロードの皆さんはその表情を浮かべて死んで逝きます」

メルクリウスの重い蹴りが阿修羅の顔面を捉えた、派手に転がり、何とか動きづらい体を起き上がらせた瞬間、メルクリウスに蹴り上げられてしまう。

「　　っ！」

肺の酸素が一気に吐き出されてしまう、メルクリウスの足は阿修羅を追い抜き、踵を背中に沈めた。

地面にひれ伏す阿修羅を見下ろすメルクリウス、これは巫女の力云々の話ではない、まず思い通りに体が動かない理由、それが分からない限り勝ち目はない。



モニターの前で戦いを見ているヘリオスと帝釈天、お互い阿修羅は大切な存在、そしてお互い阿修羅と本気の殺し合いをした事がある、だから冷静な阿修羅がコレだけ圧される程メルクリウスは強い。大した事がないように見える神技だが、だからこそあそこまで絶大な力を発揮するのが信じがたい。

「阿修羅大丈夫ツスかね」

「純粹な体術と戦闘の適応力だけなら明らかに阿修羅の方が上だ、だがメルクリウスとやらの神技、あれを破らない限り勝ち目はない」

「夜叉丸も霊体が溜まってないツスよね？うわあ、メルクリウスってこんな強かったんスカ」

冷静に戦況を分析する帝釈天、完全に阿修羅の心配しかしていないヘリオス、その二人の間に割って入る沙羯羅。

「二人して不景気な顔してどうしたの？」

「阿修羅が負けそうなんスよ」

「そりゃ大変だ」

何の緊張感もないセリフの沙羯羅、沙羯羅はモニターをほんの数秒

見て二人の背中をポンと叩く。

「この程度の神技なら誰でも勝てるから大丈夫！」

「沙羯羅はこの神技のタネが分かるのか？」

「二人共分かってなかったの！？少しは頭使わないと脳みそまで筋肉になっちゃうよ」

二人共黙ってしまう、天然で馬鹿なヘリオス、戦いしか知らない帝釈天、二人共、神技や力でごり押しタイプなのであまり頭を使っていない。

「それに阿修羅と殺し合ったヘリオスと帝釈天なら分かるでしょ？阿修羅が感情を隠せないタイプだって事を、元々起伏が少ないからポーカーフェイスに見えるけど、感情だだ漏れじゃん」

「「確かに」」

阿修羅は不適な笑みわ浮かべながら立ち上がる、そして何故か夜叉丸を地面に打ち付けている。

「タネが分かれば簡単ね、今度は私から行かしてもらっわよ」

阿修羅は痛む体を無理矢理黙らせ、リズムに合わせて走り出す、そして二人は軽快に攻防を繰り返す。

「生物は全てリズムで生きてるからね、それを狂わせられたら確かに動きづらいわけよ」

「ならこんなのはどうですか？」

メルクリウスの動きが変わった、一見不規則に見えるが、それはシヤッフル、阿修羅を攪乱させるための作戦だが。

「なら私はこれでどう？」

若干阿修羅の手数が増えた、それは本来1小説を4拍で刻むところを6拍で刻んでいるから、ただでさえ音楽が熟練していなければリズムがとりづらいはず、それを戦闘でいとも簡単にやってのける二人。

「初めてですよ、私の神技にここまで付いてきた人は」

「お嬢様育ちだからピアノやらダンスをやらされていたから、リズム感には自信があるのよ」

「それならもう関係ないですね」

「ただ刺激的でこういうのも楽しいわよ」

お互い攻撃回数が自然に多くなってきた、そしてそれはメルクリウスの望まない消耗戦へと。

体の骨が何本か折れている阿修羅、出血が激しい戦闘により治まらないメルクリウス、痛みに加え失血により意識が朦朧としているメルクリウスの方が劣勢。

そして一瞬、それが命取りとなった。

メルクリウスの体が神技ではなく、肉体的に動きが悪くなったその瞬間。

「ごめんね」

阿修羅は傷口を思いつ切り前蹴りする、それにより意識が飛びかけたメルクリウス。

「終わりよ」

メルクリウスを蹴った足を振り子のように地面に叩き付け、夜叉丸を振り下ろした。

次に聞こえたのは大歓声、それにより二人は戦いが終わった事を理解した、肉体的披露はゼロだが、精神的披露は計り知れない。

「勝者は阿修羅だぁ！お互い死力を尽くしたが、最後は戦闘の天才、阿修羅の勝利という結果で終わったぁ！無敵に見えた神技も阿修羅の前では意味をなさない！こりゃメルクリウスが負けたのもいやに納得出来るぜ！

ただどメルクリウスの神技は阿修羅だから対抗出来た！いくら強くても戦闘であそこまでのリズム感を発揮出来るのはこの二人くらいだぁ！」

メルクリウスは阿修羅に近寄り握手をせがんだ、阿修羅は迷わずに手を差し出し握手をした。

「さすがですね！本気を出される前に負けちゃいました」

「もし二人共無傷であの神技を使われたら巫女の力を使ってたわよ、あの神技はリズムを合わせなきゃ戦えない分、リズムが合えば純粋な体術対決だからね、リズムを外せない戦いなら五分よ」

「ってことは私に勝ち目はなかったんですか」

あからさまに落ち込むメルクリウス、勝てない相手と戦っていたと思うと同じレベルとは思えない。

「あれはイリーガルな力だからあんまり使いたくないのよ、だから強さは五分よ」

「はい！ありがとうございます！」

そのままメルクリウスは走って帰って行ってしまった。

阿修羅は自分の力を憎んだ、強さなどいらない、生き残るために最低限の力だけで良い、また第二次ホーリナーラグナロクのように、自分が中心で争いが起こるのが嫌だった。

## 15：本当の力（後書き）

アブソルペーション

吸収

霊体を対象物から吸い取る神技、対象物に霊体があり、得物が触れていればどんなものであれ吸い取れる。

エミッション

放出

アブソルペーションで吸い取った霊体を攻撃として放出する、それは吸い取った量により威力は変わる。

チェンジ

転化

対をなす神技を代える神技。

ダンシング

舞踊

踊る事により神技発動中は身体能力を強化する。

リズム

拍子

リズムを刻む事によりフィールド内にいる人間のリズムを支配し、動き辛くする、相当のリズム感を持っていなければまともに戦えない。

## 16：友情？

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

ベスト16第8回戦、アルテミス対ククルカン

大きな街、都会と言えるような街のメインストリート、ビル群の隙間にいるアルテミスとククルカン、狭い空に高い壁、それは押し潰されそうになるような圧迫感、そこに一人一人いないのは不自然以外の何物でもない。

アルテミスは激しく苛ついている、それは精神状態が優れないククルカンに対して、ユピテルが死んだから死んだような目をしているククルカン、アルテミスはそんなククルカンが嫌で嫌でしょうがなかった。

「ククルカン、アンタ少しは目を覚ましたらどうだい？」

「アルテミスに何が分かるっての」

「確かに分からないね、ただ分かる気はさらさらないよ」

ただの睨み合い、それは冷たく、そして意味をなさない時間、しかしククルカンがユラユラとおぼつかない足で近寄る、その過程で腕輪に触れた、得物は刃以外を覆うように刃のナックルガードが付いた槍、名はルドラス、アルテミスも腕輪に触れた、得物はドーナツ型の暗器、チャクラム、名はフルムーン。

ククルカンは攻撃範囲内に入ると一気に踏み込む、大振りでルドラスを叩きつけるが、アルテミスに簡単に避けられ、更に顔面を蹴



られて尻餅をついてしまう。

それでも命がない人形のように立ち上がり、アルテミスに向かってルドラシスを振り下ろす。

「いくらがむしゃらな戦闘って言っても、これは意味がないって気付きな」

今度は腹を蹴り飛ばす、よろめきながら後退するが、やはり歩いて来るククルカン、それによりアルテミスの中で何かが弾け飛んだ。

「アンタいい加減にしなよ！」

再びデタラメな動きで横薙に払うククルカンに対し、体勢を低くして避けると、タツクルをして押し倒した。

ルドラシスを蹴り飛ばして馬乗りの状態になると、ククルカンの胸ぐらを掴んで引き寄せる。

「アンタホーリナーだろ！ホーリナーに恋したんならいつ死別しても覚悟出来てるんじゃないのかったのかい！？」

「何が分かるっていうの？」

「何も分からないね！ただアンタが腐りきっているっていうのは分かるよ！アンタが愛したユピテルってのはアンタのサバサバした性格が好きだったんじゃないのかい！？」

ククルカンの一寸の目に感情が戻る、それは明確な殺意。

「もうユピテルはいないんだよ！？ユピテルがいない世界なら生きる価値なんてない！」

「アンタ！」

アルテミスは思いっきりククルカンを殴った。

「ユピテルはアンタのために死ぬ気で頑張ったんじゃないのかい！？アンタの笑顔が好きだからいつも頑張ってたんじゃないのかい！？アンタの笑顔以外何でユピテルを叩く！アンタの笑顔のために死んだユピテルの死を無駄にしてるんだよ！？」

アルテミスは完全に怒りに身を任せ、もう一度殴ろうとする、しかしそれはククルカンに止められてしまう、そしてククルカンの目はユピテルがいた頃の目に戻っていた。

「ム力つくム力つく！アルテミスに何が分かっていうの！ユピテルが守りたいのは笑顔じゃない！うちの大好きなこの世界全て！そんでそんで！うちとユピテルが出会えた神選10階だよ！」

アルテミスの顔は怒りから笑顔へと変わった。

「ならアンタがやる事は分かっているんだね？」

「当然当然、ユピテルが守りたいものはうちも守りたい、だからだから、精一杯戦って、死んでからユピテルにいっぱい自慢してやるんだから」

ククルカンはアルテミスの腕を掴み、そのまま投げ飛ばした、アルテミスはビルの壁に叩き付けられるが、すぐに立ち上がる、しかしルドラシスを顕現したククルカンの追撃。

先程とは比べものにならない速さで振り降ろされるルドラシス、ア

ルテミスはそれを避けると、フルムーンを投げるモーションに入るが、それよりも早くククルカンの拳が振り下ろされる。ククルカンの拳は避けられてしまい、アスファルトの地面に突き刺さる。

「前よりデタラメになってるんじゃない？」

「うるさいうるさい！ユピテルを殺された恨み辛み、全部晴らさしてもらってからね！」

ククルカンはそのままアスファルトを剥がしてアルテミスに投げつけた、アルテミスはフルムーンを3つ、アスファルトに向かって投げる。

「エクスペンション！」

大きくなったフルムーンはアスファルトをバラバラにし、勢いを失う事なくククルカンに襲い掛かる。

「はあああああああああああー！！」

ククルカンはフルムーンを思いっきりドラシスでぶっ叩いて落とす、ククルカンに落とされたフルムーンは綺麗に曲がっている、その光景に口をあぐり開けるアルテミス。

「あ、アンタ、それディアンギットの鉄だぞ？」

ディアンギットの鉄を曲げるなど文明の利器では不可能、核兵器をうけてもビクともしない強度だ。

「関係ない関係ない！うちに刃を向ける奴は全員叩き伏せる！」

「まあそっちの方がアンタらしくて良いね」

ダグザ、タナトス、ヘリオス、モリガンは神選10階の待合室でモニターを見ていた、一番古く、ユピテルを含めた7人は神選10階にいたのが長い、だからこそククルカンの気持ちが多少なりとも分かるし、アルテミスの気持ちも分かる。

「やっぱりあの二人は仲良いんじゃないッスか？」

「どこをどうすればそう見えるんだい？」

「ただあいつらを見てるとスカツとするよな」

「誰よりもぶつかり合った分、誰よりもお互いを理解してるんだろ  
うな、そうなるとククルカンの目を覚まさせられるのはアルテミス

「ただだったんだろうな」

そしてフルムーンが叩きつけられ、見るも無惨な曲がり方をした場面になると、そこにいた全員はアルテミスと同じ顔になる。

「な、何スかあれ？得物って人間の力で曲がるもんなんスか？」

「神技を使ったようには見えなかったね、あれじゃあ僕より破壊神に近いじゃないか」

「あんなデタラメな力ありかよ？普通神技使って壊すもんだろ？」

「怒りにより神技の暴発、乱気流と引力を足し、全身のバネを使い……いや、不可能だ、いくら身体強化されたホーリナーといえど、ディアンギットの鉄を曲げるなど不可能だ」

全員が絶句したククルカンの一撃、アスファルトを素手で剥がす程の馬鹿力というのは知っていたが、ディアンギットの鉄を曲げる程だとは思わなかった、いや、普通はアスファルトを剥がすだけで規格外なのを何とか受け入れていた節はある、つまりククルカンは……

「……化け物だ」

アルテミスはフルムーンを大きくして接近戦に持ち込む、何とかククルカンと斬り結ぶアルテミス、遠距離型にしたら奇跡に近いが、これが遠距離型最強の力、そして牽制程度に新たなフルムーンを顕現して投げる、しかしククルカンがルドラシスを振ると、弾丸のような速さでビルに突き刺さる。

「それを待つてたよ！」

モーションが大きく、力任せな動きのククルカンには隙が多い、故にアルテミスはこの大振りになる瞬間を狙っていた。

フルムーンを横に振るうと、ククルカンは何とかバックステップで距離を取るが、脇腹を浅く斬られてしまう。

傷自体は大した事ではないのだが、近距離型であるククルカンに遠距離型であるアルテミスが接近戦で傷を負わせた。

むしろ1対1では遠距離型は壊滅的な弱さ、しかしそれを克服した者だけが神選10階に入れる、つまりアルテミスは狭き門をぐぐった数少ないホーリナー！。

「アンタ休んでる隙はないよ」

アルテミスはフルムーンを次々と投げる、それは暗器の常識を超えて曲がりくねり、様々な方向からククルカンに襲い掛かる。

「バキューム！」

ククルカンはフルムーンを打ち落とすのと共に、手が回らないフルムーンは真空の突発的衝撃を使い、打ち落とした。

普通ならその不規則な動きに気を取られるが、ククルカンはアルテミスの戦い方に慣れているために、いとも簡単に打ち落とす、しかし慣れていたとしても死角から来たフルムーンまで落としてるのは不可解である。

「やるじゃないか、よく死角から狙ってるのに打ち落とせたね？」

「簡単簡単、気流の変化があるからうちに死角はない！」

「さすが、伊達に風神の神徳があるわけじゃないんだね」

「そうそう、まあもう疲れちゃったし終わりにしようか？」

ククルカンが走り出した、アルテミスはその場から動かず、ニヤリと笑った。

ククルカンに向かって手のひらを見せる、そこにフルムーンが顕現された。

「ルナティック」

淡い光で発光する、それを見たククルカンは動きが鈍る、そして内からの自分に対する狂気に喰われそうになる。

「じ、ん……………なのぉ」

ククルカンがアルテミスを睨み付ける。

「うちはこんなのに負けない！」

気合いで内からの狂気を追い出した。

「それくらい分かってたよ」

ククルカンは気付くとフルムーンに包囲されていた、これじゃあ打ち落としていては間に合わない。

「ツイスター！」

凄まじい竜巻が発生する、フルムーンは軽々と竜巻に巻かれて力を失い、風の猛威に吞まれてしまう。

アルテミスは冷静に対応する、並みの力では巻き上げられつしまう、しかし向こうは砂塵で視界がゼロ、ならばとアルテミスは一回転してフルムーンに勢いを付けて投げる。

「エクスペンション！」

巨大化するフルムーン、重量も加わり竜巻を貫く力は充分、そして竜巻に触れた瞬間、何故か竜巻は消え失せた。

「なっ！？」

そしてククルカンが投げたルドラスがフルムーンに当たり、二つ



の得物は地面に落ちる。

「バキューム！」

ククルカンは神技の同時発動により、ツイスターの力を足と腕に纏わせ、まず地面を蹴る、風の力を借りて凄まじい勢いでアルテミスへと迫る。

そして腕には竜巻、そして真空、つまり腕にかまいたちを纏わせ、腕を振り上げた。

アルテミスは全て気付いていたが、このスピードに対応は出来ない、何か神技があれば相殺出来るだろうが、アルテミスに攻撃系の神技はない。

「やるじゃないか」

二人は気付くとバチカンにいた、そしてお互い目を合わせる。

「ちよつとちよつと！最後まで頑張つて戦いなよ！なに最後かつこつけてんの！？」

「うるせえよ！アンタも近距離型なら得物をなげてんじゃないよ！プライドってもんはないかよ！？」

「黙れ黙れ！アルテミスだつてぶん殴つてんじゃない！遠距離型ならさつさと急所狙つて殺しなさいよ！」

「アンタに言われたくないね！戦略もクソもないめちゃくちな戦い方ばかりしやがって！」

早くも喧嘩する二人、観客だったホーリナー達は口を開けて二人の喧嘩を見ている、元神選10階の面々はまたか、といった具合。

『と、とりあえず勝者はククルカンだな、なんか吹っ切れたみたいだから良かった良かった、あんなむちゃくちゃな戦い方が出来るのはククルカンだけだな、うん。』

あとその二人、喧嘩なら裏でやれ、今日はもう終わりだ、まあ仲が良いのは分かったよ、新手のスキンシップってやつだろ？』

ククルカンとアルテミスの獲物は実況に変わる、そして短く一言。

「「ぶつ殺す！」」



## 16：友情？（後書き）

エクスペンション

拡大

得物を大きくする、その比率により使用者の力量が分かる。

ルナティック

狂気

相手の正常な思考を奪い、極度の自傷衝動を起こす、しかし、自我の強い人間に対しての効力は希薄。

バキューム

真空

真空状態を作り出す、極地的にも、広域でも可能。

ツイスター

竜巻

竜巻を作り出す、大小は使用者次第だが、その威力は使用者により左右される。

## 17：鈍感

I t a r y   c i t y   a r e a

ベスト16も終わり、明日からはベスト8、更に熾烈な戦いになるのは必至、そして全世界のホーリナーが期待する高次元な戦い、まさに神選10階のメンツ、そして個人の力試しの場でもある。

パーティー等もなく、帝釈天は暇を持て余してイタリアの街を歩いていた、美しい街並み。

あえて人通りが少ない道を通って一人を楽しむ、しかし今までは好んでいた一人、なぜか今は無性に落ち着かない、自分でも分かっている、神選10階に入り、本当の仲間というものに出会い、自分が変わりつつある事に。

今は守りたいものも出来た、妹である阿修羅は本当にかげがえのない存在、そして、阿修羅が大切にしていたものを自分が奪った、それに対して罪悪感も抱いている。

さらに歩く事数分、感慨を強制終了する携帯の着信、帝釈天は携帯をポケットから取り出し、通話ボタンを押して耳に当てた。

「GPS送って!」

その声は沙羯羅、この大会で何かと自分に付きまとっているのに、声だけで分かるようになってしまった、しかしそれも不思議といやではない。

「いきなり何を言い出す?」

「あとそこから動いたら後でお仕置きするからね!」

そのまま電話を切られてしまった、強引、なぜ日本支部の女はこうデタラメなのかと思う。

お仕置きというのがそこまで怖くはない、だが昨日のパーティーで泣かしてるだけあって、渋々沙羯羅に自分の位置情報を送り、近くでコーヒーを調達して待つ。

そして待つこと10数分、沙羯羅が走って帝釈天に向かって来た、息を切らして止まり、膝に手を当てて帝釈天を見上げる、帝釈天はふと思った、沙羯羅は自分と同じ歳、これが年相応の女の子の表情なんだろう、そして、女性としての魅力はかなりのものと。大きな目、若干小さい鼻だが、大きな口はつり上がっている、下手に大人っぽくなく、子供っぽくもない。

「どうしたんだ? いきなり」

「デートしようよ」

「デート!?!」

柄にもなく叫んでしまった帝釈天、沙羯羅はお構いなしに笑顔を作る。

「まだ4時でしょ? 早く終わっちゃったんだからデートの一つや二つ良いじゃん、イタリアには支援者がやってる高級レストランもあるんだって」

「しかし……」

「私とデートするのが嫌なの？」

若干寂しそうな顔をする沙羯羅、沙羯羅の前だとどうも狂わされてしまふ帝釈天。

「そうじゃないんだ、経験がないから、どうも慣れなくてな」

「私も初めてだよ」

沙羯羅は笑顔で帝釈天に顔を近付ける、帝釈天は驚いていた、そっちの方は自分よりも経験豊富だと思っていたからだ。

「ずっと女子校で、一応これでもお嬢様だったからね、何か出会いはないわけよ」

「だが、なぜ俺なんだ？」

「帝釈天はホーリナーの世界知らないんでしょう？それならせつかくなんだから普通の18歳みたいな事しようよ」

「普通のデートって、どんななんだ？」

「ウィンドウショッピングしたり、遊園地行ったり、あとは映画とか？」

帝釈天は内心焦っていた、周りにまともな女と言ったら沙羯羅だけだった、その沙羯羅に誘われたなら、いくら帝釈天と言えど緊張の

一つや二つは当たり前だ。

「そうと決まればレッツゴー！」

沙羯羅は帝釈天の手を掴んだで歩き出す。

「お、おい、考え中だ！」

沙羯羅は無視して帝釈天の手をグイグイ引っ張る、帝釈天は顔を赤くしながら何とか着いて行く、顔が赤い理由は手、帝釈天も一応男だったらしい。

イタリアの街を歩く沙羯羅と帝釈天、なぜか沙羯羅に手を繋がれたままで、離そうとすると怒られる、帝釈天からしたら落ち着かないが、沙羯羅曰わくどこにも行かないように、との事らしい。

「帝釈天ってオシャレもクソもあつたもんじゃないよね？」

「ひ、酷い言われようだな」

帝釈天は苦笑いを浮かべた、単刀直入の物言いにはさすがにキツいものがあつた。

「その服装は誰の趣味？」

白いロングコートの襟に刺繍が入り、中は紺色のシャツ、下はデニ



ムという微妙な格好。

「ボスに適当に任した」

「だからダメなんだよ！ほら、オフくらいは団服以外の着ようよ」

「しかし、動き易いし服などどれでも良いような」

「それがダメ！阿修羅もそうだけど、何であなた達兄妹はオシャレに無頓着なの！？」

よし！私がコーディネートしてあげるからオフくらいは違う服を着る！」

「わ、分かった」

帝釈天は再びグイグイと引つ張られる、そして思った、阿修羅はともかく何で自分の心配ばかりするのかと、服装に関しては神選10階のメンツは殆ど無頓着、気にしているのは女性陣と、タナトスクらいなもの。

しかも沙羯羅も女性なら、阿修羅の方を変えるのが先じゃないのかと思う、あの服装はさすがの帝釈天もおかしいと思う程だからだ。

「ここなんて良さそうじゃない？」

「いまいち俺には分からない」

「帝釈天に聞いた私が馬鹿だった、とりあえず入ろう！」

沙羯羅は帝釈天の手を離すと、ベロシテイでも使ってるんじゃないかと思う程のスピードで服を集める、それには帝釈天も開いた口が

塞がらない。

しばらくすると大量の服を持った沙羯羅が戻って来た。

「よし！更衣室に入る！」

手が塞がっている沙羯羅は足で帝釈天を更衣室に押し込んだ、完全に成すがままの帝釈天、そして服を一式投げ込まれてカーテンを閉じられた。

「それ着てみて」

帝釈天はとりあえず着てみる事にした。

「お、おい、このデニムキツイぞ？」

「大丈夫！それはそんなもんだから」

「そうなのか？」

「そうなの！」

帝釈天は渋々服を着ると、カーテンを開いた、そこには丈が長く不揃いなカーディガン、中はタンクトップで、下はスキニーデニムに編み上げのブーツ。

「うん！こんなのもありかな？」

帝釈天の首にストールを巻いた。

「ありあり！そっちの方が格好良さ倍増だよ！」

「そ、そうか？」

格好良さ、という言葉に反応してしまった、そんな言葉を言われた事がなかったので、免疫はゼロだった。

「よし！次はこれ！」

「つ、次？」

「まだまだあるよ！」

沙羯羅の後ろには気が遠くなる程の服やアクセサリーがあった、帝釈天は気付く、恐らく着せ替え人形になって帰るはめになるのだらうと。

あれから数時間、案の定着せ替え人形になった帝釈天、ホストのような格好、真面目な大学生のような格好、パンキッシュな格好等、後半あたりはもうどうでもよくなっていた。

「よし、じゃあコレだけ貰って帰ろう！」

それは大きな紙袋3つ分、帝釈天はため息を吐いて袋を持った。

「さすが帝釈天、紳士だねえ」

「どうせ持てとか言うのдар？」

「まあ女の子に持たせる男ってのもどうかと思うしね」

「とりあえずコレを持って歩くのは面倒だな、少しここで待ってる」

帝釈天は走ってどこかへ行ってしまった、沙羯羅は行き交う人々を見る、全員が沙羯羅の事はないもののように素通りする、沙羯羅にとってそれは問題ではなかった。

カップルも何人が通り過ぎる、それに沙羯羅も珍しくため息を吐いた。

「分かってたけど、帝釈天って鈍感だなあ」

沙羯羅は手を繋いでいた手を見て顔を赤らめる、沙羯羅も男性に対する免疫などない、まさかホーリナーになってからこれほどまでに頑張るとは思っていなかった。

物思いに耽っていると、黒いビックスクーターが目の前に停まった。

「ほら、行くぞ」

「さすが帝釈天！気が利くねえ」

帝釈天はメットインを開けて服を詰め込む、入らなかったのは足元へ。

帝釈天がバイクに跨ると、沙羯羅も後ろに座った。

「バイクなんて運転出来るの？」

「日本支部にいたから大体の乗り物は運転出来るな」

「飛行機とかも！？」

「小型なら余裕だ、ジャンボとなると分からないがな」

「私は軽自動車だったからなあ、でもエンジンはV8積んであるからかなり速いよ」

「改造とは沙羯羅らしい」

帝釈天はアクセルをひねってバイクを走らせた、あっという間にゆつくり走っている車を追い抜いて行く、沙羯羅がメーターを見ると120kmも出ていた。

「で、レストランはどこにあるんだ？」

「3つ目の十字路を右折だよ、ククルカンがすぐに分かるって」

「分かった」

帝釈天はスイスイと車を避けて行く、沙羯羅は振り落とされそうになり、帝釈天に抱き付くように掴まる、帝釈天はポーカーフェイスを装っているが、内心焦っていた、しかし沙羯羅も意を決した行動。帝釈天は車体の底を若干擦りながら右折した、そこには一つのレストランがある、看板にはVCSOと書いてある。

「確かに分かりやすいな」

「一般人には分からないだろうしね」

二人は苦笑しながらバイクを停めた、そしてなぜか得物を顕現してバイクに乗せる、一見するとクレイモアがバイクに乗っているなど

有り得ない光景だ。

「何してるの？」

「バイク屋から貰ってきたやつだからバレたら面倒だ、コレなら誰にも気付かれないだろ？」

「さすが帝釈天！」

二人はレストランの扉を開けた、薄暗くシックに纏まっている、そして入ってすぐの所には燕尾服を来た白髪の男性がいる、男性は帝釈天を見ると笑顔で一礼した。

「神選10階、第9階の帝釈天様と、……………そちらのお嬢様は？」

「日本支部の沙羯羅でえす」

「バチカンでは大会が行われていますからそれで、存じ上げず大変失礼致しました」

「全然大丈夫ですよ」

「ではこちらへ」

恐らく彼は神選10階とイタリア支部の関係者の名前と顔はすぐに一致するのだろう、現に帝釈天が分かっても沙羯羅は分からなかった。

沙羯羅達は個室に通されるとメニューが出てきた、それは英語で書かれていて、ホーリナーにちゃんと読めるようになっていて。

「こちらの方が本日のオススメとなっております」

「じゃあそれを二つ頼む」

「かしこまりました」

男性はメニューを片付け、一礼して出て行った、この個室からは美しいイタリアの通りは見えず、代わりに美しい庭が広がっている。落ち着いた雰囲気で、外界からは完全に遮断されていた。

「なんか高そうなお店だね」

「支援者がやってる店というのは基本的にタダだ、物質調達の代わりにVCSOが多大な援助をしてるらしいからな」

こういう店から食料の調達などを行うVCSO、お互いがお互いが支え合う相互関係によりこの世界は成り立っている。

二人は料理が来るまで他愛もない話で盛り上がっていたその時、先程の男性が若干息を切らしながらゆっくりと入って来た、その手には電話が握られている。

「帝釈天様、カミュウマーン様からお電話です」

「カミュウマーンってあのへらへらした元帥だよね？」

「嫌な予感がする」

帝釈天は電話を受け取り耳に当てた。

「何だ？」

「デート中ごめんねえ」

「監視か、薄々感じていたがな」

そう、帝釈天は悪魔だった事もあり監視の一つや二つ覚悟していた、ずっと隠すつもりがないような視線にも。

「帝釈天だけじゃないよ、タナトスとかヘリオスも今はデート中かな？」

「知らない情報はいらん、からかうために電話をよこした訳ではないだろ？」

「じゃあ本題に入るよ、すぐそこにある丘にバジリスクが現れたんだって、帝釈天達が一番近いからお願い、沙羯羅ちゃんもいるんなら大丈夫だよな？」

「しょうがない」

「じゃあ携帯に位置情報を送っとくね」

電話が切れて携帯が鳴り始めた、帝釈天は画面を見てダークロードの位置を確認した。

「悪い、20分程で戻るから料理を残しておいてくれないか？」

「かしこまりました、ご武運をお祈りしております」



「恩に着る」

帝釈天は沙羯羅を見た、もう殆ど感づいているらしく、笑顔を作った。

「すまない、コレから俺と沙羯羅で任務だ、大丈夫か？」

「余裕！相手は誰？」

「バジリスク、馬鹿でかいトカゲだ」

「楽しそうだね、なら早く行ってちゃっちゃと終わらせちゃおう？」

「ああ」

帝釈天と沙羯羅は走って店を出る、バイクに置いてあった髭切をしまうとエンジンをかける、二人で跨ると沙羯羅は帝釈天の腰に腕を回した、帝釈天は任務が慣れかは分らないが、照れというものは見受けられない、そのまま一気にアクセルを捻った。

開けた小高い丘、山というには低すぎ、坂の上というには高すぎる、なんとも微妙なその場所。

帝釈天はバイクを停めて得物を顕現した、得物はクレイモア、名は髭切、沙羯羅の手にも得物、弓幹が刃の弓、名は菊理姫。

しかしそこにはバジリスクはおるか、帝釈天と沙羯羅以外何もいない。

「元帥のイタズラかな？」

「それはないだろう、あれでも一応VCSOの長だからな」

「じゃあ逃げたのかな？」

「まずは捜してからだ」

「了解！」

沙羯羅は敬礼して構えた、帝釈天は髭切に指を当てる。

「コラプス」

髭切は縦に筋が入ると、真っ二つになり二振りになる。

「気をつけろ、バジリスクの目に睨まれると石化したり、猛毒があるらしい」

「じゃあ強いんだ？」

「いや、脅威はそれだけだ、戦闘に関してはエビルユニオンレベルだ」

「じゃあ現れてからの初撃だね」

「ああ」

帝釈天は髭切を持って歩き始める、沙羯羅は構えながら様々な方向

への警戒を怠らない。

気配は全くない、誤報で神選10階が動く事は皆無に等しい、あるとするなら、それは悪魔達がやったような罠、神選10階を呼び出すための。

帝釈天が思考を巡らせた事により一瞬警戒が薄れた、その隙に背後に悪寒のようなものを感じる、帝釈天が振り向くと、いつの間にかバジリスクが沙羯羅の後ろにいた。

「沙羯羅避けるお!!」

沙羯羅は訳が分からず、とりあえず前に避けるが、バジリスクの牙で肩を浅く斬りさかれてしまった。

「クソ」

帝釈天はバジリスクの背後を取る、バジリスクはトカゲを巨大にしたような雰囲気、口には牙、特に脅威はないが、その目と口は危険そのもの。

帝釈天はバジリスクが振り向く前に背中に飛び乗り、二振りになった髭切を一度合わせ、背中に突き刺す。

「!!」

奇声を上げて悶え苦しむバジリスク、帝釈天はそのまま引き裂くように髭切を左右に、バジリスクを引き裂くように振り払った。

完全に胴から真っ二つになり、息絶えると同時に粒子化されて砂の山と化した。

帝釈天は沙羯羅に目を移すと、顔を青白くして悶えている沙羯羅がいる、帝釈天は走って近寄り、頭に手を当てる。

「動かないでくれ」

苦しみで暴れまわっているために集中出来ない、帝釈天は沙羯羅を抱き起こすと、そのまま抱きしめ毒の気配を探す、試した事はないが、出来るはずと集中した。

「コラプス」

沙羯羅の体は力なくうなだれ、帝釈天に身を預けるような状態になった、沙羯羅の血中に流れる毒素を破壊し、沙羯羅は体が耐えきれずに気絶したのだ。

それによりハツと我に帰る、今の状態は誰がどのような見方をして、抱き合ってるだけにしか見えない、しかし今の状態で沙羯羅を投げ出すわけにはいかない。

「どうしたもんか」

帝釈天が沙羯羅を抱きしめながら考えていると、沙羯羅の腕に力が入った、慌てて引き離そうとしたが、なぜか離れない沙羯羅。

「このままが良いの、離れたら怒るよ？」

「だが」

「男なら黙って女を幸せにする」

「分かった」

実のところ帝釈天は何も分かっていなかった、沙羯羅の幸せとは何か、自分なんかとこのような状態になって嫌じゃないのか。

つまるところ帝釈天は鈍感だ、むしろ他人のそういう感情には疎い、故に沙羯羅の気持ちなど気づくよしもない。

「早く戻らないと料理が冷めてしまうぞ？」

「じゃああと少しだけ、帝釈天はイヤ？」

「沙羯羅が望むならイヤではない」

「ややこしい男だなあ」

実際のところイヤ云々の前にパンク寸前だった、なぜか落ち着かないこの状況、帝釈天自身が撒いた種だが、ここまで一人歩きするとは思わなかったからだ。

「（ここまでやって鈍感な帝釈天にはダメか）」

## 17：鈍感（後書き）

コラプス

崩壊

全てのものを壊す神技

ここからあとがきです。

もうそろそろクライマックス突入です、次の次くらいで新キャラなども登場させる予定なので、楽しみにしていて下さい。

最終回に向けてペースアップをしていきますので、どうぞご意見などがあるなら早めにお願ひします。

## 18：修復

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

タナトスは珍しくタバコを吸いながらバチカンを歩いていた、落ち着きたい時にしか吸わないようにしている、コレは一般人だった時からの習慣で、特に仕事が終わった時に吸っていた、たまにしか吸わないのは一応健康に気をつけているため。

バチカンは未だにお祭り騒ぎが収まらない、各支部のホーリナーは珍しい物を見るような目でタナトスを見る、実際珍しいものなのでタナトスも特別気にはしない。

バチカンの裏の方まで行くと風斬り音が聴こえた、ゆっくり歩き、物陰から風斬り音の正体を見ると、大きな木刀を素振りしている緊那羅がいた。

タナトスはしばらく物陰から緊那羅の素振りを眺める、とても素振りが出来るような重さの木刀ではないだろう、しかし緊那羅は軽々とそれを振り回す。

木刀を地面に突き刺して汗を拭う緊那羅、タナトスが退散しようと思っただけの瞬間。

「覗き見してそれで終わり？」

「覗き見とは人聞きが悪いぜ、見物と言ってほしいな」

「そんな所で気配を殺してずっと見てたら覗き見じゃない」

タナトスは歩きながら緊那羅に近寄った、緊那羅は汗を拭ったタオ

ルを木刀にかけると、ニヤリと笑う。

「敵の偵察にでも来たの」

「景気の良い音を鳴らしてるから観察に来たんだよ」

タナトスはその場に座り緊那羅を見上げる、それにならうように緊那羅もその場に座った。

「この木刀に興味あるんでしょ？」

タナトスがひたすら緊那羅の後ろにある木刀を見ている事を気付かれていたらしい、風斬り音を聴く限り並みの重量ではないはず、その大きさだけでも常人にはまともには振れないであろう、しかし確実に重い木を使っているはず。

「どう、振ってみる？」

緊那羅は地面に刺さった木刀を引き抜き、軽々と回して持ち手の方をタナトスに向けて差し出す、そしてタナトスが握ると、なぜか持ち手は異様に無機質な冷たさを帯びていた。

「離すわよ」

「うわ！」

タナトスが情けない声を出すのも無理はない、力を込めていたタナトスでも支えきれなかった。

立ち上がり、しっかりと両手で握り持ち上げる、震えながらも何とか持ち上げたが、こんなものを振ったら体ごと持って行かれる、そ



れ程重かった。

「ちなみにそれ、木製じゃないわよ、特注の一際重い鉄で作ったもの、人を殴るわけじゃないから重けりゃ良いのよね」

「デメエ、こんなもんを振り回すなんて化け物か!？」

「別にククルカンみたいな馬鹿力な訳じゃないわよ? 握り方と力の入れ具合、あとは姿勢次第で誰でも触れるようになるわよ」

タナトスから受け取り軽々と振るってみせる、しかしその度にタナトスでも分かるくらいの気迫が押し寄せる。

「そこまでなるのにどれだけ掛かるんだよ?」

半ば呆れながら聞いた。

「凡人なら20年もすりゃ出来るんじゃないの?」

当たり前のように言い放つ緊那羅、しかしタナトスは更に呆れながらため息を吐いた。

「デメエは赤ん坊の頃から振ってたのかよ?」

「そんなわけじゃない、まあ阿修羅に負けてから2年くらいじゃない?」

「2年だあ!？凡人の10倍の早さかよ、天才ってのはいるもんだな」

剣術に関してはホーリナー最強という事が証明された緊那羅、元からの才能に加え努力により最強を手にした。

「そりゃあ凡人に同じ量を練習すればの話でしょ？才能は認めるわよ、ただ凡人の5倍は練習してるからね、この手を見れば分かるでしょ？」

緊那羅の手は普通じゃあり得ないくらい厚くなっていた、剣士としてもあり得ない、それが緊那羅の鍛錬の激しさを物語っている。

緊那羅は阿修羅に一度負けている、しかも本気の殺し合いで緊那羅を殺さずに、完全なる勝利をしている。

それだけならまだしも緊那羅は幼い頃から剣術の鍛錬を積んできた、しかし阿修羅は我流に加え鍛錬など積んでいない。

暗にいくら積み上げたものがあるうと天才には勝てない、そう言われたようなものだった、緊那羅のプライドも今までも全て否定されたような、そんな気分だった。

阿修羅の前ではいつも通り気丈に振る舞えど、裏では常人では出来ないような努力を積んでいた。

そして得たのはホーリナー最強の剣士という称号、しかし満たされなかった、むしろ怯えていた、目指すものがなくなり、追われるだけの立場になった事が、故にさらに自分を高めるために、未だにこうやって鍛錬を積んでいる。

「だけどデメエも女ならこんな手じゃ嫌だろ？」

タナトスは緊那羅の手を握り、手のひらを撫でるように触れた、それにより紅潮する顔を見られないように、タナトスから隠す緊那羅。

「怖いんだからしょうがないじゃない、負けるのが怖くてしょうがないのよ」

「ベスト8に進んだんだから自信を持て、恐らく相手次第じゃあ誰が最強でもおかしくない、俺様だってテメエに勝てるか分からないんだぜ？」

しかも神選10階未経験者はテメエ一人だ、言っちゃえば神選10階を抜けば最強だぜ？それでもテメエは満足出来ないのかよ？」

緊那羅はタナトスから手を離し、斜め下を向いて考える、確かに緊那羅は強くなった、それも自分が望んでいたもの以上に。

「アタシは剣士に負けなきゃそれで良いのよ、あんたに負けようが気にしない、ただ剣士と戦う事があったなら、アタシは絶対に負けない、ちなみにアタシに勝った奴が剣士に負けるのも嫌ね」

「じゃあ安心しろ、俺様は最強だぜ？誰にも負けない」

「あら、あんたに負ける気もないわよ」

二人はクスクスと笑う、それは戦いを楽しみにする戦士の笑みではない、一人の人間としての会話を楽しんでいる。

「そうと決まったら出掛けるぞ」

「はい？」

「女らしさのかけらもないテメエに、俺様が男として相手してやる」

「それはあんたなりのデートのお誘いって事？」

「まあそんな感じだな、ほら、もたもたしてるな、行くぜ？」

タナトスは緊那羅の手を掴んで歩き出す、緊那羅は若干つんのめりながらも、タナトスの手を握って着いていく。

# I t a r y c i t y a r e a

緊那羅の見たことがない街がそこに広がっていた、日本から出たのは今回が初めてで、海外など写真でしか見たことのない世界だった。緊那羅の手をグイグイ引っ張りながら歩くタナトス、超が付く程の自己チューで、年齢は大して変わらないのにたまに見せる大人っぽい表情、そして思考回路は謎だらけ、緊那羅は気付いた、阿修羅が言っていた緊那羅にぴったりの人間は間違いなくタナトスだ。恐らく極一握りの人間を除いては、タナトスに恐れ of 感情しか抱いていないであろう、言わずもがな緊那羅は一握りの人間だ。

「ねえ、どこに向かつてるのよ？」

「宛はねえよ、ただ、テメエを連れ回したい気分なだけだ」

「ならドライブとかもつと気の効いた事しなさいよ」

「しょうがねえ、わがままな奴だぜ」

タナトスは立ち止まり、周りをキョロキョロと見回すと、近くにある高級車に向かって歩き出した、緊那羅の手を離して、通行人の髪留めを奪い、オープンカーの運転席に飛び乗った。

「あんだこの車を盗むの？」

「別に良いだろ、レッカーされたとしても思っじゃねえのか？」

「アタシは何も言わないけどね」

タナトスは鍵穴を髪留めで器用に外した、中から飛び出た配線を弄るとエンジンが掛かる、その間約10秒、まさに神業としか言えない。

「あんだどこでそんなの覚えたのよ？」

「これでも一般人の頃は要人警護が仕事だったからな、場合によっては国家権力を盾にこういう事もやってたんだよ」

「じゃあアタシもいざという時には守ってもらおうかしら？」

「今は死神だぜ？守るなんて元から性に合わねえんだよ」

緊那羅はクスクスと笑う、タナトスは車を走らせた、交通規制云々を無視した走らせ方、しかし緊那羅は特に気にしていない、恐らく日本支部の連中も同じような、むしろもっと荒いからだ。

タナトスと緊那羅は他愛もない話をしながらドライブを続けていた、

しかしタナトスは顔をしかめてギアを弄り始めた。

「クソが！コイツ調子が悪い」

「ちょっと待って」

緊那羅は目を瞑る、そしてしばらくするとゆっくり目を開けた。

「エンジンが少し弱いみたいね」

「嘘付け、別に変な音も振動もねえぞ」

「じゃあ開けてみなさいよ？このエンジン、ローギアはド、セカンドはファ、で今の5速はミ、のはずだけど今は全部シャープがかかっている、しかも2ヘルツ落ちてる」

タナトスは呆気にとられた、耳は一際良いはずのタナトス、しかしこれだけの雑音の中からエンジン音を探すだけでも至難の業、それなのに緊那羅はここまで正確に聞き分けている。

「さすが音楽神様だ、その耳信じるぜ」

「ありがとう」

タナトスは車を停めてボンネットを開けた。

「こりゃひでえな、メンテナンスの欠片も見えない車だ、外面ばかり気にしてたみてえだぜ」

緊那羅は座ってタナトスを見ていた、髪を結って色々な所から工具

や材料を調達してくる。

腕を捲って腕を突っ込みながら作業をするタナトス、慣れた手つきでエンジン周りを弄っている。

普段のタナトスからは絶対に見れない姿、一つ一つ確認するように、緊那羅には分からない部品を取り出す。

「見つけた、こりゃあ削り出さなきゃ長くは持たねえな」

タナトス再びどこかへ歩いて行ってしまった、すぐに戻って来ると手には大きな鉄板を持っている。

タナトスは腕輪に触れた、得物である大鎌、名はスケイル。

「カット」

黒く染まるスケイル、そして鉄板を斬り始めた、エンジンと鉄板を交互に見ながら細かいところまで精密に斬る、最終的にスケイルではなく、鉄板を動かしながら微調整を行っている。

「要人警護ってそこまでやらなきゃいけないの？」

「いやこれは趣味の範疇だ、昔から車を弄るのは好きだったからな」

タナトスは口を動かしつつも、手を動かしている、それは趣味というよりは仕事に出来るんじゃないか、という程の手際の良さ。

削りだしが終わると組み立て始める、タナトスの顔は戦いとは違った笑みに包まれている、むしろ本当に生き生きしているのはこちらと思わんばかり。

「あんた本当に戦い好きなの？」

「なんだいきなり？」

「いや、今のタナトスは良い顔してるな、って思ってたね」

タナトスの顔から笑みが消えた、そして動きも若干鈍る、それが示すのは動揺。

「殺すのは楽しい、ってよりは憂さ晴らしみたいなのところはあるな」

タナトスが死神になったのは恋人をダークロードに殺されてから、あれ以来後悔と共にダークロードを殺す事により快感を得ていた、しかしそれも一過性のもの、任務が終わればただ虚しさが残るのみ。

「過去を引きずる悲劇の主人公きどり？」

「別にそんなんじゃないよ」

「謎多き妖しい色男さん、過去を忘れられず、八つ当たりを受ける可哀想なダークロード」

タナトスが過去を引きずっている事も、それがタナトスにとって人生を変える事と知りながらも弄る緊那羅、緊那羅もただの無頓着という訳ではない。

「テメエには言いたくねえんだよ」

その言葉の裏に、緊那羅と特定した事に何があるのかはまだお互い気付いていない、ただタナトスは感覚的に、この事を緊那羅に言っ  
てはいけない、馬鹿にされる云々ではなく、自分が理解できないか  
ら言っ  
てはいけないような気がした。



「別に人の過去を笑おうなんて思っちゃいないわよ、ただ過去を引きずれば引きずる程、あんたは今を傷付けるわよ、もしかしたらそれで身を滅ぼすかもね」

タナトスは何も言い返せなかった、それは第二次ホーリナーラグナロクの前、ヘリオスと一度ぶつかり合っている、それは緊那羅が言っている事が的を射ていた。

あの時は自分の力のなさを過去と重ね合わせ、それを見ないようにしていた、しかし今を必死に変えようとしたヘリオスにはかなわなかった。

「あとは先輩からの一言」

「先輩だ？」

「そう、アタシもあんたと同じ口の人間だったからね」

それは緊那羅と阿修羅が殺し合った事、その時の緊那羅は過去を引きずり、今いる大切な人達を殺しかけた。

「後悔したらあんたの全てを否定する事になるんだからね？」

タナトスは無言で運転席に座り、配線の中に指を突っ込んだ。

「後悔だけはしねえ、俺様は俺様の信念で動いてる、だから、どんな結果であれ、それは覚悟の上で出た結果だからな」

そしてエンジンがかかった、先ほどよりもエンジン音が軽いようにも思える。

タナトスはボンネットを閉め、工具をそこら辺な蹴り飛ばして処理をすると、軍手を外して投げ捨てた。

運転席に座ると、何故か緊那羅が車を撫でている、タナトスは見てもみぬふりをして、ハンドルでギアに手をやる。

「あんた（車）も幸せ者ねえ、こんな良い男に拾ってもらった上に、綺麗に直してもらえたんだから、その体を大事にしなさいよ？」

タナトスは白い目で緊那羅を見る、いつもの鋭い殺気を込めたような目ではなく、痛々しいものを見る目。

「車に話し掛けるなんて、大丈夫か？」

「あんたかなりの鈍感でしょ？」

タナトスが黙る、それは明らかな凶星、優勢だったその立場を忘れさせるような一言。

「別に車に対して言ってる訳じゃないわよ、あんたに言ってるの、良い男のあんたにね」

緊那羅のその勝ち誇ったような笑み、氣付いていた、タナトスが誉め言葉などに弱いという事に、案の定タナトスは赤らめた顔を緊那羅に見せないように、緊那羅とは反対側を向いている。

気にしないように、いや、気にしているからこそやりづらくなり、苦し紛れに車を走らせた。

## 19：墓地

Italy city area

阿修羅は花屋を探して歩いていて、イタリアの街はまともに歩いた事がないので、右も左も分からないとはまさにこの事だ、阿修羅にあるであろう“女の勘”とやらを信じて歩き回る。

しかし色々な店に移りしてしまう、いくら服に興味がないとはいえ、女性の性は忘れられないらしい、つついショーウィンドウの前で立ち止まってしまう。

そんな阿修羅の前から満面の笑みで手を振るヘリオスが走って来た、ヘリオスの手には美しい色とりどりの花がある、それは阿修羅が、正確には阿修羅とヘリオスが探していたもの。

「阿修羅ちゃんと探してるんスか？」

「はあ、道が分からないんだからしょうがないじゃない」

「確かにそうッスね」

ヘリオスは両手に持った花束をちらつかせながら、阿修羅に笑顔を見せた。

「2つで良いんスよね？」

「そうね」

阿修羅は暗い顔を見せる、常に笑顔とまではいかないが、いつも落

ち着いた表情の阿修羅が、暗い表情をするのは滅多にない。

ヘリオスはそれに気付き、最大級の笑顔を作って、阿修羅の視界いっぱい自分の顔を映した。

「阿修羅のせいじゃないツスよ、それに阿修羅は何も出来なかったじゃないツスカ？」

「なんかその言い方も感に触るわね」

「そういう意味じゃないツスよ！ただ阿修羅は悪くないんスよ？」

ヘリオスはおろおろしながら何とか阿修羅のご機嫌をとろうとする、阿修羅にはそれが可愛く見えてしまい、思わず吹き出してしまった。

「何で笑うんスカ？」

ヘリオスは頬を膨らまして不機嫌を作り出すが、世の女性がそれを見たら間違いなく母性本能をくすぐられる程の表情、阿修羅も例外ではなく、ヘリオスの喜怒哀楽が愛おしくて仕方ない。

「まあ良いわよ、それじゃあ行こう？」

阿修羅はヘリオスの返答を待たず、先に歩き出した、ヘリオスは花束を二つ抱きながら、視界が悪いながらも阿修羅に着いていく。

しばらく歩くと、市街地からも外れ、落ち着いた雰囲気の手加えられていない自然が残る場所に出た。

そこには様々な名前が彫られた板状の石、そしてその隣には剣や槍、様々な獲物が刺さっている。

そして阿修羅とヘリオスの前には三叉の矛、石には“ユピテル”と書いてある、その隣には剣と盾、そこには“アストライア”と書いてある。

阿修羅はその横並びの二つを見て目に涙を溜める、ヘリオスの表情にもいつもの元気はなく、暗い影を落としている。

「ここにユピテルとアストライアがいるのよね？」

「そうツスよ、コレは神選10階の墓地ツスからね」

ここには神選10階として死んで行った者達の墓が並んでいる、良く見ると名前の下には年月日、第何階か、後は詳細等が書かれている。

阿修羅はユピテル達の横を見ると、第10階の墓が連続しているのが目に入り、悲しみに横槍を刺された。

ユピテルとアストライアは第二次ホーリナーラグナロクにて戦死した神選10階、18年前とは違えど、今回のも神と悪魔の戦いに変わりはない。

その発端となったのも、阿修羅が悪魔側に加担したから、故に阿修羅は今回の被害が自分のせいだと思っている。

しかし実際、阿修羅は何もできなかったに等しい。

「ククルカンも恨んでるよね？」

「それはないんじゃないツスカ？」

ヘリオスの顔からは偽りも何も感じられない、阿修羅もそれが本心からの言葉だと分かった。

「何で分かるの？」

「だってククルカンが阿修羅の事を大切な友達だと思ってるんスよ？それにアルテミスと戦った後、ククルカンと何か話してたじゃないッスか？悪い会話じゃなかったんスよね？」

阿修羅はあの時の事を思い出す、ククルカンがアルテミスと戦った後、阿修羅と二人だけになって話がしたいと言って来た事を。

阿修羅は責められるものと覚悟していたが、ククルカンの口からは思わぬ言葉が出てきた。

『ねえねえ、阿修羅はやっぱ罪悪感とか感じちゃってるよね？』

『ごめんなさい』

阿修羅は覚悟していた、ホーリナーラグナロクで被害を出した原因は自分にあると思っていたから、故に誰からどんな罵声を浴びようと受け止める覚悟は出来ていた、それが阿修羅自身に架せられた罪だと思っていたから。

『じゃあじゃあ、今日でそれは終わりにしよう？』

思わぬ言葉に驚きの表情を隠せないようだ、ククルカンは言いづらそうに明後日の方向を言う。

『うちが言うのもなんだけどさ、何か何か、阿修羅が苦しそうにしてるの見たくないんだ。』

だってさだってさ、ユピテルが死んだのは阿修羅のせいじゃないでしょ？元からユピテルとメルポメネは衝突してたみたいだし。

それにそれに、阿修羅のおかげでルシファーだった帝釈天は仲間に

なっ たんだよ？

なんて言うかヘリオスのためにしても少しやりすぎ感はあるけど、それだけじゃないでしょ？正直うちだってユピテルが生き返るって言うなら全てを捨てるよ、だからだから、阿修羅のやった事は分かる。

後は後は、今回の戦いはヘリオスと阿修羅がいたから帝釈天は仲間になったんだし、タナトスがボロ負けして、阿修羅とヘリオスが二人掛かりでも負けた帝釈天があのままだったら多分被害は大きかったと思うよ？

だからだから、阿修羅のやった事は±0！どう？』

阿修羅は涙が出そうになるのをぐっと堪え、何とかククルカンに笑顔を作る、しかしそれは不器用な笑顔になってしまい、更に心配されるという結果になってしまった。

『ダメダメ！？』

『うつん、ありがとう、私なんかの事をかばってくれるなんて』

『違う違う！かばったわけじゃなくて本心だから、それに』

ククルカンは阿修羅に近寄り、阿修羅の頬を引つ張った、阿修羅は驚きのあまり鳩が豆鉄砲を食らったような表情を浮かべる。

『私なんか、とか言う口はこの口か！？うちの大切な友達を馬鹿にするのはこの口か！？』

『ほふえんなはい（ごめんなさい）！』

『もうそんな事言わないって言うまで辞めないからね！』

阿修羅はククルカンの腕を引き離そうとするが、ビクともしない、引つ張っている力は強くないものの、ここまで怪力だとは想像していなかった。

『ほうひいまひえん（もう言いません）！』

ククルカンは離して満面の笑みになる、阿修羅は頬をさすりながら小さな笑みをこぼした。

阿修羅は思い出しながら物思いに更ける、そんな阿修羅を見ながらにやけてしまうヘリオス、阿修羅はそれにすぐ気付くが、何か気まぐずいので見てみぬふりをする。

そしてそのまま歩き出す、墓石を確認しながら歩く後ろを着いていくヘリオス。

「誰のお墓を探してるんスか？」

「阿修羅<sup>あしゅら</sup>の墓<sup>み</sup>なんだけど……………」

「ホーリナーラグナロクならここら辺じゃないツスか？」

ヘリオスが指を指した先には同じ戦いで死んだ神選10階の墓石が並んでいる、その年からして明らかに第一次ホーリナーラグナロクの時期。

阿修羅とヘリオスは並んで歩きながら阿修羅<sup>あすら</sup>の墓石を探す、徐々に徐々に顔が曇っていく。



「ない？」

「ホーリナーラグナロクの時の墓石は6つしかないッスね？生き残ったのは元帥と毘沙門天とランギだから7人死んだはずなんスけどね」

それは明らかな矛盾点、まだそこに阿修羅あすらがいるなら納得出来る、しかし阿修羅の墓石のみがそこにはない、神選10階だったという記録、ホーリナーラグナロクにて戦死したという記録が残っている。

「まあ天竜に行けばあるんじゃないの？」

「そんな事ってあるんスか？」

「毘沙門天が権力があるみたいなさ言ってたじゃない？あの非常識な一族ならやりかねないわね                   ！？」

ヘリオスと阿修羅は強烈な殺気を感じて得物を取り出した、しかし気配のようなものは全くしなくなった。

二人はアイコンタクトで合図を送り、一瞬で技名破棄のベロシティで左右に散り、辺りを見回す、しかし二人の顔が曇るだけ。

「誰もいないと思うッスよ？」

「はあ、こっちもないわね」

二人は再び近寄ると、疑問が消えない表情で歩き出す、そう、殺気は確かなものだった、しかしその前から気配など感じなかった、気を抜いていたとはいえ、二人が感じ取れなかったという事は神選10階レベル、もしかしたらそれ以上もあり得る。

そこまでとなると元帥、元老レベル、ヘリオスは全く気にしてないが、阿修羅は僅かな猜疑心が生まれた。

墓地から遠く離れた公園、男は女を抱えてここまであっという間に逃げて来た、そう、殺気の正体はこの女が出したもの、逃げたという事はあの二人にバレてはいけない理由があるから。

女は顔を真っ赤にして申し訳なさそうな顔をする、気品に溢れ、しかし幼さが残るその顔を歪める。

「痛恨の極みです、私<sup>わたくし</sup>とした事があのような事で感情の制御を忘れてしまうなんて」

男は真剣な眼差しで女の目を見る、阿修羅やヘリオスと同じ年に見えるが、少年と男の間のような不思議な青年。

「姉ちゃんは悪くねえよ、それよりもあいつらがいけねんだ」

その表情は怒りに歪み、殺気を抑えているのは分かるが、抑えきれない怒りがひしひしと伝わって来る。

「いえ、私の修行不足です」  
わたくし

「あいつら絶対に許さねえ！」

「兄上、姉上、落ち着いて下さい」

誰もいなかった男と女の前に片膝を着いた男か女か分からない人が現れる、その理由は黒中心の服装に、キャップを被っているからである。

「相変わらず急に現れるの止めてくれよ、ビックリするだろ？それに」

男は片膝を着いている人の帽子を外した、そこからは長い髪の毛が乱れ落ちる、覗いたのはまだあどけなさが残る、がしかし凜とした顔立ちの少女、少女は頬を赤らめて二人を見る。

「うう、兄上、被り物を返して下さい」

「何でいつも隠すんですか？」

「そつだ、お前がそうやって顔を隠す理由が分からねえ」

「拙はくのいち故、顔を見られては万死に値します」

「んなもん拙者達の前では関係ねえだろ？」

「しかし、……………兄上、御免」

少女は一瞬で帽子を取り返すと、髪の毛を纏めて被った。

「またそうやって被りやがって！悪い癖だぞ！」

男の体に梵字が浮き上がる、その瞬間、地面が砕けて少女のもとまで一瞬で駆け寄る、その速さはベロシティにも匹敵する速さ、しかし技名破棄のベロシティにしては速すぎる。

「度重なるご無礼、誠に御免」

しかし少女は苦無を男の首もとに当てていた、少女は素早い動きをしたために帽子が取れてしまった、少女の髪の毛にも何故か梵字が浮き上がっている。

「二人共お止め下さい！お父様がおられるんですよ？」

「親父が！？」

「うう、父上の前で、醜態を晒してしまった」

「天照、素戔鳴、月夜見、戯れは終わりだ」

女の名は天照、男の名は素戔鳴、少女の名前は月夜見、そう、紛れもなく3人はホーリナーである、3人は膝を着くが父親と思われる存在はどこにいるか分からない、天照が最初に動き出し、それを月夜見が見て瞬時に動く、分かっている素戔鳴だけ二人の後に続く形となった。

「天照、お前の前では隠れていても意味がないようだな」

「恐れ多くも、見えてしまいますもので」

天照の瞳にも梵字がある、不思議な力を持った3姉弟、神技とは全く違った力を持った3人。

「明日だ」

「やっと暴れられるのか!？」

「兄上、暴れるのでは、ありません」

「分かっているな、天照？」

「生殺与奪です」

「逆らえば」

「あの雑魚ホーリナー共をぶつ殺して良いんだよな!? 婆ちゃんがいつもうるせえから暴れらんねえけど、親父! 良いよな!？」

「そう熱くなるな、素戔鳴、あくまで目的は奪還にある、それを阻むなら」

ズドン!!!

何かが爆発したような、一気に地下から突き上げるような揺れが辺り一帯を覆う、それは素戔鳴の手元、深く埋まった腕が物語っている。

そう、ただ素戔鳴が地面を殴っただけ、しかしそれは肘まで突き刺さっている。

「蹴散らすのみ！」

「素戔鳴、生殺与奪ですよ？生かせるなら生かしましょう？」

「兄上、下手に、暴れないで下さい、隠密故、派手な行動は」

「燃えてきたあ！シンクロ使える2人一気に相手してやるよ！」

「素戔鳴、一人は」

「親父！今から修行だ！拙者と殺り合おうじゃねえか！」

「馬鹿もん！！」

地が揺れるような怒鳴り声、素戔鳴は肩をすくめて一瞬でその場に正座する、そして公園の隅から長い髪を総結いにした男性が現れた、厳つい表情に、傷だらけの体、まさに修羅を体現したような男性。

「そんなに戦いたいなら兄者にしごいてもらえ！」

「叔父ちゃんはダメだって！本当に殺されるんじゃないの！？」

「なら大人しくしろ！」

ドン！！

男性の拳が素戔鳴を垂直に地面に叩き付けた、ゴンではなくドン、

素戔鳴は頭を抱えて地面を転げ回る、天照は本気で心配しているが、月夜見は呆れて何も言えないでいる。

「天照、月夜見、あの阿呆は放っておいて行くぞ」

「はい！」

## 19：墓地（後書き）

ついに新キャラ登場です！

まだまだ謎が多いキャラですが、今後の物語を大きく左右する存在になります。

そして、今まであまり語らなかったホーリナーラグナロク、むしろまともに触れたのは霊鬼編のプロローグのみかもしれません、でも、徐々に徐々に謎が解け、謎が深まっています。



## 20：譲れない戦い

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

準々決勝が始まるとしているバチカン、異様な熱気に包まれ、参加する者達からピリピリとした空気が伝わって来る。

ココまで足を運んだ者達は普通のホーリナーからしたら化け物レベル、正に雲の上の存在、しかし出ている者からしたら、戦い方一つで誰が優勝してもおかしくない。

『さあさあ集まったぜえ、ここにいる8人の規格外なホーリナー共が、こいつらはまさに各々が各々の誰にも譲れない何かを持っている、だが、本当の最強はたった一人だけだあ！今のホーリナー達のトップに立つのはどのどいつだ！？』

盛り上がる会場、早く始めると言わんばかりの興奮具合だ、出場者は冷静なのに、会場が興奮を煽っているようにも思える。

コレだけの8人が集まれば普段見れない“何か”があるはず、8人全員が体験した事のない、壮絶な戦いになる事は必至。

『じゃあ注目目の組み合わせを見てみようか！』

準々決勝第1回戦！知識神“全能のダグザ”対、護法神“殺壁の帝釈天”！お互い神技を駆使する戦術タイプなだけに高度な戦いになるはずだ！

第2回戦！死神“死神のタナトス”対、音楽神“音速の緊那羅”！最強の剣士と言えよう緊那羅をタナトスはとう打ち破る！？唯一の神選10階未経験者の緊那羅だが、その力は神選10階のそれにも勝るとも劣らない！

第3回戦！破壊神“道化のモリガン”対、太陽神“太陽のヘリオス”！全く違ったタイプの二人、肉を斬らして骨を断つモリガン、ごり押しのヘリオス！凄まじいぶつかり合いが見れそうだぜ！

第4回戦！戦闘神“天竜の阿修羅”対、風神“鎌鼬のククルカン”！女の戦いってのは昔から恐ろしいものと決まってる！その怪力はディアンギットの鉄ですら曲げちまうんだ、その純粋な攻撃力は確実のホーリナーNo.1だ！阿修羅はそのトリッキーな動き、そして戦いの度に成長するその吸収力、どれを取っても天才としか言えないぜ！」

やはりこの実況は周りに活気を持たせるだけは得意らしい、凄まじい声の波が8人を襲う、阿修羅に至ってはため息と共に耳を塞いでいる。

「どうも人前に出るのは慣れんな」

「帝釈天さんにも苦手なものがあるみてえだな？」

「当たり前だ、人前と青髪の長髪だけはどうも苦手だ」

「ああ！？」

タナトスは帝釈天の胸ぐらを掴み上げる、帝釈天はタナトスを見下すように見る、一触即発、今から得物を取り出して殺し合ってもおかしくない。

「ダグザ！俺と代われよ！これからコイツをぶっ殺してやる！」

「勝ち上がれば良いだけだ、貴様らの勝者は、次は俺らの勝者とだ、俺は帝釈天に負ける気はないがな」

「俺は最後まで負ける気はないがな」

まさに冷戦と言えよう睨み合い、周りはいつもの事と気にしていないが、観客は違つようだ、盛り上がっているが、ダグザ達3人の耳には全く入っていない。

そんな3人に会場の異様な盛り上がりは耳に入っていない、そう、ステージ上に元帥と元老の二人が出てきたのである。

毘沙門天はマイクを握る、毘沙門天を知っている神選10階経験者達は慌てて耳を塞ぐ、他のホーリナーはその行動が見えていない、否、マイクを持った毘沙門天しか見ていない。

そして毘沙門天は大きく息を吸い込んだ。

「チエストおおお！」

その瞬間マイクが悲鳴をあげ、耳を塞いでいなかった者達はめまいを起こす、そしてダグザ、タナトス、帝釈天の3人の睨む矛先は毘沙門天に変わった。

ヘリオスはため息を着いている阿修羅の肩を叩いた、阿修羅は「一応、父親である毘沙門天の醜態に嫌になりながら、ヘリオスを見る。

「チエストつてなんスか？」

「はあ、そんな事？掛け声みたいなものよ」

「特に幕末の薩摩藩士辺りが敵を斬る時に使ってた言葉よ」

緊那羅が横目に口を挟んだ、阿修羅も一応はそれくらいの事は説明出来る、緊那羅が噛み砕いて言ったのも分かる、しかし相手はヘリオス。

「バクマツ？ サツマ？ ハンシ？」

「はあ、武士の話よ、そこら辺が聞きたいなら後で緊那羅に聞きなさい」

「サムライツスカ！？ 2本差しツスよね！？」

「はあ、どうでも良いことは知ってるのね？」

「多少の語弊があるみたいだから今度寝ずに侍について教えてあげる」

緊那羅の顔が妖しい笑みに変わっている、緊那羅の家系もヘリオスが言う‘2本差し’だが、言われていた人間からすれば忌み嫌う呼ばれ方だからだ。

「何か馬鹿の変なのが入っちゃったけど気にしないでねえ」

元帥が毘沙門天の事を馬鹿と、チェストの事を変なのとあしらって笑顔でマイクを奪った。

そして元帥が立つ、ホーリナーからしたら憧れの存在であり、雲の上の存在、しかし神選10階経験者達からしたらただの怠け者、体たらく、変態、と言いだしたらキリがない程のダメ人間。

「ここにいる8人は凄く強いからね、全盛期の僕達でも勝てるか分からないくらい強いよお」

8人全員は白い目で元帥を見る、明らかかな嘘、それが分かっているからだ。

「面白い仮説だな」

「さすがは口から産まれた男だ」

「アイツより強けりや帝釈天さんなんかに負けちゃいねえよ」

「元帥、元老に剣士がいなくて良かったわよ」

「僕達が束になっても勝てないんじゃないの？」

「あんなに強いズルいッスよね」

「はあ、あの元帥はよくもあれだけの嘘を言えたもんね」

「あり得ないあり得ない、強いつて言葉の意味分かってるのかな？」

8人は口々に元帥の嘘に対するぼやきを吐露する、そう、準々決勝に進んだ8人ですらそう思う程の強さ、次元が違うレベルではない、細胞単位で違うのではないかと疑う程の差。

「こんなホーリナー対ホーリナーが本気でぶつかり合うのが見れるのなんて僕達ですら初めてだからねえ、凄い楽しみにしてるよお？」

8人を見ながら笑う元帥、何故か元帥に言われると萎えてしまう。

「こんなぐうたら話してるよりもみんなは早く戦ってほしいよね？」

煽る元帥、知らぬが仏とはこの事だ、元帥の実体など見ないに越した事はない。

「その前に準々決勝から決勝までフィールドは同じ場所で戦ってもらうよ、そのフィールドを見てもらおうか？」

元帥が指をパチンと鳴らすとモニターに映し出されるフィールド、それを見て8人は早くも疲れが襲って来た。

フィールドは50メートル四方の立方体、コンクリートから出来ているそのフィールドの他は何もない、つまり弾き出されたらそれでゲームオーバー。

「ちなみにこれ、中に出るか外に出るかは分からないからねえ」

全員からため息が漏れる、そう、強度すら疑わしい足場、モニターにはフィールド内部が映し出された、50メートル四方の立方体の内側、それは人工的に作り出された世界だから出来る事。

「このフィールドの用途は様々、今まで見れなかった戦いが見れるかもね」

会場が興奮に飲み込まれた時、8人は臨戦態勢に入る、そう、これから始まるデスマッチ、まさに戦う事しか出来ない場所で、相手を持てる力全てで蹴散らす、ホーリナー史上初の試み、それを彩るに相応しいメンツが集まった。

## 21：護るためには

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

準々決勝、第一回戦、ダグザ対帝釈天

二人はフィールドの内側、完全に囲まれた戦場に弾き出された、完全なる密室、逃げ場は泣く、死角も全くない。

しかしその強度は普通のコンクリートのそれと変わらず、ホーリナ一程の力を持っていれば壊すのは容易な事。

二人は着地すると同時に腕輪に触れた、ダグザの得物はトンファー、名はサラスヴァティー、帝釈天の得物はクレイモア、名は髭切。

一瞬にして乱打戦となる、ダグザの両手にあるトンファーを使い、無駄のない動きで急所を狙う戦い、帝釈天のクレイモアとは思えない素早さで、一撃一撃、重い斬撃で相手を打ち崩す戦い、それが拮抗する。

二人は瞬時に意味のない乱打戦と思い、間合いを開くとダグザは目を瞑り、帝釈天は指を髭切に当てる。

「フォーサイト」

「コラプス」

ダグザの脳には様々な情報がなだれ込み、世界の動きが鈍る中で自分だけが普通に動ける。

髭切は縦に亀裂が入り、一瞬にして二振りになった。

お互い本気、長期戦などは最初から狙っていなかった、しかし様子

見という面もある、戦いを見た事はあるが、実際に戦った事がないために、自分との相性やどの程度のものかは分からないからだ。

静かに走り出す二人、しかしダグザのスピードは人間のそれを遥かに越えている、帝釈天は予想していた範囲だが、実際襲われる立場になると動揺を隠しきれないのは明白だった。

ダグザは最後の一足で一気にスピードを上げると、迷わず急所を狙うが、帝釈天には軽々と止められてしまった、しかしその後からの連撃は凄まじいもの、一瞬でも気を抜けば殺されてしまう。

そして帝釈天は気付いていた、ダグザが本気を出していない事を。

「何故本気を出さない？」

「貴様に言われたくない」

「すまなかった、では行かしてもらおう」

お互い口角をグッと上げる。

「コラプス」

「なっ!？」

帝釈天が発動したのは破壊の神技、ダグザが期待していたのはプロテクティブ、そう、帝釈天のチートと思えるような絶対防御である、ダグザにはそれを打ち崩すための術があったからこそ、引き出させようとした。

ダグザの得物と帝釈天の得物はぶつかり合い、ダグザのサラスヴァティーが粒子状に崩壊する、帝釈天はすかさず反対側のサラスヴァティーを受け、何も持っていないダグザの腕を掴む。



「騙して悪かった」

帝釈天はダグザを蹴り上げ、浮き上がった瞬間に地面に叩き付けた。

「クハッ！」

肺の空気が逆流し、呼吸困難に陥る、帝釈天はダグザの要である思考が鈍るただ一瞬を狙っていた。

髭切の切っ先を心臓に向け、迷わず振り下ろした、本来ならばそこでゲームオーバーだが、ダグザは素手で髭切を掴んでいた。

「なかなかだな」

今度はダグザが帝釈天を蹴り上げる。

「フォーサイト」

再びダグザの動きが異常な速さになる、そして得物を顕現すると、帝釈天に今までとは比べ物にならないような連撃を浴びせる。

「プロテクティブ！」

帝釈天の体に薄い透明な膜が張られた、それは帝釈天が持つ絶対防御、一切の攻撃を受け付けず、全ての攻撃を無に帰す相手からしたら最悪の神技。

「それを待っていた」

ダグザは軋む体を抑えつけ、更に攻撃のスピードを速める、帝釈天

も防御に割く手数を殆ど攻撃に回す、体に当たってもダメージがないのなら意味がない、たまに弾くくらいでダグザの攻撃は全く無視している。

「神技なしでそのスピードとはなかなかだな」

「貴様もよく体が耐えられているな、祝融と同じようにがたがきているだろう？」

「戦いに支障はないがな」

「俺が気付かないとでも思っているのか？」

帝釈天は二振りだった髭切を一振りにし、力の限り薙払う、いつものダグザなら難なく受けられるが、受けた瞬間体勢を崩してしまった、帝釈天はそのまま蹴り飛ばし、二人の間に間合いを作った。

「帝釈天、貴様を甘く見ていたみたいだ」

「俺もだ」

「次で貴様の防御を崩す」

「次に貴様に触れたら、それで終わりだ」

バチカンのモニターの前にはいつの間にか祝融と沙羯羅が集まっていた、二人はダグザと帝釈天の戦いを見ながら思った、ここまでの二人がペースを掴めないのは珍しい、お互い布石の後に必殺という戦法だが、その布石が全く通用しない。

「やっぱり凄いよね」

「ダグザ様本気ネ、でも思い通りならない、やっぱり帝釈天凄いネ」

「そういえば祝融の前のボスって帝釈天だよね？やっぱり祝融でも勝てないの？」

「帝釈天の攻撃、重くて速いネ、それにいつも予想外な事ばかりするヨ、だから戦いにくいネ」

「確かにそうだね、生まれてからずっと戦ってたらしいから戦う術だけはあるんだろうね」

沙羯羅は帝釈天と戦った時の事を思い出した、いつもムチャクチャな戦いばかりする、しかしその全てが理にかなっている、故に先の先を読まなくては絶対に勝てない相手だ。

「でもダグザ様には秘策あるっぽいネ」

「それはお互いだね」

ダグザは走り出した、帝釈天はそれを構えて待ち構える、そして再び凄まじい連撃が始まる、ダグザはその瞬間、帝釈天の顔が若干歪んだのを見逃さなかった。

他人にはただの素早い攻防にしか見えない、しかし帝釈天とダグザの間には全く違った意味がある。

そう、これは完全なるダグザのペース、先ほどから帝釈天は攻撃らしい攻撃を一度も出来ていない、それに引き換えダグザは手数を防御に割かなくて良いので、帝釈天からしたら手数は圧倒的に増えている。

「攻撃しないのか？」

「黙っている」

「あの帝釈天が平静を乱すとはな」

帝釈天は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「何故分かった？」

「何の事だ？」

ダグザは妖しい笑みを浮かべて聞き返す、帝釈天はまだ気付いていない、完全にダグザのペースに巻き込まれている事に。

「茶番は終わりにしろ」

「コレの事か？」

ダグザは帝釈天の防御に力を込めて叩き込む、若干の動揺により手元がぶれた帝釈天の肘を殴った、帝釈天の歪んだ顔は痛みからではない。

「全ての神技には限界があり、弱点がある、当然貴様のプロテクティブにも、だ」

「先ほどまでの攻撃は全て弱点を探すための布石だと？」

「そのとおりだ、恐らくその神技は薄い鎧着ているのと変わらないんだろ？なら鎧もそうだが関節部分は薄くしなければ動きに支障が出る、つまり貴様は装甲が弱い関節部分は防ぎ、他は防がずに攻撃、逆を言えば全て関節に攻撃されては防御に回すしかない、間違っているか？」

帝釈天は諦めにも似た笑みをこぼす、構えずに立つ二人、そう、ダグザは既に勝機を見出していた、しかし何故かダグザからは死というものに追われている悪寒が走る、帝釈天の顔からは未だに絶望というものが感じ取れない。

ダグザはコンピューターのような頭脳で帝釈天の活路を探すが、データが少ないのに加え、戦い慣れた帝釈天の戦いに一貫性はない、つまり、次の一手をはじき出すだけのデータがないという事。

「ダグザにしては珍しい、臆病風にでも吹かれたか？」

「違うな、最速での勝利を考えていただけだ」

「それは残念な算段だ、貴様に勝利は残されていない」

「面白い仮説だ」

帝釈天が構えたのにつられ、ダグザも構える、そして珍しく帝釈天から走り出した、フォーサイトが持続しているダグザはただ待ち構えるのみ。

再び凄まじい攻防が繰り広げられる、今回は帝釈天は防戦ではなく、関節部分に攻撃されても気にせず、ダグザに向かって攻撃を繰り出す。

「遂に諦めたか？」

「それもまた一興だ」

ダグザは苦笑いを浮かべる、それは帝釈天の嫌な余裕と、優勢にも関わらず、ダグザ自身に余裕がない事、冷静になろうとすればするほど、動きに無駄が出来てしまい、自分の体に傷を作ってしまう。

「貴様が言っていたのはこういう事か？」

ダグザは舌打ちをすると、最後と言わんばかりに帝釈天の左肘を殴る、その瞬間、帝釈天の表面にヒビが入る、ダグザはそのまま体を斬られるのを気にせず左肘を殴った。

バリン！！！！

ガラスが割れるような音と共に、帝釈天の表面にあった薄い膜が砕け散った。

ダグザにしては珍しく、口角を思いっきり上げて、右腕を引いた。

「エクスプロージョン！」

「やはりな」

帝釈天は心臓に向かって来るサラスヴァティーの前に、右腕を防ぐようなかたちで持って来た。

ドカン！！！！

「クツ！コラ、プス」

帝釈天の腕は激しい爆発と共に千切れ飛んだ、しかしその瞬間に帝釈天はダグザの腕を掴んでいた、触れられた程度だが、一瞬で帝釈天から間合いを取る。

「危なかった、さあ、貴様の負けだ、諦めろ」

「笑わせ、るな、貴様の、心臓は、もう、止まる」

帝釈天は千切れた腕を押さえながら、軽く口角を上げた、その瞬間、ダグザは心臓を押さえて片膝を着く。

「き、貴様、な、にを、……………した？」

「循、環器、系を、破壊、した」

「だ、……………か、ら……………か」

ダグザの体からふらりと力が抜けた。



二人はバチカンにはじき出されても未だに息切れしている、それ程までに極限の戦いだったという事、歓声などは全く耳に入らない。

『こいつはぶったまげたぜえ！まさかここまで熾烈な戦いが見れるとは思ってなかったぜ！戦いというよりは死闘！生きるか死ぬかじやない、殺るか殺られるかの死闘だあ！』

そしてその殺し合いを征したのは帝釈天だあ！毎回毎回奇想天外な戦い方で勝ちやがる、護法神なんて生温いぜ！鬼神のごときその戦い！次が楽しみだなあ！』

帝釈天はダグザに手を差し出す、ダグザは薄く笑って帝釈天の手を握った。

「本当に貴様には驚かされた、何故得物で防がなかった？」

「一瞬しかなかった、故に感触が必要だ、だから腕をな」

「実際の戦いならどうしていた？」

「護るためなら腕の一つや二つ、安いものだろ？」

ダグザからは嘲笑うような笑いがこぼれた。

「本当に、馬鹿な奴だ」

「誉め言葉と受け取っておく」

あり得ない戦い、それは誰かを護るための戦い、帝釈天が護法神たる所以である。

## 22：狂気

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

準々決勝、第2回戦、タナトス対緊那羅

二人も内側に吐き出された、実際に入ってみるとかなり圧迫感があり、相手以外は殺風景、緊那羅は思った、こんな所にいたら気が狂ってしまうと思う。

タナトスは面白いものを見るように壁を触る、腕輪に触れると得物を顕現した、タナトスの得物は身の丈以上の大鎌、名はスケイル。そのままスケイルを振り上げると、スケイルの背で壁を殴った。

「あんた何してるのよ？」

案外簡単に空いてしまった穴、タナトスはそこから外を覗く。

「本当に何も無いぜ？このフィールドだけが浮いてやがる」

「下手に壊したら二人で落ちるわよ、気をつけなさい」

「んな事より早く始めようぜ？」

緊那羅は呆れながら腕輪に触れた、得物は鞘と刀、納刀された状態で顕現される、名は羅刹。

タナトスは構えると口角を上げる、それは死神の笑み、緊那羅は先ほどまでとは違い、剣士の顔で構えた。

「一つ宣言してやるよ、テメエの初撃、どんなのだろうが止めてやるよ」

「じゃあ試してみなさい」

緊那羅は低い姿勢のまま走り出す、タナトスは何故か構えていたスケイルを下ろした、緊那羅は驚きながらも、嘲笑うように口角を上げる。

ケツアルコアトルの時のようにタナトスの前で急停止をした、そこですかさず素早い斬撃を浴びせる、はずだった。

「なっ!？」

緊那羅は抜刀出来ない、羅刹を見ると、タナトスが羅刹の柄に手を当てていた。

「抜けなきゃ意味がないだろ? コレでテメエは一回死亡だ」

緊那羅の首もとはスケイルが当てられていた、それはタナトスの余裕、そして緊那羅の焦りを誘う結果となった。

「テメエに勝ち目はねえよ、諦めな」

「私だって負ける気はさらさらないわよ」

緊那羅は再び間合いを取ると、同じく納刀したまま構える、タナトスは呆れながらも、構えずに緊那羅を待った。

緊那羅は走り出し、先ほどと全く同じモーションで止まる、タナトスは迷わず柄に手を当てた。

「馬鹿ね」

緊那羅は抜刀する、しかしそれは刀を抜くのではなく、鞘を抜いた、そして逆手に持った鞘で素早い斬撃の嵐を繰り出す、それはタナトスも予想外の行動で、連撃をまともにくらってしまった。何とか緊那羅と間合いを取るが、すぐに吐血してスケイルに支えられる状態になってしまう。

「どう？棄権でもしたら？」

「するかよ、面白くなってきた所じゃねえか！」

タナトスの顔は狂気に歪んだ、それは純粹にこの戦いを楽しもうとするもの、それを殺気と取るか、気迫と取るかは分からないが、気は誰よりも秀でた剣士である緊那羅ですら臆する程の気。

「私もコレは本気でいかなきゃヤバそうね」

「カット！」

タナトスの耳には緊那羅の声など届いていなかった、タナトスは神技を発動すると、床を軽々と斬ってみせる、今のスケイルに斬れない物はない、言わば最強の矛である。

「一瞬で終わるなよ？」

走り出すタナトスにあわせ、緊那羅は腰に鞘を差し、やや高い正眼の構えをとる、そう、それは音無し剣と呼ばれる技、最強の矛であろうと当たらなければただの棒きれと変わらない。

タナトスは大きな一閃、だが的確に急所を狙い、当たればどれも必

殺となるような連撃で緊那羅に斬りかかる。

しかし緊那羅はそれをいなすように避け、素早く攻めに転じる、その間にスケイルと羅刹は触れる気配がない。

タナトスは分かっているながらも、そのもどかしさに舌打ちをする。

「本当にム力つく技だな？」

「それってあんたが劣勢って事？」

「今は、な」

「随時強気なのね？」

「ああ、俺様は最強だからな、こんな所じゃ負けねえよ」

「ならその天狗っ鼻、私が跡形もなく斬り刻んであげる」

タナトスは口角を上げて、悪く言うスケイルを振り回す、良く言えばそれにより緊那羅がペースを失い始めた。

剣士に対しては絶大な力を発揮する音無し剣も、タナトスの大きな間合いでは近寄れず、攻撃に転じられずにいる。

「いくら鼻が長くても届かなきゃ意味がねえよな？」

「随時な自信ね？近寄れないなら」

緊那羅は納刀して、鞘を持ったまま羅刹を振り上げ、タナトスから大きく間合いを取った。

「遠くから当てれば良いじゃない」

振り下ろすと共に、親指で羅刹をはじき出した、羅刹は弾丸のように射出され、凄まじい勢いでタナトスに襲いかかる。

「チッ」

タナトスは顔を歪めた、今からでは絶対に避けられないと判断し、何とか羅刹を斬り刻んだ。

しかしタナトスが気付いた時、緊那羅は既に目の前にいた、何とか斬り伏せようとするが、スケイルは動かない。

「これ、案外ム力つくでしょ？」

緊那羅がスケイルの柄に手を当てているが故に、スケイルはそこからびくともしなかった、緊那羅はそのまま鞘でタナトスの頭を打ち抜く。

よろめきながらも、凄まじい殺気で緊那羅を睨むタナトス、額からは血が流れ落ち、タナトスの青い髪の毛が紫色に染まる。

「痛いじゃねえか、剣士つてもんをナメてたぜ」

「あんたにしては残念な事ね、相手の力量を見誤るなんて」

「そうだな、……………嬉しい誤算だぜ」

タナトスの狂気にも似たその表情、いくつもの修羅場をくぐり抜けて来た緊那羅ですら、一步退いてしまうようなその気迫。

タナトスはスケイルを片手で構えると、緊那羅を押し潰そうとする気迫と共に走り出した。

大振りで、床を抉りながら攻撃を繰り返すタナトス、しかし、ただ

がむしゃらに振っているのではなく、大きなリーチを生かし、緊那羅に間合いを取らせないような斬撃、それは阿修羅の不規則な動きにしていた、故に緊那羅は一步を踏み出せずにいる、触れることも出来ず、ただ音無し剣で体に当てないようにするだけ。

モリガンとダグザは斜に構えてモニターを見ている、タナトスの狂気、それは端から見たら戦いに溺れるただの死神、しかし二人から見たらいつもの事、タナトスはいくら狂気や殺気に充ちても、正気だけは失わない、冷静を前提として狂気がある。  
真に強き者とはいかなる時も冷静さを失わない事、神選10階にはそれを兼ね備えた者しかねない。

「さすが阿修羅と同等の力を持っているだけあるな、あのタナトスが圧されている」

「それにタナトスらしくない戦い方をしてるしね、サムライって凄いいみたいだね」

「サムライは全てが必殺、裏を返せば一撃でも食らおうものなら死

のみだ、集中力に関しては群を抜くものがあるんだろう、だからタナトスもペースを掴めない」

あざ笑うように今の戦いを分析する二人、それはタナトスが不利という口振りとは真逆の結果が見えたからだ。

「ダグザは今回の戦い、どう見るんだい？」

「間違いなくタナトスの勝ちだ」

「緊那羅は強いよ？サムライは必殺なんだよね？ならタナトスは次の一撃で死ぬよね？」

「普通のホーリナーならな、だがタナトスの生命力はゴキブリ並だ、緊那羅からしたらタナトスが立っている事すら不思議でならないだろう、しかし、今回はタナトスの勝ちだ」



緊那羅は軽々といなしにいるように思えるが、否、確かに軽々といなしにいるのは事実、しかし、攻撃に転じるだけの隙がタナトスにないのも事実。

緊那羅は怯えていた、これだけ隙のない攻撃をしているのに、全く当たっていないのにも関わらず、タナトスはその狂気を緩めることなく、パターンを変える事なく緊那羅を斬りにかかる。

「何で避けられるって分かっているてもあんたは攻撃を続けるの？」

「活路を見出すためだよ」

その会話の間も二人の攻防は相変わらず、怖いまでに単調な戦い。

「活路って、何？」

「ゴール（勝利）までの一歩だよ」

その不気味さはダークロードのそれとは遥かに逸脱したものがあつた。

人は知らない事物に対して恐怖を抱く、それは緊那羅に対しても例外ではない、タナトスが冷静さを欠いていないのに気付かないわけがない、なのにこの意味のない、訳の分からない攻防は恐怖を抱くには充分だった。

「まさか、私の動きや癖を見てるの？」

勝利、それは今のタナトスを見たら緊那羅に捧げる言葉に近いだろう、しかし、動きを読まれてしまったらそれはタナトスに傾く。

「んなもん俺様には無理な事だ、それにテメエにも意味がねえ事だろ？」

「前半はともかく、後半はごもつともね」

いくつもの剣技を使える緊那羅にとって、一つ見切られたからといってそれが相手にとつての確実な勝利にはなり得ない、むしろその程度で陶醉するような相手なら、苦戦を強いられる事など皆無。

「悩んでるから種明かししてやるよ、簡単だ、テメエの動きを封じる、ただそれだけだ」

「はいはい、それで目的はどこにあるの？」

緊那羅は軽くあしらう、タナトスが言った事など全て前提条件として承知済み、つまり緊那羅が知りたいのは緊那羅の動きを封じた目的。

「知りたいか？」

「あら、教えてくれるの？」

「それなりの誠意を見せてくれるならな」

「タナトス様、どうか教えて下さい」

緊那羅は呆れながら、明らかな棒読みでタナトスに教えを請う。

「しょうがない、教えてやろう」

タナトスも棒読みで応えると、一気に間合いを取った、それはお互いの一足の間合いを越え、尚且つ迂闊に近寄れないだけの距離が二人の間に置かれた。

その時に緊那羅は苦笑いを浮かべ、羅刹を持ったまま両手を上げる。

「やられたわよ」

「やっと気付いたか？」

「当たり前でしょ、まんまとあんたにやられたわよ、これならもう一発衝撃与えたら終わりじゃない？」

緊那羅は下を見た、床はズタズタに斬り刻まれ、床として機能しているくらいに全体を斬り刻まれている、唯一タナトスが立っている隅だけは安全地帯、そう、完全に緊那羅はタナトスの時間稼ぎにはまっていたのである。

緊那羅は試しに軽く足を踏み出すが、かなり不安定な足場になっている、完全にタナトスの動向に気を取られ、その他の事には注意を向けていなかった。

無駄に大振りだった斬撃はこのための布石、全ては床を落とす、ただその一点にだけ重きを置いたため、真意を知られないようにするのが重要事項だった。

「また得物を飛ばすか？」

「悪あがきはしないわよ……………」

緊那羅はすつと右手を上げた。

「棄権します」

バチカンに戻った二人は戦っている時には見せなかった疲れを顔に映す、それはお互いカマの掛け合い、探り合いの慣れない戦い故だった。

『勝者はタナトスだあ！あの特殊なフィールドを早くも使いこなしやがった！今回は経験と冷静さが勝敗に大きく出たな！  
ベスト8はそういう場所だ！力の差なんて五分！どれだけの経験を積んだか、どれだけ自分の力を理解してるかが勝敗の大きな分かれ目だ！』

タナトスはポケットに手を突っ込んでそのまま立ち去ろうとした、しかし、緊那羅に腕を掴まれて明らかな停止命令が出た。

「あんた最強なのよね？なら最後まで負けるんじゃないわよ？」

「最初からそのつもりだぜ？俺様が負ける事なんてあり得ねえ」

その自信に満ち溢れた表情、それは感情論云々の問題ではない、真にタナトスが己の力を信じているから、故に軽々しく言っているわけではない。

「あと、コレはあくまで勘だけど、あんた本気出してないでしょ？」

緊那羅は他の誰にも聞こえない、タナトスにだけ聞こえる音量で言った、タナトスはそれを聞いて戦いでは見せなかった動揺を覗かせる。

「テメエがそうだと思うなら、決勝、もしくは次の帝釈天の時に見れるかもな、俺様の本気ってやつがよ」

「少しム力つくけど、楽しみにしてるわよ」

緊那羅は踵を返して日本支部の方へ向かう、緊那羅のム力つくはタナトスに本気を出させられなかった事。

「（神技を出されてたら、負けてたかしんねえな）」

タナトスは物思いにふけながら元神選10階の方へ向かう。

## 22：狂気（後書き）

とりあえずは書き置きにて完結致しました。

コレから出し惜しみをした分どんどん吐き出して行きますので、更新頻度が一気にアップします。

最後までお付き合い頂ければ光栄です。

## 23：厄災の使者

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

準々決勝、第3回戦、モリガン対ヘリオス

キューブ状の現実ではあり得ない戦場、その外側、上部に吐き出されたヘリオスとモリガン、少しでも踏み外そうものなら、落ちる事しか出来ない奈落がそこには広がっている、密室空間とは違い、周りが何もなかったために感覚が狂ってしまう。

そんな中でも周りを気にせず、この世界もあいまって不気味な距離を維持する、薄く嘲笑うように見えるポーカーフェイスのモリガン、へらへらと気の抜けた笑みのヘリオス。

「何かここに立つとこの世界って気持ち悪いッスね」

「普通の人間なら狂うんじゃないのかい？」

「何か俺が普通じゃないみたいじゃないッスか？」

「今頃気付いたのかい？君が普通だとしたら“普通”という基準がいないと思うよ」

モリガンが馬鹿にしているのがヘリオスには分からないらしい、そんなモリガンは承知済み、ヘリオスに遠回しの表現が通じると思っている人間など神選10階にはいない。

「そんな馬鹿面してないで始めないかい？」

膨れっ面のヘリオスを馬鹿面と切り捨て、モリガンは提案しつつも腕輪に触れた、得物は直径2m程の鉄球、そこから鎖が伸びている、名はシヴァ。

モリガンはそのまま迷わずヘリオスにシヴァを投げた、シヴァは着地すると同時に、脆いキューブ状のフィールドをヘリオスごと破壊する。

「危ないじゃないツスカ！」

「戦いは始まってるんだよ？」

ヘリオスは不意打ちにも関わらず既にモリガンの背後を取っていた、それは技名破棄のベロシテイ、ほぼ一瞬でモリガンの後ろを取ってしまった、そしていつの間にか手には得物が握られている、得物は片手剣、名はレーヴァテイン。

「もう良いツスよ！俺も行くツスからね！」

ヘリオスは大きく跳躍してモリガンとの距離を詰める。

「グラビテーション」

モリガンはヘリオスに手を向けると空中にいるヘリオスの速度が一気に増し、モリガンとの距離を一気に詰める。

それはヘリオスの重力をモリガンに向かせ、一気に引き寄せたから。体勢を崩してしまったヘリオスの腹に拳を打ち込む。

「クッ！」



しかしヘリオスは怯む事なく、腹にめり込んでいるモリガンの腕を掴み、そのまま投げ飛ばした。

モリガンが着地すると既にヘリオスは目の前にいた、ヘリオスはレヴァティンを思いっきり振るが、鎖で防がれてしまう、しかしそのまま力で押し切り、モリガンを弾き飛ばした。

モリガンはフィールドの場外へ弾き飛ばされてしまう、その下は奈落、あるのは何よりも深い闇のみ。

「もう終わりッスか？つまんないッスね」

ヘリオスはレヴァティンで手遊びしながらバチカンに吐き出されるのを待った、あまりに呆気ない幕切れ、口に出さずともヘリオス是最強候補、故に同じ神選10階と言えど、その力には差がある、ヘリオスはそう思っていた。

しかし、急に背中に突き刺さるような殺気を感じた、それはヘリオスが今までに感じて来た中でも類を見ない程の殺気、それだけで何かの神技と勘違いするような威圧感。

ヘリオスは極度の緊張状態に陥り、ぎこちない動きで殺気の主に目を向ける。

そこにはシヴァをぶら下げながら浮かぶモリガン、まるでそれは決して死なない、幽霊を相手にしているような感覚だった。

ホーリナーの世界では霊などは恐れるに足らない存在、しかしそこにいるのはまさに人外の生き物に見える。

破壊神、それに目を付けられ、破壊の対象となったヘリオス、その時始めて知った、本当の破壊とは内側から蝕むものだ。

「なんか凄いム力つくね」

「化け物ッスか？」

「酷い言われようだね、神技は使い方次第だよ？」

モリガンはグラビテーションの対象を自分に代え、無重力状態にしたからだ。

モリガンはシヴァを振り上げると、そのままヘリオスに向けて放つ、自然の重力と、モリガンがグラビテーションによる操作で、シヴァは凄まじい勢いでヘリオスへと向かう。

ヘリオスは何とか後方に避ける、目の前にはフィールドを貫いたシヴァの鎖が見えた、自分を鼓舞して地面を蹴るヘリオス。

「インフェルノ！」

炎に包まれるレーヴァテインを手に、ヘリオスはモリガンの手から伸びる鎖を駆け上がった。

何故かモリガンに近寄るにつれ、肌寒くなったような感覚を覚える、普通ならば殺気、そう捉えるであろうが、ヘリオスは本能から飛び退き、フィールドに着地して再びモリガンを見上げた。

モリガンはゆっくりとフィールドに近付き、ゆっくりと着地した、その時も確かに感じる、殺気とは違うその肌寒さ、悪寒ではなく寒気。

「君、本当にム力つくね、普通だったらあれでゲームオーバーだったよ？」

僕が負けるなんてあり得ない事さ、だけど事実は変えられない、実際僕は一度死んでいてもおかしくない。

始めてだよ、他人に負けるかもって思ったのは、それが本当にム力つくね、僕は最強になりたいなんて思っちゃんないよ、ただ、破壊する立場の僕が壊されるのが堪らなく許せないだけさ。

だから僕はヘリオス、君を壊すよ、僕が壊されるその前に、ね？」

ヘリオスは恐怖を覚えた、いつも饒舌ではないモリガンが、今はここまで喋っている、本当にモリガンの触れてはいけない部分に触れてしまったのではないのかと。

しかし全ては思い過ごしではなかった、寒気も、いつもと違うモリガンも……………。

ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、  
ドクンッ

「フリーズ」

シヴァが氷の塊のようになり、フィールドは全て凍り付く、モリガンの足首までは氷に包まれ、ヘリオスの周りだけはなんとか炎で事なきを得ている。

「ま、まさか、新しい神技ツスか？」

「ヘリオスのお陰さ、感謝するよ」

モリガンは凍ったフィールドを滑らせるように、シヴァを放った、凄まじい勢いでヘリオスに向かう。

ヘリオスは避けようと思ったが、踏み出した瞬間に足元が滑ってしまった。

「マジツスか？」

冷や汗が流れる、ヘリオスはレーヴァティンの炎を白い炎、つまり火力を強め、シヴァを真つ正面から受け止めた。

「甘いよ」

シヴァはレーヴァティンにぶつかりと同時に、表面の氷が砕け散り、全てヘリオスに刃のような鋭さで襲い掛かる。

避けることも防ぐ事も出来ず、氷により無数の傷を作るヘリオス。ヘリオスの全力の炎ですら凌ぐその氷、ヘリオスの炎が灼熱だとするならば、モリガンの氷は絶対零度、空気をも燃やす炎と空気をも凍らせる氷、自然を破壊する二つの災い、それがこの二人だ。

バチカンではその莫大な力のぶつかり合いに会場全体が吞まれていた、モニターの前にいる帝釈天とタナトスも同じ、二人の下馬評ではヘリオスの勝利だった、しかしそれを覆すモリガンの第三の神域、その計り知れない強大な力は最強と言われたヘリオスの炎をも凌ぐ。

「こりゃヘリオスが負けるってのもあり得るかもな」

「モリガンに勝ち目が出たのではなく、ヘリオスの勝ち目がなくなっただけだ」

「まああいつにも隠し種があるらしいからな、アイツの“本当の力”が見れる良いチャンスだぜ」

「それなら安心しろ、力に関しては貴様と同じ力だ」

「まさかヘリオスもシン

」

タナトスは途中まで言いかけて辞めた、ヘリオスもシンクロが使えるのか？と。

それは途中で気付いたからだ、帝釈天がカマをかけている事に、帝釈天の妖しい笑みで悟る、完全に次の戦いで見せなくてはならないだろうその力、早くも見破られてしまった。

「お互い少なくとも準決勝にはバレル事だ」

「まあヘリオスがシンクロを使えるのだとしたら、モリガンの神技では勝ち目はねえな」

「ただ、ヘリオスはタナトス、もしくは阿修羅にしかシンクロは使わないだろうな」

「俺様とは違ってアンフェアが大っ嫌いだからな、あの力を自分の力と取るか、ただのチートと取るかは難しいところだぜ」

確かにシンクロは強力すぎる神技、故にヘリオスは避けているところがある。

「俺様は迷わずテメエに使うけどな、ヘリオスの野郎と痺れる戦いがしたいんでな」

「貴様、何か忘れていないか？俺にも天竜の血が流れている事を」

「まさか、テメエも？」

明らかな同様を滲ませるタナトス、もし帝釈天に阿修羅と同じ力が

あつたとしたら、タナトスやヘリオスと同等、もしくはそれ以上の力と言えよう。

「安心しろ、ただのハッターだ」

「驚かすんじゃないよ」

既にボロボロのヘリオス、ヘリオスの周り以外はモリガンの冷氣により凍り付いている、ヘリオスの周りだけは炎により凄まじい熱をほこっている。

「ずいぶん惨めな姿だね？ほら、本気を出してみたらどうだい？」

「俺が本気を出したらモリガン負けちゃうツスよ？」

「甘いね、そんなんだから君は大切なものを逃すんだよ」

その言葉にヘリオスの顔が始めて怒りに歪んだ、それは普段ヘリオスが見せない顔。

「何も守った事のないモリガンには分からないッスよ」

「僕は自分の身一つあればそれで満足なんだよ、君みたいに手に負えなくなるような事はしないからね」

それは完全に挑発、ヘリオスに本気を出させるためにモリガンが仕掛けた罠、皆ヘリオスの本気を倒さなきゃ意味がないと分かっている、故にモリガンはわざとヘリオスを怒らせたのだ。

「君か何を思っただけ阿修羅に肩入れしてるのか知らないけど、君には無理な事じゃないのかい。」

阿修羅も、ママの阿修羅も、お互いホーリナーラグナロクの引き金になったじゃないか？それだけ天竜の巫女ってのは危険な人物ってのを理解してるのかい？」

ヘリオスは怒りで俯いている、怒りに呼応して神技が暴発し、ヘリオスの周りは炎の海と化している。

モリガンはあと少しと口角を上げるが、それも一瞬、ヘリオスの小さな変化に気付いてしまった。

ヘリオスの真つ白だった炎が徐々に黒く染まっている、白い炎とは温度の変化で作れる、しかし、黒い炎というのはまずあり得ない、黒煙はあれどそれは煤によるもの、つまり、ヘリオスの力が加わり炎がまがましい変化を遂げた。

「もしかして怒りで炎が変わったって言うのかい？」



「阿修羅は俺が守るんすよ、モリガンが何と言おうが、俺は諦めたりしないッスからね！」

黒い炎が一気にモリガンの氷を溶かし、フィールド全体を覆うように拡大する。

「グラビテーション！」

始めてモリガンの声から焦燥感が滲み出る、重力でなんとか炎を押しつぶし鎮火するが、既にヘリオスは飛び上がっていた、モリガンは慌ててシヴァの付け根を持つ。

「フリーズ！」

氷に包まれるシヴァ、冷気と熱気が二人の間でせめぎ合い、温度の急激な波により風が吹き荒れる。

漆黒に染まるレーヴァテインと純白に染まるシヴァがぶつかり合った瞬間、炎と氷が急激にお互いを浸食しようとして爆発が起きた。二人はその衝撃で弾き飛ばされる、モリガンは何とか踏ん張り、シヴァを氷で包みヘリオスを睨んだ瞬間、既にヘリオスはレーヴァテインを振っていた。

レーヴァテインから伸びる炎は自ら意志を持っているかのように一直線にモリガンに向かう、モリガンは思いつ切り神技を発動し、シヴァの氷は1m程になった。

漆黒の炎は純白の氷に包まれたシヴァを捉えた瞬間、一気に燃え上がりシヴァもろともモリガンを飲み込んだ。

「コレが太陽の怒りに触れた人間の末路なのかい？」

上を向いているモリガン、肩で息をしているヘリオス、ヘリオスはそのままモリガンを睨むと一步を踏み出し、拳を振り上げた。

「もう終わりで良いでしょ？」

振り上げた拳は阿修羅に掴まれ、モリガンは上を向いたまま微動だにしない、ヘリオスは阿修羅の顔を見た事により平静を取り戻した。

「モリガンも貴方の本気が見たかっただけよ、そうよね？」

「ヘリオス、君はどこまで強いんだい？僕は100%を超えたのに、まだ君は本気を出してない、最大の屈辱だよ」

モリガンは薄ら笑いを浮かべながら唇を噛む、まだモリガンも本気のヘリオスに負けたのなら納得がいく、しかし、あれは怒りから出た力、モリガンからしたらあの黒い炎の方がイリーガルな力だった。

「あの黒い炎もそれなりの力があつたんすけどね、いずれ見せる事になると思うッスけどね」

ヘリオスはモリガンに背を向けて歩き去る、その後ろにはモリガンをみる阿修羅、そしてモリガンは鼻で笑うとその場を去った。

『何か俺の存在忘れられてるみたいだな、とりあえず説明や感想は抜きにして、勝者は太陽神のヘリオスだ』

## 24：友情の刃

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

準々決勝第4回戦、阿修羅対ククルカン

二人はキューブの外側に吐き出され、無機質な空間に置き去りにされた。

究極の柔の戦い方をする阿修羅、究極の剛の戦い方をするククルカン、正反対の二人、お互い最強の両極端、つまり、理論的には柔が剛を制す、しかし、ククルカンの力はまさに規格外、例外と言えるう。

二人は得物を取り出そうとはせず、ただ向かい合うのみ、まるで静寂を楽しむかのように笑うククルカン、コレから起こる激しい戦いを待ちわびるかのような阿修羅。

「ねえねえ、せっかくだから素手で戦ってみない？楽しそうだよね？」

「はあ、ククルカンが明らかに有利じゃない」

得物があれば違うが、素手となつてはごり押しされたら勝ち目はない、しかし阿修羅の顔は絶望的というより、ククルカンの提案に好戦的な表情を見せている。

「何か何か、阿修羅はどんなんでも強いんじゃないかな？って」

「武道なら粗方出来るから、やってみる？」

阿修羅は素手で構えた、得物を使わない素手での体術が苦手ではない阿修羅、むしろ、ホーリナーになる前はこちらが主流だった。

「じゃあじゃあ、いつきまーす！」

ククルカンは地面を蹴って阿修羅との距離を一気に詰めた、押し潰すように拳を振り下ろすが、軽々と避けられてしまふ、阿修羅はすかさずククルカンを蹴り上げようとするが、阿修羅の全力の蹴りを軽々と片手で防がれてしまった。

ククルカンはニタリと嫌な笑みを浮かべると、阿修羅の足を掴んだまま投げ飛ばした、阿修羅は凄まじい勢いを何とか踏ん張って殺そうとするが、後少しのところでフィールドから落ちてしまふ。

「まだまだだよな？」

そう、阿修羅はフィールドの角にぶら下がり、何とか深い、底の見えない闇に吸い込まれるのは免れた。

ククルカンは僅かな心に出来た油断を追い払い、阿修羅の反撃を待ち構えるべく構える。

案の定阿修羅は復帰した、弾け飛ぶように飛び上がると、着地と同時にトップスピードで走り、ククルカンとの間合いを一気に詰める。まずは牽制程度に手のひらを突き出すが、ククルカンの腕に阻まれてしまふ、触れた感触は女の子のか細い腕だが、全くビクともしない、という無駄な考えを思考の外に追い出し、阿修羅は地面を蹴って飛び上がる。

空中で回転しながら蹴りを2発放つが、いとも簡単にいなされてしまふ、そして阿修羅の着地と共にククルカンは腕を振り上げていた。今回は射抜くようなストレート、恐らく身体強化されているホーリ

ナーと言えど、ククルカンの一発をくらったらず命はないであろう。

阿修羅は冷静に身をかめ、ククルカンが拳を突き出すのと同時に腕を掴み、ククルカンの勢いを使って投げ飛ばした。

ククルカンとは違い相手の力を利用したため、阿修羅の力では考えられない程飛んでいる、普通なら踏ん張る暇もなくフィールドの外に弾き出されるはずだが、

ドゴン！

ククルカンはフィールドに穴を空けてそこを掴み勢いを一気に殺した、まさにデタラメの代名詞であるククルカンだからこそ出来る芸等。

「コレじゃあ終わらないんじゃない？」

「うんうん、うちもそれ思った」

何故かククルカンは嫌な笑みを浮かべる、それは悦に浸った顔、勝利への布石は既に盤石と言わんばかり。

「でもでも、そしたらうちが勝っちゃうよ？」

「その自信がどこから来るのか分からないけど、終わってから泣かないでね」

二人は同時に腕輪に触れた、阿修羅の得物は長刀、名は夜叉丸、ククルカンの得物は刃以外がナックルガード、しかも刃のナックルガードで覆われた槍、名はルドラシス。

「バキューム！ツイスター！」

ククルカンの周りを大気の渦が覆う、阿修羅の目からはバキューム、つまり真空がどこにあるのかは分からないが、経験から恐らくククルカンが纏っているとふむ。

つまり最強の力により全てを拒絶する矛、体に纏うかまいたちのベールによる盾。

「それ凄い厄介ね、でも……………」

阿修羅は夜叉丸を脇で構えた、そのまま体を沈ませる。

「ベロシテイ」

一瞬でククルカンの懷に潜り込む、しかし阿修羅はククルカンの盾を甘く見ていた。

斬りかかろうとしたその瞬間、夜叉丸はククルカンの手前で凄まじい力で押し返されてしまった、それにより体勢を崩してしまう阿修羅、ククルカンは口角を上げたままルドラシスを振り下ろす。

阿修羅はとっさに防ごうとしたがあることを思い出した、見るも無惨なアルテミスの得物の姿を。

阿修羅はバックステップで何とか避けようとするが、それよりも早くルドラシスが夜叉丸を捉えた、その瞬間今までに感じた事のない力が一瞬だけ夜叉丸にかかる、阿修羅だけは何とかルドラシスを避ける事が出来た。

そして阿修羅は夜叉丸を見て固まる、それはククルカンも同じ事。

「や、夜叉丸の、刃が」

夜叉丸の刃は半分は健在、しかし、半分から先が綺麗に無くなって

いる、辺りを探しても破片一つ残っていない。

「夜叉丸の刃が、消えた？  
ククルカン、貴女は何をしたの？」

「ただただ、ルドラシスに真空を纏わして、うちが高密度の竜巻を纏った、それだけだよ？」

「でも、夜叉丸が……」

阿修羅は完全にパニックに陥っていた、しかしそれはこの事象を発生させたククルカンも同じ。



ダグザと帝釈天も今戦っている二人と同じ顔をしている、しかしダグザはすぐに分析に移る。

新たな神技とは思えない、夜叉丸を切断したのではなく、刃を“無くした”、そんな事が本当に可能なのか？と、否、現に起きているのだからその理由を。

「ダグザ、分かるか？」

「黙れ、今考えている」

「悪かった」

既に帝釈天の頭はコレに着いて行けるだけのキャパシティを持ち合わせていなかった、まずディアンギットの鉄を曲げる時点で説明不能だからだ。

「まさか……………」

「分かったのか？」

「仮説だがな。」

恐らくククルカンが斬ったのは夜叉丸ではなく、そこにある空間そのもの、ルドラシスに纏わせた真空、それがククルカンのディアンギットの鉄すらも曲げる力と合わさり、ルドラシスの周りだけブラツクホールに近い状態を作り出した、つまり、ルドラシスの周りだけが不可侵領域と化し、夜叉丸を異次元へ、もしくは完全消滅させた、としか考えられん」

「それはあり得るのか？」

「仮説だ、まずあり得ないと言いたところだが、現にそうとしか言えない事が起きている」

ダグザは内心馬鹿げた仮説というのは分かっている、しかし、それ以外説明がつかない、そして、ホーリナーの世界は神が干渉している、故にあり得ない事もあり得る世界。

ククルカンは勝利を確信していた、威力を上げるために使ったバキューム、それが思わぬ結果を生んだからだ、そして刃をも受け付けない風、ククルカンに死角は無くなっていた。

「（刃は通らない、受け太刀も出来ない、相手に触れる事が出来ないなんてどうすれば良いの？」

ただククルカンの防御は風、弾かれるっていうよりは押し返された、つまり、押し返される前に押し切ればいけるかも）」

阿修羅は僅かな望み、ほんの一筋の勝機にかけるしか道は残っていなかった。

「ほらほら、巫女の力を使おうよ？」

「それじゃあフェアじゃないじゃない、それに、まだ負けが決まったわけじゃないわよ？」

「良いよ良いよ、本気出す前に終わらせるもん」

ククルカンは膨れっ面のまま地面を蹴った、風を纏っているだけあり、身動きが軽くスピードもある。

「アブソルペーション」

夜叉丸が低く唸り始める、虎視眈々とその時を狙う獣のように。

ククルカンの振り下ろしを避けると、阿修羅は軽く間合いを取った、床まで振り下ろされているが、床は綺麗に消え失せている。

ククルカンは気にせず、横薙にルドラスを振るうが、それも避けられてしまい、更に背後を取られてしまった。

阿修羅は蹴りを入れるが、風により押し返されてしまう、ククルカンはその隙を見逃さず、左足を軸にして回転しながら斬りかかる、しかし、その時には阿修羅は間合いを取っていて空振りに終わった。

「はあ、やっぱりデタラメな防御力と攻撃力ね」

その時ククルカンの耳に不吉な音が聞こえた、夜叉丸が霊体をすすめる音。

「（まさかまさか、阿修羅は霊体を集めてるの？ ならなら、斬っちゃうえば良いんだよね？）」

そう、ククルカンは気付いてしまった、阿修羅のしようとしている事に、コレは阿修羅にとっては最悪の結果のみが待ち受けている、僅かな希望すらもぎ取られた事を意味する。

「余裕余裕、阿修羅このままだと負けちゃうよ？」

「そんな事はないから安心して良いわよ」

阿修羅は再び走り出した、時間を稼ぐような戦いでククルカンからこまめに間合いを取る、そして悟られないように出来るだけ得物は使わない、それが全てバレているとも知らずに。

阿修羅は回転しながらククルカンの左側に回り込むと、拳を振り上げた、しかし、阿修羅より早く凄まじい風が吹き荒れる。

「コレで終わり！」

ククルカンはそのまま阿修羅に向かって突きを放つ、その時、阿修羅はとつさに夜叉丸で防いでしまった、恐らくこの力なら刀身は消えないが、確実に夜叉丸を握っている事は不可能であろう、夜叉丸を手放したら溜めてきた霊体は無駄になる。

時、既に遅し、夜叉丸に凄まじい威力の突きが放たれる、はずだったが、阿修羅の手には凄まじい力というよりは、触れただけに近い

衝撃しか来ない。

「あれ？」

二人同時に同じ顔をする、それは再び理解に苦しむ事態が起きた、しかし、いち早く理解したのは阿修羅だった。

今度は阿修羅が嫌な笑みを浮かべる、そして、技名破棄のペロシティでククルカンとの間合いを詰める、ククルカンは何が何だか分からず防御の体勢に入る事しか出来なかった。

「チェンジ！エミッション！」

阿修羅が夜叉丸を横薙に払うと、そこから透明の刃が放たれた、それは空気を切り裂くようにククルカンに襲いかかる。

ククルカンは何とか横に避けるが、阿修羅は既に目の前にいた、今の刃が伏線だったのは理解出来る、しかし、ククルカンにはそのほかの事は何一つ理解出来なかった。

「チェンジ、アブソルペーション」

阿修羅は不気味に唸る夜叉丸でククルカンを突く、本来なら押し返されて終わりだが、ククルカンは夜叉丸が風の盾に触れた瞬間、風が一気に止んだのを感じた。

そして阿修羅は夜叉丸を真っ直ぐククルカンの喉元に突き付けるだけ、ククルカンは苦笑いを浮かべながら両手を上げる。

「ねえねえ、終わる前に教えて、阿修羅は何をしたの？」

「簡単な事よ、ククルカンの神技を吸い取り、それを刃として放つだけ」

「なになに！それってルール違反じゃん！」

「はあ、貴女の全てを消す斬撃よりは糸口が見えると思うけど？」

ククルカンは怒っているように見えて、優しい笑みで阿修羅の事を見ている、そして。

「棄権します！」

バチカンに吐き出された二人は戦闘の緊張感から解放され、表情を緩ませた。

『勝者は戦闘神の阿修羅だあ！あのククルカンの無敵とも思えた全てを断ち切る最強の矛、全てを押し返す最強の盾！それすらも取り込んでしまう阿修羅の神技！

どんな優れたハンターだろうが腹を空かした獣の前では得物すら食われちまうらしい！』

阿修羅は一息ついた瞬間、ククルカンが横から飛び付いて来た。

「凄い凄い！阿修羅、楽しかったよ！ありがとう」

満面の笑みのククルカン、その何よりも明るく柔らかい笑顔につられ、阿修羅も自然と笑みになってしまう。

「私も楽しめたわよ、ありがとう」

二人は何も言わずとも、お互いがてを出して握手を交わした、しかしそんな微笑ましい一幕を気にしない輩が一人。

『さあ！ココからはベスト4だあ！このまま決勝までぶっ続けて行くぜ！

準決勝第1回戦は“死神のタナトス”対“殺壁の帝釈天”だあ！』





## 25：更なる力

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

準決勝第1回戦、帝釈天対タナトス

フィールドの外側に出された二人、二人が体験した内側は閉鎖的な空間で気味が悪いが、外側というのも底知れぬ闇、こっちも気味が悪いのに変わらない。

帝釈天は久しぶりに興奮していた、確実にタナトスはシンクロを使う、何故なら一度、帝釈天に完敗しているからだ。

恐らくこの戦い、己の限界という壁を超えなくては勝利はない、そこに運など存在しない、極限、それを自分で線引きしない事だけだ。

「帝釈天さんよお、俺様はデメエに負けてる、そこで質問だ、最初からシンクロ使って欲しいか？」

タナトスはふざけているように見えるが、コレはは勝利を確信しているから言える事。

帝釈天もヘリオスで体験している、ホーリナーを超えた、対戦相手からしたら絶望的な力。

「貴様に負ける気など毛頭ない、貴様がどれだけ強くなったのか知るのもまた一興だ、本気で頼む」

帝釈天は腕輪に触れた、得物はクレイモア、名は髭切。

そして髭切に指を当てる。

「コラプス」

二振りにすると構えた、それは臨戦態勢、タナトスに対する意思表示。

タナトスも口角を上げながら腕輪に触れた、得物は太刀、名はスケイル。

タナトスは上目使いでタナトスを睨み、スケイルの切っ先を自分に向け、そのまま突き刺した。

「シンクロ！」

その瞬間、スケイルから黒い布が現れてタナトスを包み込む、タナトスは空中に浮くと一回転した、黒い塊はローブとなり、腕が突き出されると同時に二振りのスケイルが顕現される、そしてタナトスのフードの下は闇に染まった。

「アイカワラズコノスガタハスキナレネエ」

「プロテクティブ」

帝釈天の体は薄い透明の膜で覆われた、まさに人外の戦い、最強レベルのホーリナーが最強レベルの力を使いぶつかる。

「サツサトオワラセヨウゼ？」

「そうだな」

タナトスは空中から真っ直ぐ帝釈天に向かう、対帝釈天はそれを待ち構えるように構える。

タナトスがスケイルを振り下ろし、帝釈天が防ごうとしたが、髭切はいとも簡単に斬られてしまい、スケイルは帝釈天に当たり止まる。

「そういう事か、面倒だ」

帝釈天は髭切を投げ捨て、再び腕輪に触れた、そして今度は一振りのまま両手で握り、タナトスを睨んだ。

タナトスは再び間合いを詰める、しかし今回はタナトスの体から紐が伸び、それが帝釈天に襲いかかる。

帝釈天は瞬時に判断して、伸びて来た紐を斬り伏せてタナトスとの間合いを詰めた。

タナトスの右からの振り下ろしを何とか避け、左の横薙の斬撃は刃に触れず髭切で止め、そのまま顔面に蹴りを放つ、しかし、蹴りは紐に足を掴まれてしまい、更に、そのまま空中へと吊されてしまった。

タナトスはそのまま両手のスケイルを帝釈天を挟むように振る、帝釈天がこの戦いで初めて見せた動揺する顔。

帝釈天は髭切を捨て、両手でスケイルの柄を掴んだ、しかしじりじりと顔に近づく切っ先。

「コラプス！」

スケイルは壊れてしまふ、その間に髭切を顕現して足の紐を斬って何とか脱出した。

しかし帝釈天の眉間にはスケイルが当たった傷、明らかにタナトスの優勢、そして帝釈天もタナトスも感じていた、プロテクティブの限界。

「ヤッパリ、プロテクティブにゲンカイガキテイタラシイナ」

「否定しない」

帝釈天は自傷気味に笑い、髭切を片手で持つと得体の知れない笑みを浮かべ、空中にいるタナトスを見上げた。

「先に謝っておこう、つまらない戦いになったらすまん」

帝釈天は頭を下げた、タナトスにその意味が理解出来なかった、恐らく今までにないくらい高度な戦いのはず、なのになぜ、という疑問が頭を埋め尽くす。

帝釈天は顔に手を当て、指の隙間からタナトスを睨んだ。

「コラプス」

「オイ！テメエナニシテヤガル！」

「ぐうあああああああああああ！！！！」

帝釈天はそのまま膝を着き、叫びながら吐血した、そして体が激しく痙攣し、悶え苦しんでいる。

しかし、帝釈天には苦しみだけではなかった、徐々にだが、少しずつ、髪の色が変化している、真っ黒だった髪の色は、灰色を経て、白くなり、輝くような銀色へと変化した。

そしてもう一度吐血すると、ゆっくりと立ち上がり、タナトスを睨んだ、その瞳は瞳孔だけが真っ白に染まっている。

会場は騒然としている、タナトスの不気味な神技、そして帝釈天の異常な変化。

驚いているのはホーリナーのみならず、元帥と元老の二人も同じだった、特に大きな反応を見せたのは毘沙門天、椅子を倒して立ち上がり、画面を食い入るように見る。

「あれも阿修羅ちゃんと同じような力なの？」

「不可視、毘沙門天、退」

「巫女と同じ力あ！？そんな力が2つもあるわけねえだろ！

あれは天竜の伝説となった力だ！最大の禁忌、一族を滅ぼす力としてな！」

毘沙門天の興奮は最高潮に達した、実際毘沙門天もコレを見るのは初めてだからだ。

「天竜の巫女」ってのは外側の人間が付けた名前だ、天竜の人間は“紅蓮の剣”と呼んでるんだぜ？

そこで、“紅蓮の剣”と対を成すのが今の帝釈天、“白銀の盾”だがあの力は過去に一度、一人じゃねえ、たった一度だけ発現された力だ、それも、無理矢理脳みそを薬でいじって、リミッターを解

除するんだぜ？

女系な天竜にとって、男は貴重な存在だった、しかしその男が薬物実験で数々死んで、一時期天竜は滅亡しかけた、だから“白銀の盾”は伝説になったんだけどな。

まあ帝釈天は血が濃いからあり得ないとも言いきれないんだかな！

「確か毘沙門天って天竜の分家だっけ？」

「ああ！実力至上主義の天竜だから阿修羅あすらとの結婚がゆるされたよ  
うなもんだぜ！」

帝釈天は体を確認し、異常が無いことが分かると髭切を握った。  
阿修羅と似た変化、しかし、確実に違うであろう能力、タナトスに

はそれを探る時間などなかった、ならば、圧倒的な力でねじ伏せるのみ。

「ソノチカラハナンド？」

「分からない、だから試させてもらおう」

帝釈天は普段と変わらないスピードでタナトスとの距離を詰めた、タナトスも真っ直ぐと帝釈天に向かって降下する。

先に攻撃に出たのはタナトスだった、薙払うようにスケイルを振るう。

「迂闊に攻撃するとは、愚かだ」

スケイルは空中に現れた盾に当たり、砕け散ってしまった、タナトスに驚く暇も与えず、帝釈天は髭切を振り上げる、タナトスは瞬時に攻撃から防御に移る。

しかし帝釈天の腕が籠手を纏い、スケイルを掴むとスケイルが砕け散る、タナトスは何とか後ろに避け、髭切の振り下ろしによる致命傷は避けたが、胸を斬りさかれてしまった。

空中へと間合いを取り帝釈天を見下ろすが、相手に対してコレほど恐怖を感じたのは初めてだった。

「デタラメナチカラダゼ」

「貴様に言われたくはない」

「オレサマノホウガデタラメカモナ」

帝釈天は空中にいるタナトスを睨み、そのまま足を踏み出すとそこ



に盾が現れる、そしてそのまま階段を駆け上がるように盾を足場にしてタナトスに近寄る。

タナトスはどういう力か判断するために一振りのスケイルを振り下ろした、しかし、帝釈天は横に避けて攻撃を仕掛けて来る、タナトスは横薙にスケイルを振るうが、帝釈天は足場を無くして下に逃げ、盾に着地した。

その行動でタナトスはたった一つだが、帝釈天の能力を理解した。

「テメエ、ソノタテヤラコテヤラハイチドニヒトツマデシカケンゲンデキナイラシイナ」

「だとしたら何になる？」

「オレサマノコウゲキハヒトツヤフタツジャナイツテコトダヨ！」

タナトスは両手にスケイルを握り、体中から紐を出し、その紐が一気に多方面から帝釈天に襲いかかる。

紐は帝釈天に触れる瞬間、盾に阻まれてしまう、そして盾が爆発して周りの紐をも燃やしてしまう、近くまで来たのは斬り伏せる。

全く帝釈天に触れる気配はなく、むしろ帝釈天はタナトスの動きを見れる程の余裕すら見せている。

「サスガニコレダケジャハナシニナラナイカ」

タナトスは自らも帝釈天に向かう、紐とスケイル、様々な攻撃、帝釈天はその攻撃を時に盾で防ぎ、時に斬り伏せ、時に避けて器用に体に当てないようにしている。

「ソウダナ、コレナラドウダ？」

タナトスはスケイルを複数顕現させ、それを紐が巻き付いて自由自在に動かす。

「神に近付き、摂理と対等になれた故の複数顕現か」

帝釈天は苦笑いを浮かべた、帝釈天はイリーガルなホーリナー、しかしタナトスは神と同等、つまりその時点でフィールドが違う。

帝釈天は紐が操るスケイルを掴み、そのまま他の紐を巻き込んで周りを一掃し、他のスケイルは盾で破壊する。

しかし明らかに先ほどとは違い、帝釈天自体に余裕がなくなっている。

そして何とか帝釈天が防ぎきっていると思っていたその瞬間、帝釈天の膝がガクリと落ちる、それにより腕を紐に掴まれてしまう、紐を斬ろうとすが、それよりも早くもう一方の腕も掴まれてしまった。

それを皮切りに両足を掴まれてしまい、全く身動きが出来ない状態になる。

「ソノノウリヨク、ボウゲニナツテモブキニハナライシイナ」

タナトスは帝釈天を上空にまで連れて行った、まるで公開処刑のよう、死神に楯突いた者の末路。

しかし絶体絶命の状況にも関わらず、帝釈天の顔は何故か笑っている。

「マダナニカアルノカ？」

「いいや、何もない」

帝釈天が嘘をついているようには思えない、何故なら既にその瞳が

ら戦意や殺気は消え失せているからだ。

「ただ、貴様はシンクロを使いこなしていた、だが、俺はこの力に振り回されていただけだ。

宣言しよう、次に戦う時は確実に俺が勝利を収める」

「ツギガアレバナ」

タナトスはスケイルを振り上げた、それは帝釈天が負けを認めた訳ではなく、ただたんに戦意を失ったから、そして次に繋げるために、帝釈天の“敗北”ではなく、タナトスの“勝利”で終わらせるためだ、それを帝釈天も望んでいた。

「1勝1敗だな」

スケイルは迷いの無い一閃を描いた。

バチカンに戻った二人は地響きのような歓声が鼓膜を揺らした、今までにないくらいの盛り上がり、それもそうだろう、あそこまで人外な戦いを繰り広げれば、それは本当にスクリーンの中だけの作られた戦い。

しかしそれが現実として目の前にいる人間により作り出されたとなれば、自分達は異次元のレベルでの戦いの生き証人となる。

『信じられねえ戦いだあ！こんなもんホーリナー対ホーリナーの戦いじゃねえ！まさに神同士の戦いだあ！』

そして世のホーリナー共が見たくてたまらなかったタナトスの本気！そしてそれを迎え撃つ帝釈天は己を超えやがった！

この超ハイレベル、いや、異次元の戦いを制したのはタナトスだあ！コレで決勝戦に歩を進める奴が一人決まったなあ！』

帝釈天はタナトスの方を向き、手を差し出した、タナトスはそれを拒む事なく、握り返す。

「あの力はなんだ？空中に盾が現れたと思ったら爆発したりこっちの得物を破壊したりしやがって」

「盾は恐らくディアンギットの鉄であろう、後はあの力で盾に神技の概念、つまり、破壊や爆発を付加するだけだ」

「こりゃ使いこなされたら勝ち目はねえな」

タナトスは手を離して自傷気味に両手を上げた、勝利と言えど、そ

れは力を使いこなせたかどうかの差、帝釈天が“白銀の盾”の力を  
使いこなしたら、それは難攻不落の城のごとき守りとなる。

## 26：不穩

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

準決勝第2回戦、ヘリオス対阿修羅

二人は前の戦いとは打って変わってキューブの内側、完全に閉鎖された密閉空間の中へと放り出された。

阿修羅は居心地が悪いのか顔をしかめる、閉鎖的な空間、逃げ出せない空間というのが嫌いな阿修羅にとって、これは戦いの勝敗よりも気を取られる事だ。

ヘリオスは体をほぐしながら阿修羅との戦いに備える、前にも一度戦った事のある二人、そしてお互いの本気を知っている、そして、同じような二人の戦い、タナトスと帝釈天の戦いを見ている、それによりヘリオスは僅かながらに勝利というものに対し、確信を得ていた。

「タナトスも最初から本気出したんスから、俺らも本気で行っちゃって良いツスよね？」

「はあ、やる気満々みたいね」

「そりゃそうツスよ！ワクワクしないツスか？こんなギリギリの戦いが出来るなんて思っても見なかったんスからね」

子供のようにしゃぎっぱなしのヘリオス、確かに阿修羅にとってここまで運動（戦い）出来るのは願ってもない事だった、しかし、それを見せ物にされる事に対して若干の違和感を感じずにはいられ

ない。

そして何より、阿修羅はこの戦いの先が見えていた、何故かやる気が起きないのもそれ故だ。

「何か阿修羅元気ないッスね？」

「はあ、そりゃそうじゃない」

「何でッスか？」

「はあ、分からないの？」

「阿修羅の思ってる事なんて分かるわけじゃないじゃないッスか」

ヘリオスは不貞腐れながら口を尖らせる、いつもよりため息が多い阿修羅にとって、戦いたくしょうがないヘリオスは厄介だった。

「先に見える戦いに興味はないのよ」

「だったらどうなるんスか？」

阿修羅は鼻で笑うと手を挙げた、ヘリオスはその行為に対して首を傾げる。

「棄権します」

早々に、戦わずにバチカンに戻った二人、会場は動揺によるざわめきで異様な空気を作り出していた。

ヘリオスもまた同じ、理解が出来ずにただ阿修羅を見ているだけしか出来ない。

『アンビリーバボー！阿修羅は何を考えてるんだ！？“天竜の巫女”とやらの力をどれだけのホーリナーが期待してたと思う！？それをことごとく裏切りやがつて！謎にするのはその意味の分からないへんちくりんな服装だけにしやがれ！力を出し惜しみしたからって何も良いことないぜ！？』

とりあえず不満たらたらだとは思うが、今回の戦いはヘリオスの不



戦勝という形で終わりだ！』

阿修羅はヘリオスに向き直ると、ヘリオスのその力の抜けた表情に呆れてしまった、ヘリオスのやる気は目一杯の空振り、その行き場を無くしたやる気が、未だに不戦勝に対する疑問になり渦巻いているのである。

「な、何でツスカ？」

やっと紡ぎ出した言葉がその一言、しかし、阿修羅に対してはそれで充分だった、何故なら、聞かれる事など容易に推測出来るからだ、否、推測ではなくこの流れならば至極当然の一言であろう。

「今の力じゃヘリオスに勝てる見込みなんて1%もないわよ、貴方の力はそれくらい強大なだから、私だって無様に負けたくないじゃない？」

「確かに阿修羅とは戦いたくなかったツスけど」

そうではないとつつこみかけて、阿修羅は何とか飲み込んだ。

「せつかくの機会を無駄にしなくても良いじゃないツスカ？」

「どうせ今後ホーリナーは自由に使えるようになるんだから、気が向いたら相手を頼むわよ。

神選10階も私になりそうだし、クソ元帥の思う壺よ」

阿修羅は自傷気味にヘリオスに背を向け、そのまま日本支部の方へと帰って行った。

それを見てヘリオスは追いたい衝動にかられる、何故だか分からない

いが、阿修羅の背中が凄く遠くに感じられ、目を離したらいなくなってしまうんじゃないか、そんな恐怖が胸をよぎった。

そこはバチカンからそれ程遠くはないビルの屋上、そこには軍用ヘリがあり、総結いの男性と、その後ろには天照、素戔鳴、月夜見がいる。

総結いの男性は電話をしているが、徐々に表情が険しくなっていた、それにつられ、天照達3人も自然と体に力が入る。

総結いの男性が携帯を閉じると、3人は男性に向かって説明を求める視線を送る。

「お前ら、帝釈天は当然知っているな？」

「お兄様でよね？」

「兄ちゃんがどうかしたのか？」

口々に帝釈天の事を兄と言う3人、つまり帝釈天と双子である阿修羅は姉となる、つまり、いわじもがなこの3人、そして総結いの男性は阿修羅あしゅらに関係のある、しかも直接的に関係のある人間となる。

「お前らには話していなかったが、天竜には阿修羅様を使う“紅蓮の剣”と対を成す“白銀の盾”という力がある、しかし“白銀の盾”は禁忌となった」

「まさかお父様……」

天照と月夜見が表情を曇らせた、その表情の理由が分からず、素戔嗚は男性に詰め寄る。

「どういう事だよ父ちゃん！何が言いたいんだよ！」

「帝釈天が、天竜の最高権力である阿修羅様と同等の力を身に付けたという事だ」

素戔嗚が一步退いた、既に阿修羅が巫女として開眼した時点で、阿修羅は否が応なしに天竜の最高権力者となっていた、そして、それに匹敵する者が現れた。

「どうなさるのですか？」

「そうだぜ父ちゃん！拙者達は“姉ちゃんの奪還”だけしか聞いてねえよ！」

3人の姉、つまり阿修羅の奪還、それがここにいる4人の目的、最高権力者である阿修羅を天竜に連れ戻す、それがこの4人に課せられた任務だった。

「止む終えん、天照！素戔鳴！月夜見！頭首代理に代わり命を授ける、阿修羅様奪還に加え、帝釈天を討つ！やれるな？」

「余裕に決まってるだろ！なあ！？姉ちゃん、月夜見！」

「兄上、落ち着いて、下さい」

「お父様、生殺与奪ではなく、お兄様を亡き者にするのでよろしいのですね？」

「お前らには兄を殺すというのは少々荷が思いかもしれんな」

天照は表情を強ばらせ、男性の表情をしっかりと見据えた、そこには確かな覚悟だけがある。

「いえ、お兄様は叔父様に刃を向ける恐れがある危険因子です、遅かれ早かれこの時期が来ると思っていました」

「姉ちゃんは気にするな、帝釈天は拙者が殺してやるからよお！」

素戔鳴からは既に殺気が出ている、天照の表情も臨戦態勢というのを訴えかけている、月夜見は心を落ち着け、ただその一瞬のみを待っている。

「準備が整いました」

男性の横に片膝を着く男性、その言葉を聞いて男性は3人を見据える。

「行くぞ」

4人はヘリコプターへと乗り込んだ、阿修羅を天竜に連れ戻すために、そして、新たに現れた危険因子、帝釈天の排除へと。

## 27：崩壊の足音

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

バチカン沸き立つ歓声で揺れていた、それもそのはず、決勝戦、そう、今ここでホーリナーの最強が決まる。

支部のホーリナーからしたら化け物同士の戦い、まさに神と神のぶつかり合い、既に次元の違う領域にまで達していた。

広場の真ん中にいるタナトスとヘリオス、誰もが思う、この二人は確実に歴史になるであろうと。

タナトスはポケットに手をつ込みながら早くしろと、ステージにいる元帥に訴えかける、ヘリオスはこのお祭り騒ぎで興奮を抑えきれていない。

『ここにいる二人が今から最強を決めるために戦うんだよ？ 楽しいしみだよ？ ホーリナー史上初の試みだから僕も楽しいしみだよ。本当に強い人っていうのは常に強い人の事を言うんだよね、誰が勝ってもおかしくなかったこの戦い、その中でこの二人は確実に勝ち上がって来た。』

戦いに偶然なんて存在しないんだよね、最強は最強になるべくここまで来たんだから。

さあて、じゃあみんながお待ちかねだから始めてもらおうか？』

元帥がパチンと指を叩くと、黒い穴が二人の前に現れた、二人はお互いを見ると、数秒のアイコンタクトの後、黒い穴の中、戦場へと出向いて行った。

二人はキューブの内側に出た、しかしいつもとは違うキューブ、それは天井がない、完全な閉鎖空気ではない、かといって無限に広がる闇があるわけでもない。

二人はバチカンとは違い殺気を放っている、しかしそれは殺意ではなく、戦意、目の前にいる敵、それを倒すために他の多くのホーリナーと戦って来た。

どう色眼鏡をかけようがお互いの力は五分、お互いが最強を名乗っても良いくらいだ、しかし、最強は唯一無二、たった一人に与えられる称号。

「ヘリオス、俺様はすげえ楽しみだぜ、テメエとこっやってマジでぶつかり合えるんだからな」

「俺もツスよ、神選10階になって3年、タナトスは強い存在だと思ってたんすけど、こんなに近くなってると思うと興奮するじゃないッスか」

二人は得物を顕現する、ヘリオスの得物は片手剣、名はレーヴァテイン、タナトスの得物は太鎌、名はスケイル。

「俺様は本気でいくぜ？」

「俺もツスよ」

タナトスは切っ先を自分の鳩尾に突き付け、そのまま突き刺した、ヘリオスはレーヴァテインを肩に当て、そのまま引き裂く。

「シンクロ！」

タナトスの得物から黒い布が現れ全身を包んだ、上空に上がると腕が突き出され、そこに二振りのスケイルが顕現される、そして、タナトスはその場で一周回ると黒い布はローブと化した、フードの奥は闇が広がるだけで表情が分からない。

ヘリオスの傷口からは凄まじい炎が立ち上る、その炎は一瞬でヘリオスの全身を包み込む、そのまま倒れるように手を地面に着くと、凄まじい爆発が起こり、そこには全身が太陽のように燃えるヘリオスがいる、目も鼻も確認出来ないが、捕食者である大きな口だけは確認出来る。

「一瞬で終わらせるツスからね」

ヘリオスは一瞬でその場から消えた、ヘリオスを通った数瞬後に凄まじい炎が立ち上り、ほんの数秒でキューブは炎に包まれた。

タナトスは視認を止め、聴覚に神経を注ぐ、そして、全方向から何かがはじけた音が聞こえた、それはヘリオスが放った火球、その包囲は逃げ出す事の出来ない炎の檻。

タナトスは体中から紐を出し、編み込むように絡めるとそれは繭と



化した、火球が当たると凄まじい爆発が起きた。

煙が立ち込める中からヘリオスが弾丸のようなスピードでタナトスを捉える、そのままヘリオスが馬乗りになり、地面に叩きつけると、口を開けてエネルギーを集める。

ヘリオスが炎を放射したその瞬間、タナトスは影となり床を移動し、ヘリオスの後ろを取った。

タナトスはスケイルでヘリオスを切り払うが、それは陽炎であり、消え失せてしまう。

「ナカナカヤルジャネエカ」

「タナトスもあり得ないくらい強いツスね」

いつの間にか後ろにいたヘリオス、しかしヘリオス首もとにはスケイルが突き付けられていた、未だにその力は五分、更にあまり時間が経っていないにも関わらず、フィールドは半壊状態、この戦いの凄まじさを物語っている。

タナトスは宙に舞い上がった、ヘリオスは警戒しながらタナトスの動きを伺う、得物を複数顕現させて紐に掴ませる。

一点集中で相手の盾を貫くヘリオスとは違い、徐々に徐々に敵を蝕むタナトス、消耗戦になればタナトス、先を急げばヘリオスの勝利だ。

一気に降下してヘリオスとの間合いを詰める、牽制程度に火球を放つが、全て消されてしまった。

ヘリオスはタナトスに真っ正面から突っ込むが、様々な方向からスケイルが襲って来る、四肢を使いスケイルを防ぎ、タナトスとの距離を詰めると腕でタナトスを貫こうとするが、スケイルで防がれてしまった。

「まだまだツスよ！」

ヘリオスが口を開けると、タナトスに向かって火球が放たれた、何とか横に体をずらすか、かすただけの火球により火傷を負ってしまった。

しかし火球を放ったせいで出来た隙、それによりヘリオスは無数のスケイルから逃げ遅れてしまい、脇腹を斬られてしまった。

バチカンは大歓声に吞まれていた、二人の熾烈な戦いは終わるところを知らず、激しさが増す一方。

阿修羅はこの戦いを見て本当に戦わなくて良かったと思う、となりにいるあの人外と戦った帝釈天には悪いが、ヘリオスとタナトスに戦いを挑むのは無謀。

「結局この二人が決勝というのは決まっていたんだな」

「兄さんもヘリオスと戦ったのによく危険しなかったわね？」

「この力、試してみたかっただけだ」

「でもぶつつけ本番よね？」

「ああ、あくまで感覚の話だったからな」

“紅蓮の剣”と“白銀の盾”の事は二人はまだ知らない、ただお互い天竜という事だけで今の力を手に入れたと思っている。

確かに阿修羅と帝釈天の持っている力はイリーガルな力、だが、目の前のモニターに映る人外の戦いを見たら可愛く思える、まさに核兵器同士のぶつかり合い。

無数の大鎌が舞い、フィールドは炎に包まれ、乱舞による攻防、ここにいるホーリナー全員が初めて見る戦いだ。

「この戦いは本当に終わるの？」

「共倒れとも言い切れん、今はまだ甲乙付けがたいな」

それ程お互いの力が拮抗していた、神同士の戦いを見ているかのよう、1日で終わるのかと思えた。

ヘリコプターから地上を眺める素戔鳴、バチカンのモニターで流れている映像はこのヘリコプター内でも流れている。

素戔鳴はモニターの前に戻ると嘲笑うような笑みを浮かべ、あぐらに肩肘をついてモニターを見る。

「無駄にド派手な戦いだなあ」

「素戔鳴、この二人に勝てるか？」

「父ちゃん何言っただよ？拙者ならこんな奴ら一瞬だぜ、あんなド派手にやる必要もないね」

その表情は嘘を吐いているようにには思えない程自信に満ち溢れている、そしてそれを否定しようとしない天照と月夜見。

「叔父ちゃんの方がよっぽど強よいぜ？」

「彼ら、井の中の蛙、拙らの相手ではない」

「天照はどうだ？」

「私達<sup>わたくし</sup>の目的はお姉様の奪還とお兄様の排除です、無益な殺生は行いたくありません」

「ならばどうする？」

「反撃させる前に終わらせませす」

素戔鳴がニヤリと笑い下を見る、そこは既にバチカンがある、人の群れが奏でる歓声という雑音、抑えきれない素戔鳴は体に梵字を浮かべ、身を乗り出している。

「素戔鳴、目的を忘れるなよ?」

「応よ!」

「じゃあ始めるぞ」

素戔鳴は天照を肩に寄せ、そのまま飛び降りて行った、月夜見は軽く沈むとその場から消える。

ヘリコプターは徐々に降下してバチカンに近付く、阿修羅達の平穏を崩す影と共に。

## 27：崩壊の足音（後書き）

ついにラストスパートです！

ここから最終回に向けて様々な謎が現れ、解けていきます。

そして今回のテーマでもある“最強”、それが真に分かります。  
陰謀の先の陰謀。

最後までお付き合いください。

## 28：負けないために

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

モニターの中では今まで見たことのない激しい戦いが繰り広げられ、バチカンはそのを見る観客達の熱気が波のように脈打っている。

元神選10階の待合室に自然と日本支部の面々、そしてメルクリウス、ズルワーン、ケツアルコアトル、コアトリクエが集まっていた、阿修羅と帝釈天だけがそこにいない事になる。

しかし、モニターにノイズが入り、モニターが映らなくなってしまった、それと同時に何かが発射したような轟音が響き渡る。

元神選10階の待合室にいた全員は反射的に外に飛び出していた。

外は土煙が立ち上り、その前には帝釈天と阿修羅が得物を顕現して立っている、土煙の中は何も見えずに状況が分からないが、緊迫感、そして凄まじい殺気から他の面々も得物を顕現した。

「風遁・浄」

その瞬間、土煙は一気に消え失せた、大きな穴の両サイドには月夜見と天照が立っている、穴から這い上がるように全身に梵字が浮かんでいる素戔鳴が上がって来て、ようやく殺気の正体が素戔鳴だと気付く。

「帝釈天、帝釈天……、見つけたぜ」

素戔鳴は帝釈天と目が会うとニヤリと笑った、腕輪に触れて得物を顕現する、得物は刃が7つに枝分かれした大剣、七支剣、名は破壊の剣。

月夜見の手には得物である苦無、名は不浄の苦無。

「そんで姉ちゃんは？」

素戔鳴は阿修羅を見付けると、月夜見を横目で見る、月夜見は何も言わず、何も見ずにその場から消え失せた。

次に現れた時には阿修羅の後ろにいたが、月夜見の後頭部には摩和羅女とズルワーンが得物を突き付けていた。

「阿修羅さんに何をするつもりですか？」

「阿修羅に手出しするなら殺すからな！」

「御免」

月夜見は一瞬で丸太となり、ズルワーンと摩和羅女はその場に倒れた、背中には不浄の苦無が刺さっている、そして二人の後ろには月夜見。

「刃向ける奴は容赦しねえからな！」

素戔鳴が帝釈天に向かって地面を蹴り、ベロシティに匹敵するスピードで間合いを詰める、帝釈天の髪の毛と瞳孔は一瞬で白く染まり、素戔鳴の振り下ろしを盾で防ぎ、破壊の剣を壊した。

素戔鳴はそれすら気にせず、帝釈天に拳を振り上げた、とっさに得物で防ごうとしたが、帝釈天の防御もろとも吹き飛ばした。



「素戔鳴！それでは……………」

「やべえ！帝釈天は殺すんだった！」

「あ、兄上……………」

今の一言で今まで様子をうかがっていたダグザが動く。

「全員下がれ、そして阿修羅と帝釈天、特に帝釈天を死守しろ」

「兄上の失態」

「悪かったって！」

「この馬鹿者が！」

地響きのような怒鳴り声と共にヘリコプターから縄ばしごを使い降りてきた総結いの男性、素戔鳴は地面が砕けんばかりに地に頭を付ける、否、実際にコンクリートの地面が砕けている。

「元帥！これはどういう事だ！？」

ダグザが珍しく怒りを露わにする、そしてゆっくりと現れた元帥と元老の二人、その3人はダグザ達ホーリナーではなく、総結いの男性の方へと歩を進めた。

「貴様ら、やはりグルだったんだな」

「グルなんて人聞き悪いぜ！」

毘沙門天が馬鹿でかい声で豪快に笑う。

「大黒天はあの阿修羅<sup>あすらい</sup>の弟だぜ！」

そこにいた全員が驚く、そしてダグザは全てのピースがはまり、今回のこの事件の真相にたどり着いた。

「そういう事か、貴様らの目的はやはり阿修羅らしいな、そして邪魔になった帝釈天は殺すと？」

更に言うとしたら俺とした事が捏造に踊らされていたらしいな、本来ならば阿修羅ではなく緊那羅を神選10階にするのが順当、しかし呼ばれたのは阿修羅、つまり、貴様らの監視下に置くのが目的か。俺の仮説が間違っていないければ、自らに生命の危険が及ばない限り、貴様らは俺達を殺す事はまずないらしいな」

ダグザは話しながら後ろを見た、そこにはフラフラになりながらも立ち上がるズルワーンと摩和羅女、背中など刺されたら普通は生き残れないが、生かされたという事実もある。

「ここで俺が取る行動は一つだけだ」

ダグザはサラスヴァティーを構えた、つまり抗戦するという事。

「ダグザ！私なら良いから逃げて、奴らの強さが分からないわけじゃないでしょ？」

阿修羅は前に出ようとする、ダグザもたった一瞬だが相手の力量が分かった、恐らくこの3人だけを相手にするだけでも勝機は薄いと。

「今逃げたらタナトスとヘリオスはこっちへ戻って来れないだろう、

つまり、俺達は今、2人を人質に取られているという事だ」

全員が息を呑む、只でさえ最大戦力であるあの二人がいない穴は大きい、その戦力を削がれた上に人質にまでされている、万事休すに近い。

「さすが知識神だぜ！そこまで分かっちゃったんなら生かしとくのは良くねえな。

天照！素戔嗚！月夜見！こんだけ知られちゃったんだ、例え任務が終わったとしてもここにいる奴らは天竜に刃向かうだろうなあ」

「つまり姉ちゃん以外皆殺して良いって事だよな！？なあ叔父ちゃん！」

「兄上、よろしいのか？」

「ああ！ミトラ！ランギ！久しぶりに大暴れしようじゃねえか！」

「目的変更、承知也」

「僕の可愛い部下だったんだけどなあ、もともとこうなると思ってたし、久しぶりの戦いだから良いか」

毘沙門天は腕輪に触れた、得物は十字槍、名は岩貫、ミトラ、元帥の得物はムチ、名はヴァルナ、ランギの得物は紐、名はアヌ。

大黒天と天照も得物に触れた、大黒天の得物は身の丈程の大斧、名は断罪、天照の得物は薙刀、名は悲哀の薙刀。

ダグザは構えながら今いるメンバーを確認して一気に何が最良の配置かはじき出した。

「ニヨルド、ククルカン、沙羯羅は阿修羅と帝釈天の護衛。  
アルテミス、コアトリクエは中盤で前衛のサポート、危険になり次第護衛の後ろに下がれ。

前衛は俺、祝融、モリガン、メルクリウス、緊那羅、ケツアルコトル、無理はするな、一人だろうと死ぬ事は許さない。

そして阿修羅、帝釈天、貴様らは今この場を生き残る事だけを考えている、ヘリオスとタナトスが帰って来るまで耐えろ、被害は気にするな、もうホーリナーなどいやしない」

ダグザは周りを見て笑った、我先にと逃げるホーリナー達、本当に生き死にのこの世界で生きている人間とは思えなかった。

「さすが知識神だぜ！相手を殺すんじゃなくて生き延びる事だけを考えてやがる！」

「叔父ちゃん！そんな事より早く殺してえよ！ってかもう行くからな！」

素戔嗚は毘沙門天の返事を待たずに走り出した、それが合図となり全員が走り出す。

バチカンで起きている事など何も知らず、激しい戦い未だ繰り広げているタナトスとヘリオス、お互い傷だらけで限界と言っても過言ではない、だがただ本能の赴くままに鎌を振り、火を放つ。

「デメエ、ハヤク、シンドラドウダ？」

「負けない、ツスよ、タナトスこそ、ボロボロ、じゃないツスカ」

ただの消耗戦、奇策を尽くしてもことごとく返され、攻撃を受けてもすぐに次が来る、気持ちは前へと先走っているが、既に肉体は動かすだけで悲鳴をあげる程。

「「こういうのは、どうツスカ？次の、一撃で、終わらせる、つてのは」」

「オモシレエ、ナガクハ、モタナイナラ、ツギデ、キメルカ」

ヘリオスはニヤリと口元だけ笑うと、口を大きく開いた、その瞬間ヘリオスの体の炎が勢いを増す、口にはエネルギーが集約され、炎が揺らめく轟音が響き渡る。

タナトスは6つのスケイルを体から伸びた6つの紐で掴み、紐を絡めていくと風車のようになった、ギリギリと巻かれ、力を蓄えてるかのごとく不気味に軋んでいる。

二人の動きがピタリと止んだ瞬間、ヘリオスの炎から凄まじい炎が

照射された、空気をも燃やし、膨大な質量と共にタナトスに襲い掛かる。

タナトスは風車状になったスケイルを回す、ヘリオスの炎が当たると炎すらも斬り刻み、高エネルギーの炎を散らす。

## 29：圧倒的な差

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

元帥の前にはケツアルコアトルが出て行った、元帥は迷わずにヴァルナを振るうが、ケツアルコアトルは見えないスピードで襲って来るムチを軽々と避ける、一足で距離を詰めると、射抜くような突きを放つ、しかし、気付いたらウェミクスにはヴァルナが巻き付いていた。

「やりますね」

「初撃を避けたのはさすがと言った感じだね」

「どのようなスピードでも私には当たりませんよ」

ケツアルコアトルは笑顔を作ると体を動かそうとした、しかし、一瞬にしてケツアルコアトルの顔が曇る、体がどうやっても動かない、まるで体中に何かが絡まり、自分の体をその場に縛り付けているかのように。

「ダーリン！」

ケツアルコアトルの後ろの地面からコアトリクエの得物、ローズテイルが現れ、勢いを殺しきれずにケツアルコアトルを貫いた。ケツアルコアトルは解放された瞬間、その場に倒れてしまう。

「残念だったね、僕と繋がったらその時点で終わりだよ」

元帥はケツアルコアトルを物のように見下し、阿修羅の方へと歩を進める、その前にはコアトリクエがいるが、元帥は軽く手首を動かすとヴァルナが消え、気付いた時にはコアトリクエが吹っ飛んでいた。

素戔嗚にいち早く斬りかかったのは緊那羅だった、体中に梵字を浮かべ、身の丈程の七支剣を持った素戔嗚は不気味な笑みを浮かべながら走って近寄る。

緊那羅は素戔嗚の前で急停止すると、一瞬で抜刀からの連撃を放つ、素戔嗚はその瞬間、緊那羅と全く同じスピードで連撃を放ち相殺した。

「なっ!？」

「この程度かよ!最強剣士って言うからもうちょいまともだと思っただけだな」

緊那羅は危険を感じて間合いを取ろうとしたが、素戔嗚はそれよりも早く緊那羅の後ろに回り込んでいた。

全てが上回っている、緊那羅の連撃を真っ向から受けて相殺したのは素戔嗚のみ、否、素戔嗚だけであろう。

そして今、後ろを一瞬にして取られてしまった、緊那羅は防御の体勢に入るが、帝釈天を思い出した、防御もろとも吹き飛ばされた帝



釈天を。

時既に遅し、素戔嗚はそのままなりふり構わず緊那羅を吹き飛ばした。

ランギの事を一瞬で囲んだダグザと祝融、ランギはアヌを腕に巻き付けるとそのまま構えた、それは得物で戦うのではなく、肉弾戦を仕掛けて来ている合図。

「フォーサイト」

そしてダグザと祝融の視線が合わさった瞬間、二人は一瞬でランギとの間合いを詰めた。

素早い連撃による板挟み、しかしランギは意図も簡単にそれを避け、隙などないと思われた二人の体勢を崩し、ダグザには腹を殴り、祝融は蹴り飛ばす。

まさにそれは一瞬の出来事、立ち上がった二人は自分の腕を見て固まる、アヌが二人の腕に巻き付いているからだ。

アヌはY字になりランギの手元では一つに纏まっている、二人の体勢が整う前にランギはアヌを引いた、宙に投げ出されると、阿修羅達の目の前に叩き付けられた。

モリガンの目の前には天照がいる、モリガンはシヴァを引きずりながら近付く、対峙する天照は感情らしい感情を浮かべず、ただ目の前の光景を絵として捉えている。

「ホーリナーの天才ですか？どれほどのものか拝見させていただ

きました、私たちの相手ではありませんね、命が惜しくば退いて下さい」

モリガンは尋常ではない殺気を放った、それはなめられてる事に対する怒り、その冷たく射抜くような視線は天照を貫いているが、天照は全く気にせず構えた。

「残念です、無駄な命を奪う事になってしまい」

モリガンは何も言わずにシヴァを投げはなった、天照はそれを真っ正面から受けると、地面をえぐりながら踏ん張る。

「ナメてると痛いめに会うよ」

天照が周りを見回すとティルピングに囲まれていた、遠くからニョルドがVサインを送っているのが見える。

「この程度で私は仕留められません」

天照の目に梵字が浮かんだ、そして右側に跳び、ティルピングを一つ打ち落とすと、ティルピングの動きが狂い全てが地面に落ちた。

「見えれば穴は分かります」

その時モリガンに出来た驚きという隙、当然天照はそれすらも見逃さなかった。

モリガンが気付いた時、目の前には天照がいた。

「さようなら、天才」

モリガンはゆっくり視線を落とすと、腹を悲哀の薙刀が貫いていた、  
ゆっくりと口から血を流し、天照を憎悪の眼差しで睨む。

「絶対に、ころ……………、……………す」

モリガンはそのまま天照の服を掴むように倒れた。

「モリガン！」

ニヨルドが周りの静止を無視して走り出す、素早く天照との間合い  
を詰めると、牽制程度にティルピングを投げる、天照はそれを軽々  
と弾いた。

ニヨルドはティルピングを両手に握ると、素早い連撃で天照を圧倒  
しようとする。

「ニヨルド、あなたもモリガンと同じくらいの逸材ですね、遠距離  
型にも関わらず近距離戦をも得意としている、ですが……………」

天照は悲哀の薙刀で素早くニヨルドの手元を突き、ティルピングを  
弾き飛ばした、そのまま左肩口から右わき腹にかけて斬る。

「まだ若過ぎます、モリガンと同様に」

ニヨルドも倒れてしまった、そして悲哀の薙刀の血を払うとニヨル  
ドを跨いで歩き出す。

メルクリウスの目の前には月夜見がいる、メルクリウスの目には恐れが見える、そして月夜見のキャップから覗く頭髪は梵字が浮かぶ。

「恐怖、絶望、そればかり」

それはメルクリウスの考えている事、メルクリウスはそれにより絶望を隠しきれなくなってしまった。

その時、後ろに強く引かれる感覚に襲われると、体全体を浮遊感が襲う、まさに自分は空を飛んでいる。

「アルテミス！よろしく！」

メルクリウスのいた所にはククルカンが立っている、アルテミスはメルクリウスをキャッチすると、既に気絶していた。

「何か何か、こんなやり方気に入らない」

「関係ない」

「まあうちが全力で止めちゃうから良いんだもんね！」

ククルカンはルドラシスを振り上げて思いっきり振り下ろした、月夜見は軽々と避けるが地面を砕いた事により、飛び散る瓦礫、月夜見はそれを上空に回避するが、ククルカンはタイルを剥がして月夜見に投げつけた、それを不浄の苦無で弾くが、凄まじい勢いでルドラシスが振り下ろされた。

「終わり終わり！」

しかし、月夜見は丸太えと変わってしまい、ククルカンが両断した

のは丸太だった。

すぐさま後ろから気配を感じて振り向こうとした時、腹に鈍い痛みを感じた、ククルカンはゆっくりと腹に目をやると、屈んだ月夜見と腹に刺さる不浄の苦無。

「御免」

ククルカンは不浄の苦無を刺したまま倒れてしまった。

「アンタ絶対にぶつ殺す！」

走り出そうとしたアルテミスは沙羯羅が無言で止める、冷静になって見ると、こちらで戦えるのは沙羯羅、阿修羅、帝釈天、アルテミス、そして向こうは全員が無傷で目の前にいる。

「（あと少しだから）」

沙羯羅は3人にしか聞こえない声で言った、しかし、それが何の事か3人には一切分からない。

「ちなみに今から3人には私の命令に従ってもらうよ？無駄死にだけは避けたいからね」

沙羯羅が一步前に出た、周りには傷付き倒れている仲間達、阿修羅と帝釈天は怒りが暴発しそうなのを抑え、目の前の今まで仲間だった敵を睨む。

「沙羯羅ちゃん、大人しく阿修羅ちゃんと帝釈天を渡しなよ、じゃないと僕達、君達を傷付けなきゃいけないじゃん？」

元帥が不気味な笑みを浮かべながら沙羯羅との交渉に持ち込む、しかし、それを上回る不気味な笑みを浮かべる沙羯羅。

「離反、謀反で記憶の抹消、そして捨て駒に使って魂胆でしょ？  
かつて貴方達が迦楼羅にやったように」

元帥と元老の顔が曇る、阿修羅と帝釈天は驚きの表情を浮かべている、毘沙門天が険しい顔をしながら沙羯羅を睨む。

「テメエら、ヘリオスとタナトスはまだ戦ってたぜ？大人しくしてもらわなきゃ困るんだよ」

「つまり凶星って事ね？」

『沙羯羅OKだよ！』

『盛大な花火を散らそうじゃないか』

沙羯羅がニヤリと笑う、そう、敵を騙すには味方から、沙羯羅の耳には小型の通信機が入っている。

「やれるもんならやってみなさいよ？それでも出来るんならね……」

……

直後に爆音、この戦いで使われる仮想空間を制御する部屋が爆破された、それと同時にヘリオスとタナトスが吐き出される。

理解出来ない二人は異様な光景にパニックに陥る、倒れている仲間達、向かい合う仲間と元帥と元帥、知らない者達、冷静さを失わないタナトスですらパニックに陥ってしまった。

「説明は後だよ、……………コレで形勢逆転ね？」

「沙羯羅ちゃん、いくら何でもタナトスとヘリオスが加わったくらいじゃ僕達には太刀打ち出来ないよ？」

馬鹿にするように元帥は構えた、しかし沙羯羅の目からは自信が失われていない。

「これならどう？」

沙羯羅と元帥の間に二人が現れた、この場にいた全員が気配に気付けなかった、それだけで分かる、神選10階とは格が違う、元帥や元老、もしくはそれ以上。

片方は身の丈以上の金棒、片方は鎖鎌。

「ボス！？迦楼羅！？」

そう阿修羅が叫んだ。

### 30：形勢逆転（前書き）

本日3連続投稿を行います！



### 30：形勢逆転

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

そこにいたのは金色孔雀と迦楼羅、しかし二人とも今までの雰囲気とは違う、阿修羅の知っている二人はここまで威圧的な気配を放つような人間ではない、率直に言えば弱い。

しかし、今の二人は威嚇するかのようにその力を誇示するような気配、馬鹿でも分かる、化け物の気配だと。

「久しぶりだね、毘沙門天」

「金色孔雀じゃねえか、テメエみたいな奴がイヤに大人しく過ごしてると思ったら……」

迦楼羅を見た。

「こういう事だったのか？」

「久しぶりじゃないか、毘沙門天、まさか君が自分の子供、しかも女性を傷付ける程に落ちぶれていたなんて、本当に落ちぶれたね？」

迦楼羅の纏う雰囲気は全く違うものとなっている、それは脳内を無理矢理封じられていたのを解除したから、コレが本来の、先代の迦楼羅と言われる存在。

「おいテメエら！俺様にも何が起きてるか教えろ！何であいつらが

倒れて元帥や元老が敵になつてんだよ!？」

「タナトス、ヘリオス、阿修羅と帝釈天を守つて、今言えるのはそれだけだよ」

沙羯羅は臨戦態勢のため、顔を向けずにただそれだけを言った。しかしそれが沙羯羅の最大の誤算、ヘリオスの纏うオーラが変わり、まがまがしい気配が一体を覆う、そして、得物顕現せずに、真っ黒な炎がバチカンを覆う。

「お前ら、阿修羅に何するんすか？」

「迦楼羅!とりあえず怪我人を安全な所に!」

「りよおかいつ」

迦楼羅は一瞬でその場から消えると、次々と倒れた者達を回収する、それを見て金色孔雀は構えた、隣に現れた迦楼羅も構える。

「タナトス、後ろは頼んだよ」

沙羯羅は金色孔雀の指示に驚いていた、後ろには既に天照と素戔鳴がいる、ヘリオスはゆっくりとその二人に向かう。

「沙羯羅、後はアルテミスさんでしたっけか？」

「そうだよ」

金色孔雀は初対面のアルテミスを呼ぶ。

「阿修羅と帝釈天は任したよ、月夜見が見当たらないからね」

「ちょっと待ちなよ！あんたら二人でコイツらを相手にしようってのかい！？」

しかし迦楼羅と金色孔雀の相手は3人だけではなくなった、大黒天がそこに加わったからだ。

「金色孔雀、4人になったみたいだよ」

「久しぶりに本気出すには丁度良いんじゃない？」

「鬼にボコボコにされたくせに良く言うじゃないか」

「コレがいけないんだよ」

ドンと鈍い音をたて落ちるアングル、ベストのようになっていて、それは仮にそれが砂ならば10キロは下らないであろう。

「またベツタベタな筋トレな事」

「こうしなきゃ本気出しちゃうんだもん、こうやってバレないようにやってたから迦楼羅は記憶を取り戻せたんだよ？」

その瞬間迦楼羅の表情が陰しく曇る、それは憎悪、瞳は毘沙門天を睨んでいる。

「そうかもね、彼らにはたっぷり恨みがあるし」

それを意に介さない4人、しかし確実に伝わって来る緊張感、今ま

での戦いとは違い、確実に元帥達は本気を出して来る。

「毘沙門天、あの二人ってやっぱり強いのか？特に金色孔雀とか？」

「迦楼羅は知つての通りだ、金色孔雀に至っては未知数だ」

「兄者、データでしかありませんが、金色孔雀が支部長になってから死者はゼロ、表向き戦死となっているのは離反しています」

「金色孔雀、バレバレじゃないか」

「ありやうや」

未だにおふざけモードが抜けない二人、しかし、一流はスイッチがあるもの、超一流はスイッチのバレないもの。

「だって部下が死ぬの嫌じゃん？隠してたつもりなんだけどなあ」

金色孔雀は支部員には手に負えない敵や、神選10階が出て来れない時は秘密裏に任務を終わらしていた、また、あまりに弱い人間や戦い向きではない人間はホーリナーの世界から遠ざけたりしていた。

「危険因子二名、即排除」

「嫌だなあ、絶対に怪我しそつだもん」

「久しぶりに血がたぎつて来たぜ！」

「若造に負けはしない」

「ちなみに俺、毘沙門天よりも年上だからね？」

迦楼羅の発言に毘沙門天以外が啞然、沙羯羅や帝釈天、阿修羅とアルテミスすらも、迦楼羅の見た目は明らかに20代半ば、むしろ神選10階のダクザと年が同じと言われても納得出来る、見た目通りの金色孔雀よりは確実に年下。

しかし毘沙門天はどう計算しても40歳は超えている。

「成長まで止まったんじゃないのかな？」

「まあ良いや、……………始めようか」

元帥の一言で全員が走り出す、まず先陣を切ったのは迦楼羅とランギ。

迦楼羅はランギまで残り2mまで来ると、その場から消える、次に現れた時には大黒天に首切の鎖が巻き付いていた。

「ランギだっけ？対大量戦術つてのを見せてあげるよ」

大黒天をそのままランギに向かって投げ飛ばす、ランギはそれを避けるが、軌道を変えて大黒天は元帥に突っ込み、二人で吹っ飛んで行った。

「さあ、きなよ？」

ランギは牽制程度にアヌを迦楼羅に向かって放つ、迦楼羅は首切を逆手に握り、アヌを斬りつけると、そのまま勢いを増して毘沙門天に向かう。

「ランギの馬鹿野郎！」

毘沙門天は岩貫で防ぐが、既に迦楼羅が懷に潜り込んでいた、そのまま蹴り飛ばされてしまう。

それを見ていた阿修羅達は格の違いに驚かされてしまう、神選10階では全く歯が立たなかった相手を、圧倒的な力の差で、たった一人で圧している。

「はあ、迦楼羅ってあんなに強かったんだ」

「話は聞いた事があつたが、まさかここまでとはな」

金色孔雀は後ろの方で諦めて傍観している、欠伸までしている始末。

「気を引き締めないと死ぬよ？」

気付いたら金色孔雀の体に元帥のヴァルナが巻き付いていた、そのまま宙に放り上げられ、その先には大黒天、しかしこの絶望的な状況でも大黒天が見たのは金色孔雀の笑み。

金色孔雀は空中で動けないにも関わらず一回をして、大黒天に向けて碎骨を振り下ろす。

「んぐう」

縛られていながらも凄まじい力、金色孔雀は着地と同時にヴァルナを解き、怯んでいる大黒天に向けて碎骨を振るう、大黒天は防いだが、防御もろとも吹き飛ばされてしまった。

しかし、その一瞬で元帥は切り返し、金色孔雀の背中までヴァルナが迫っていた。

「それはさせられないな」

ヴァルナには首切の鎖が巻き付く、しかし、迦楼羅の背中には突きを構えた毘沙門天が迫っていた。

「チエストオ！」

迦楼羅はバック宙で突きを避け、毘沙門天の頭上を通り過ぎた、その瞬間、迦楼羅の回転が速まり、膝が毘沙門天の後頭部を打ち抜いた。

普通ならそのまま地面と顔面が鈍い音を奏でるはずだが、毘沙門天の首に鎖が巻き付き、迦楼羅に背後を取られてしまう。

「君は僕の大切なものを一度のみならず、二度までも奪おうとするんだね？」

「やっぱりあいつはお前のだったんだな？でも残念な事に両方ともやったのは俺じゃねえ」

「全部君が裏にいた！いつもいつも、君は、……………天竜は何を考えている！？」

迦楼羅が怒りを露わにする。

「テメエがキレたのを初めて見たぜ、乾闥婆けんたつばの時はキレなかったのになぁ？」

乾闥婆という言葉に阿修羅や帝釈天は理解出来ない様子、沙羯羅は軽く二人に顔を向けた。

「乾闥婆は摩和羅女の母親だよ」

迦楼羅の表情は徐々に徐々に怒りに染まる、しかし、その怒りの意味が阿修羅達には分からないでいた。

「まあどっちも俺は殺してないんだからかつかするな、俺に怒りをぶつけても意味ないぜ？……それともあれか？娘がそんなに大事か？」

迦楼羅の手に力が入る、それは毘沙門天に対する怒りから。

「君の手段を選ばないやり方が気に食わないん」

迦楼羅は急に横に飛び退く、毘沙門天の首筋ギリギリを苦無が通り過ぎた、今までいなかった月夜見の物、迦楼羅は苦無が飛んできた方に目をやり、鼻で笑った。

「まさかそんな所にいるとはね」



31：怒り、そして悲しみ（前書き）

2 発目です！

### 31：怒り、そして悲しみ

V a t i c a n   V C S O   h e a d q u a r t e r s

タナトスは得物を顕現して天照と素戔鳴と対峙する、しかし、怒りに吞まれたヘリオスは黒い炎を撒き散らしながら二人に向かう。

タナトスは焦っていた、目の前にいる二人があり得ない力を持っているのは容易に想像出来る、しかし、肝心のヘリオスがまともな思考を失っている今、勝ち目は少ない。

「おいおい、感情任せじゃ勝てないぜ？お前らの本気が見てえんだよ」

「素戔鳴、好機です、今は任務遂行を最優先にしましょう？」

「だけど姉ちゃん、あの女剣士もクソ以下に弱くて運動不足なんだよ」

その瞬間タナトスの殺気が一気に膨れ上がる、それはヘリオスの炎と同じ様に辺り一帯を呑み込むまがましいもの。

「緊那羅をやったのはテメエか？」

「緊那羅？女剣士がそうなら拙者だぜ」

タナトスは走り出した、それは天照や素戔鳴の方ではなく、我を忘れてるヘリオスの方へ。

タナトスはそのまま顔面に回し蹴りを放つと、ヘリオスを吹き飛ばした。

ヘリオスは顔面を強打して、流血しながら事態を把握していない間抜け顔でタナトスを見る、しかし、ヘリオスが冷静さを取り戻したのも事実だった。

「ヘリオス、奴らを本気で殺すぞ」

「そんな事したらバチカンが壊れちゃうツスよ？」

「大丈夫だ、俺様達のホームはバチカンじゃなくなったらしいぜ？  
ここは戦場だ」

「なら気にする事はないツスね」

ヘリオスは立ち上がり、得物を顕現した。

「素戔鳴、後でお父様に怒られるんでしょうね？」

「姉ちゃん助けてくれないのかよ!？」

「私は忠告しました、残念ですけど……」

天照は目を伏せる、素戔鳴はショックに打ちひしがれていると、タナトスとヘリオスの気配が一瞬で膨大なものと化す、その威圧感に天照と素戔鳴は冷や汗を流す、相手の力を見誤っていたと。

「シンクロ!」

黒いローブに包まれ死神と化したタナトス、全身が炎に覆われ太陽

と化したヘリオス、その力は素戔鳴や天照の想像の遙か上空を行っていた。

推測でしかないが、今のヘリオスやタナトスは元帥や元老、もしくはそれ以上の力。

「姉ちゃん、マジでコレは謝んねえとな」

「本気で行きますよ」

天照は悲哀の薙刀を構え、目には梵字が浮かぶ、素戔鳴は破壊の剣を構え、全身を梵字が覆う。

最初に駆け出したのはヘリオスだった、一瞬でその場から消え、気づいた時には素戔鳴の後ろにいる。

「見えるぜえ！」

素戔鳴は破壊の剣ぎでヘリオスを薙払うが、ヘリオスは揺らいで消えてしまう、そして、横からタツクルを食らい、派手に転がり壁に叩き付けられる。

それだけでは終わらず、ヘリオスは火球を何発も浴びせる。

「素戔鳴！」

「ユダンハキンモツダゼ？」

天照の目の前にはタナトスがいた、天照はタナトスの斬撃を紙一重で避けるが、体に紐が巻き付いていた。

「シヌナライツショがイイダロ？」

一瞬重力を失い、気付いたら宙を舞っていた天照、そして、素戔鳴が叩きつけられた方へと吹き飛ばされる。

それだけでは終わらない、ヘリオスは口を開けてエネルギーをタメ、一気に天照と素戔鳴に向けて照射する。

建物を貫き、炎上させて全てを破壊する、タナトスは勝利を確信してシンクロを解く、ヘリオスも照射を止めるとシンクロを解いた。二人が笑いながら炎上していると、そこから2筋の赤い光が放たれ、タナトスとヘリオスの肩を貫く。

その瞬間、凄まじい風が吹き荒れ、炎が一気に晴れていく、中から現れたのは予想以上に傷の少ない天照と素戔鳴だった。

「素戔鳴、叔父様のためにバチカンを壊すまいと思いましたが、私たちが負けては意味がありません」

「そうだな、容赦なく行かせてもらうぜ」

素戔鳴は一瞬で消え、二人が気づいた時には後方にいた、そして、一拍置いて二人の体は急に切り刻まれる。

「クソ！」

「な、何スか？」

二人は片膝を着きながら素戔鳴を見る。

「ツイスター！」

破壊の剣から伸びる竜巻が二人を呑み込む。

「レイン！ライトニング！」

竜巻の中に豪雨が振り始め、凄まじい落雷が二人を貫く。

「ぐあああああああ！」

「くっ！」

片膝を着くタナトス、レーヴァテインに支えられながら何とか上体を起こしているヘリオス。

「まだ起き上がれる力があるんですね？」

天照は二人に向かって人差し指を向ける。

「レイ」

指先から2筋の赤い光が放たれ、タナトスとヘリオスを貫いた。二人は必死につなぎ止めていた意識を手放し、その場に倒れてしまふ、とどめを刺そうと近寄る天照と素戔鳴。

「そこまでよ！」

声がバチカンに響き渡り、天照と素戔鳴のみならず、金色孔雀や迦楼羅達まで止まり、声の主を見た。

「貴方達、私に死なれちゃ困るんでしょ？」

そこには首に夜叉丸を突き付けている、全員が青ざめる、阿修羅を奪還しようとしていた者も、阿修羅を守ろうとしていた者も。

「あと、もう一人はどこに行ったの？」

「ここだ」

今まで隠れていた月夜見が現れる、月夜見は帝釈天の首もとに不浄の苦無を突き付け、阿修羅を睨む。

しかし格好がおかしい、それは今まで阿修羅を守っていたアルテミスアルテミスの体をしているからだ。

「得物を下ろせ、さもなくば……………」

アルテミスアルテミスの格好をした自称月夜見の不浄の苦無が帝釈天の首を傷付ける。

「アルテミスに化けてたのね？ただ、それじゃあ私は夜叉丸を下ろさないわよ？」

「だから交換条件」

月夜見は一瞬で元の姿に戻る、全員が見ている中で誰にもタネがバレずに姿を変えた。

「拙らは、ここにいる、全員の命と引き換えに、阿修羅様を、要求する」

全員の顔が強張る、いくら金色孔雀と迦楼羅、そして沙羯羅が戦える体勢にあったとしても、辛うじて息をしている者達の事まではフオローフオロー出来ない、つまり、交換条件を呑むか却下するか。

そんなせめぎ合いの中、阿修羅はボロボロになり倒れているヘリオスヘリオスを見た、そう、阿修羅が死ねば少なくとも今倒れている者達の、

僅かな生への望みが消えてしまっ。

「嘘だったら、死ぬからね？」

「嘔吐かない」

「その条件、呑んでやるわよ」

阿修羅は夜叉丸を消し、月夜見に近寄る、帝釈天と目が合い、帝釈天は無言で阿修羅を止めるが、阿修羅は軽く微笑むと月夜見の腕を掴んだ。

「離しなさい」

月夜見はコクリと頷くと、帝釈天の背中を押して遠ざける。  
阿修羅が月夜見に近付いた瞬間、素戔鳴、天照、大黒天が阿修羅を囲んだ。

「迦楼羅、退避だよ、ヘリオスとタナトスをよろしく」

迦楼羅がいなくなるのと同時に、ヘリオスとタナトスの姿も無くなった、これで全員の命が繋がれた。

「貴様ら、今日を忘れるな、すぐに潰しに行く」

「テメエらじゃ無理だ！分かってんのか？叔父ちゃん達に刃を向けたって事はVCSOに刃を向けたのとおんなじなんだぜ！？」

「これだからガキは困るんだよねえ」



金色孔雀のふざけた笑みに殺気がこもる、それは素戔嗚が一步退く程の威圧感。

「日本支部は彼らを全面的に擁護する、そして、V S C O、天竜家、ひいてはクロス一族、カリルドール、コルトヴィレツィアに宣戦布告する！」

大黒天、そして元帥、ランギ、毘沙門天の顔が驚愕に染まる。

そう、金色孔雀が宣戦布告したのは天竜家と同じ様な力を持つ一族、そして、その全てが特別な力を持っている、阿修羅の“紅蓮の剣”、帝釈天の“白銀の盾”の様な強力な力を持った一族。

「金色孔雀！テメエは戦争ぶっかけてんのが理解出来てるのか！？」

焦っている毘沙門天を睨む金色孔雀。

「日本支部をナメるなよ？」

そこに凄まじい轟音を上げ、瓦礫を破壊しながらバチカンに突っ込んで来た武装された大型トレーラー、運転席には迦楼羅がいる。

「早く乗りなよ」

今にも噛みつきそうな帝釈天を金色孔雀が担ぎ、トレーラーの貨物部分に乗り込む、沙羯羅は相手に注意を向けながら乗り込んだ。

「阿修羅！絶対に迎えに行くからね！」

扉を閉めるのと同時に走り出し、邪魔な物を破壊しながらバチカンから去って行った、阿修羅を残したまま。



31：怒り、そして悲しみ（後書き）

次回は最終回！

最後までお付き合い下さい。

32…これから………(前書き)

ラストです。

32:これから……

Unknown

沙羯羅は凄まじい光景を目の当たりにした、貨物の中は傷付いた仲間達、意識を取り戻している者もいるが、大半が血を流しながら意識の戻った摩和羅女の治療を受けている。

ダグザは壁に背を預けながら小刻みに口を動かしている、摩和羅女は治療を、ズルワーンは治療器具を作り、アルテミスは摩和羅女の指示で動いている。

「金色孔雀」

ダグザは目を瞑ったまま金色孔雀を呼んだ、金色孔雀はというと、携帯での通話が丁度終わったところであった。

「貴様の知っている事を全て教えろ」

「君が考えてる事が全てだよ、これからどうなるかは」

「戦争だな？誰とだ？相手の戦力は？時期は？」

「まあVSCOとその裏組織、戦力は今回の5倍は下らないかな？時期は任意だよ」

ダグザは鼻で笑った、馬鹿馬鹿しいと、しかし、ダグザの瞳から力

は失われていない、それはコンピューターの様なダグザの脳内から弾き出された結果だ。

「勝機はあるの？」

「ああ、ここにいる奴らだけで間に合う、ただ、日本支部にも隠している戦力があるだろう？」

ダグザの言葉が沙羯羅と帝釈天の耳に入り、驚きの表情で金色孔雀を見た。

「さすがだね、一人は今すぐにも戦力になるだろうね、もう一人は……………」

「あいつは様子見だ」

「そこまで知ってたんだ、なら話は早いね」

「阿修羅を連れ去った目的は分からないが、恐らく血が関係しているのだろう、ただ、必要だが、使い方が分からないから生かしている、……………結果が分かっているのに過程が分からないとは、天竜も焦っているのだろうな」

「ホーリナーラグナロクで阿修羅あしゅろが死んだのはマズかったんだろうね」

続々と起き出すホーリナー達、中には金色孔雀が誰だか分かっている者もいる。

最悪の事態は回避した、幸い死者がいなかった。

「後はヘリオスとタナトスだけだな」

「ダグザ、良いか？」

帝釈天が初めて口を挟んだ、ダグザは何も言わずに目で訴える、早く言え、と。

「阿修羅は取り戻せるのか？」

「当たり前だ」

「ならヘリオスを縛っておいた方が良くと思う、阿修羅がいないと知れば暴れ出す、仮に取り戻せないとなると、俺も縛っておけ」

ダグザは笑いながら立ち上がり、ズルワーンに耳打ちした、ズルワーンは何やら慌てているが、ダグザにほぼ無理矢理押され、ヘリオスの前に行く。

渋々鉄を集めると、ヘリオスを壁に拘束した、鉄で体を覆い、顔だけが出ている状態で。

「ヘリオスとタナトス以外は目を覚ましたな？」

全員がダグザを見る、皆が皆、憔悴しきっている、ダグザの体にも傷があり、負け戦というのは明確だった。

「まず、阿修羅は天竜に奪われた」

全員が薄々気付いていたが、改めて言われると自分達の不甲斐なさを悔いる事しか出来ない。

「それで、コレからどうすんのよ？」

緊那羅がダグザに噛み付くように言う、自分が守れなかった不甲斐なさ、みすみす阿修羅を奪われたこの状況に苛立ちを覚えながら。

「まずはケツアコアトルとコアトリクエ、貴様らは支部に戻り元帥にこう伝える、『元神選10階、ならびに日本支部、それに荷担する者は日本支部で戦力を蓄えている』とな」

「何それ？日本支部を潰すつもり？」

再び緊那羅が噛み付く、今回の全容、そして金色孔雀が何故ここにいるのか理解出来ないのらしいようがない。

「いや、ここにいる支部長さんがまんまと宣戦布告してくれた」

「ボス、あんたって奴は！」

緊那羅が一瞬で金色孔雀に近寄り、思いっきり殴り飛ばした、支部長を平気で殴る支部員に全員が絶句、しかし、それが日本支部の流儀である。

「落ち着け、話はまだ終わってない」

「ダグザが焦ってないんだから信じるわよ」

緊那羅は苛つきながら座った、日本支部の人間からしたら緊那羅が金色孔雀を半殺しにするのは日常茶飯事、故に誰も口から血を流して倒れている金色孔雀を助けようと思わない。



「戦力の集中だ、これだけのメンツがいれば新たな神選10階だろうが潰せる、だが、支部長であるケツアコアトルを巻き込むわけにはいかない、貴様にはベラルーシ支部を守ってもらい、俺らの偽情報、時には正確な情報をリークしてもらう」

「何故情報を漏らす必要があるのですか」

「まずは貴様らの表面上はVSCO側という事を示すためだ、後は嘘と真実をリークする事による攪乱。

全てはバレるのが前提だ、本質は冷戦に持ち込む事、そして、全ての目を日本支部に集める事だ」

ダグザは嫌な笑みを浮かべる、そこにいるのは策士、真つ向から打ち合えば消耗戦になるのは必至、お互い手を出せない状態に持ち込む、それがダグザの狙いだ。

「だが勝利というのも全員が天照、素戔鳴、月夜見レベルになってもらうのが前提だ、それには」

「な、なんスカコレは！？阿修羅はどこに行ったんスカ！？」

ヘリオスが意識を取り戻し、暴れようともがいている、その声でタナトスも目を覚ました。

「祝融、その馬鹿を黙らせろ」

「はい」

祝融は得物を顕現し、ヘリオスの首を押し上げるように得物を突き付ける、その目は憎悪に歪み、今にも力が暴発しそうな状態だった。

「人の話を聞け、大人しくしていれば解放してやる」

「はっ、阿修羅が奪われたんだな？」

タナトスは痛む体を起こし、鼻で笑ってここにいるメンツを見た、それにより、ヘリオスの怒りは頂点に達する、徐々に徐々に周りが熱くなるのを全員が感じていた。

「ヘリオス、阿修羅を取り戻したいなら俺の言うことを聞け、確実に取り戻してやる」

祝融はゆっくりと得物である承影を引き、ヘリオスが喋れるようにする。

「まず聞く、貴様はコレからどうしたい？」

「阿修羅を取り戻したいに決まってるじゃないッスか！」

「今のままでは殺されるのがオチだろうがな」

「じゃあどうしろって言うんスか！？」

「強くなるに決まってるだろ」

ダグザは壁に背を預け、腕を組みながら全員に視線を向けた。

「コレから天竜を潰すまでの流れを説明する」

To  
be  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

### 32：これから……（後書き）

最後までお読み頂き本当にありがとうございます。作者自身、ストーリーの展開をちょこちょこ変えていたら完結までに時間がかかってしまいました、本当にすみません。

今回は息抜き、と思っていたら最終的にはかなり濃いものになってしまいました。

次回作の参考のためにもダメ出しや、アドバイス、または感想などを頂けると嬉しい限りです。

修羅の巫女も既に3作目も終わり、次は“結”にあたる4作目です。次回作の題名は「修羅の巫女4《天竜編》」となります。時間軸は激闘編から3年後。今まで明かしていなかった謎が全て解け、修羅の巫女の完結へと向かいます。

### 予告

人は彼の事を“漆黒の邪神”と呼ぶ。

VCSOを滅ぼす悪魔とも、

神選10階の悪しきを正す正義とも言われている。

一つ言える事は、漆黒の邪神の現れにより、VCSOが再び混沌の闇へと飲み込まれる。

くつくつく、完全になめられてるね。

面倒な事にならなきゃ良いんだけどね。

このままだと俺ら孤立しちゃうつしょ！？

何でも思い出せないんスか？

アタシ、足手まといなの。

僕が守るよ。ここで朽ち果てようともね。

何故、俺の計算は外れない！

“紅蓮の剣”はね、森羅万象神が置き忘れた残りかすよ。

天  
竜  
編

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0762d/>

---

修羅の巫女3 《激闘編》

2010年10月28日05時58分発行